ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十五）

鈴木　滿　訳・注

＊凡例

1．ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をＤＳＢとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig, Verlag von Georg Wigand. 1853.; Reprint. Nabu Press.

初版リプリント。因みに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2．ＤＳＢ所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3．ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をＤＳとする）を参照した場合、次の版を使用。

Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München, Winkler Verlag. 1981. Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

因みに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にではあるが、ＤＳの英語訳である次の版（略称をＧＬとする）も参照した。

The German Legends of the Brothers Grimm. Vol.I/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human

Issues. Philadelphia, 1981.

4．ＤＳＢ所載伝説とＤＳ所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すＤＳＢの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するＤＳの番号・原題を記す。ただし、ＤＳＢ所載記事の僅かな部分がＤＳ所載伝説に該当する場合はここには記さず、本文に注番号を附し、「ＤＳ＊＊＊に詳しい」と注記するに留める。

5．地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。

6．語られている事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があろうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といったご高教を賜ることができれば、まことに幸いである。

7．伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。

8．本文および注における〔　　〕内は訳者の補足である。

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その一）　一――　六〇　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第一・二号　一一七～二三五ページ、平成二十四年十一月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その二）　六一――　九〇　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第三号　四六三～五三〇ページ、平成二十五年二月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その三）　九一――　一三四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第四号　七五～一七六ページ、平成二十五年三月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その四）　一三五――　一八四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第一・二号　一五七～二八五ページ、平成二十五十一月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その五）　一八五――　二二五　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第三・四号　九五～一八〇ページ、平成二十六年三月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その六）　二二六――　二八八　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第一号　二〇九～三三〇ページ、平成二十六年十月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その七）　二八九――　三三九　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第二号

一五一～二四六ページ、平成二十六年十二月
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その八）　三四〇――　三九四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第三・四号
一～九八ページ、平成二十七年三月
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その九）　三九五――　四四四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第三・四号
九九～一九六ページ、平成二十七年三月
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十）　四四五――　四八四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七巻第一号
八三～一七八ページ、平成二十七年十二月
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十一）四八五――　五四四　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七巻第二号
五五～一五六ページ、平成二十八年三月
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十二）五四五――　六〇九　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七巻第三・四号
一～一〇九ページ、平成二十八年三月
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十三）六一〇――　六五九　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十八巻第一号
二九～一二九ページ、平成二十八年十一月
『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十四）六六〇――　七〇九　所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十八巻第二号
一八五～二六七ページ、平成二十九年三月

＊本分載試訳（その十五）の伝説

七一〇　彷徨（さまよ）う僧侶（そうりょ） Der wandelnde Mönch.

七一一　九種類の物 Neunerlei Dinge.　*DS116. Der Liebhaber zum Essen eingeladen. / *DS118. Das Hemdabwerfen.

七一二　沈んだ教会 Die versunkene Kirche.

七一三　四十人の騎士 Die vierzig Ritter.

七一四　ホレ夫人火炙（ひあぶ）り Frau Holle verbrannt.

七一五　豌豆畑（エルブセンアッカー） Der Erbsenacker.
七一六　ウンマーシュタットの話 Von Ummerstadt.
七一七　シュテルツェンと巨人たち Stelzen und die Riesen.
七一八　ツィンゼル洞窟（ヘーレ）とツィンゼル小人（メンヒェン） Zinselhöhle und Zinselmännchen.
七一九　シュヴィッカースハウゼンの騒霊（ポルターガイスト） Poltergeist zu Schwickershausen.
七二〇　シュトラウフ近郊のごろた石の十字架 Das Ackersteinkreuz bei Strauf.
七二一　殺しの丘（こがね）の黄金の太刀 Der goldne Degen im Mordhügel.
七二二　悪魔の城（トイフェルスブルク）と地獄（ヘレンマウアー）の壁 Teufelsburg und Höllenmauer.
七二三　鐘が十二鳴るのを聞く Zwölf schlagen hören.
七二四　お下げ髪の乙女 Die Jungfrau mit dem Zopf.
七二五　シュロイジンゲンの由来と名 Schleusingens Ursprung und Name.
七二六　死者たちの弥撒（ミサ） Die Todtenmesse.
七二七　死者の水溜まり（トーテンラッヘ）の水の精（ニクセ） Die Nixe aus der Todtenlache.
七二八　男の水の精（ヴァッサーマン）ハッケルメルツ Wassermann Hackelmärz.
七二九　雌鶏城（ヘンネンブルク） Die Hennenburgen.　　*DS576 Henneburg.
七三〇　荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ハーア）の話 Vom wüthenden Heer.
七三一　ハスフルトの乙女と幸運の花（ハスフルトユングフラウ） Die Haßfurtjungfrau mit der Glücksblume.
七三二　トリッケンハウゼンの湖の話 Vom Trickenhäuser See.

七三三　男の水の精の細長耳小人(ニクス　シュリッツオーアヒェン)　Nix Schlitzöhrchen.　*DS63 Schlitzöhrchen.

七三四　夢魔(アルプ)となった修道女 Die Alp-Nonne.

七三五　怒り(グリンメンタール)の谷の話 Vom Grimmenthal.

七三六　緑なす杭 Der grünende Pfahl.

七三七　母の祈り Das Gebet der Mutter.

七三八　石を抱えて Stein auf dem Herzen.

七三九　ヴァーズンゲンのとんちき Die Wasunger Streiche.

七四〇　天から降った石 Stein vom Himmel.

七四一　埋められた妖魔(コーボルト) Der vergrabene Kobold.

七四二　リーベンシュタイン城近傍なる悪魔の刈り取り地(トイフェルスマーテン) Die Teufelsmahten beim Schlosse Liebenstein.

七四三　ボニファツィウス巌(いわ)とルター山毛欅(ぶな) Bonifaciusfels und Luthersbuche.

七四四　アルテンシュタイン城周辺の山の精たち Berggeister um Altenstein.

七四六　巡礼の庭園 Der Wallfahrtgarten.

七四七　フルス山(ベルク)の男たち Die Männer im Flußberg.

七四八　真実(まこと)なるやをたれぞ知る Wer weiss ob's wahr ist?

七四九　ザルツンゲンの湖の幾つか Die Salzunger See'n.　*DS58 Der Döngessee.

七五〇　賭け物邸(シュピールハウス) Das Spiel-Haus.

七五一　石の揺り籠(かご) Die steinerne Wiege.

七五二　郁金香（チューリップ） Die Tulipane.
七五三　羊歯の種（ファレンザーメン）を見つけた男 Der Farrensamenfinder.
七五四　ゲルシュトゥンゲンの肉屋たち Die Fleischer zu Gerstungen.
七五五　リンディッヒ（リンディッヒ・フラウヒェン）の小奥方 Das Lindigsfrauchen.
七五六　ヴェラ河谷（ヴェラタール）の小人たち Die Wichtlein im Werrathale.
七五七　ホレ夫人の沐浴場（もくよくじょう）と池 Frau Hollen-Bad und -Teich.　*DS4 Frau Hollen Teich. / *DS5 Frau Holla zieht umher. / *DS6 Frau Hollen Bad.
七五八　愛の小川（リーベンバッハ） Der Liebenbach.　*DS106 Liebenbach.
七五九　射手オットー Otto der Schütz.　*DS568 Otto der Schütze.
七六〇　呪い Der böse Wunsch.　*DS569 Landgraf Phillips und die Bauersfrau.
七六一　ニッダ Nidda.　*DS573 Nidda.
七六二　ツィーゲンハイン伯 Der Graf von Ziegenhain.
七六三　ボイネブルクの姫君たち Die Fräulein von Boineburg.　*DS10 Fräulein von Boyneburg.
七六四　灰色衣装の小人 Das graue Männchen.
七六五　最後の葬送（トラウアーリッター）の騎士 Der letzte Trauerritter.
七六六　フランケン邦（ラント）の使徒 Des Frankenlandes Apostel.
七六七　沼の乙女（モーアユングフラウ）たち Die Moorjungfrauen.
七六八　聖ガンゴルフとミルゼブルク山 Sankt Gangolf und die Milseburg.

七六九　レーン山地(げビルゲ)の悪魔の造作いろいろ Teufelsbauten im Rhöngebirge.

七七〇　巌(いわ)の聖母像 Muttergottesbild am Fels.

七一〇　彷徨う僧侶

コーブルク公某[1]がバンベルク司教と合戦に及んだ。この戦いで十二人の若い貴族が捕虜となり、〔コーブルク〕市を見下ろす城塞へ連行され、そこで拘禁されたが、待遇はまずまずだった[2]。彼らは城の中庭に出て、気晴らしすることを許され、これについては何の支障もなかった。ある時城の礼拝堂付き牧師――これが底意地の悪い老僧で――中庭への階段を下りて来た。彼を嫌っていた若様たちがこの階段にどうやら〔干し〕豌豆を撒いておいたらしい。太っちょの年寄り坊主が足を滑らし、もんどり打って転がり落ちると、彼らは一斉にどっと高笑いをした。僧は恨み骨髄とばかり毒毒しい目付きで睨みつけ、ひっそり引き下がったが、青年たちのことを公爵に讒訴し、ここぞとばかり煽り立てて激怒させた。公爵は、その日の真夜中若者どもを処刑し、塔の見張りが角笛を吹き鳴らす数だけの頭を打ち落とせ、と命じた。この峻烈な命令は城中に知れ渡り、公爵夫人の耳にも達した。穏やかで優しい気立ての公妃は背の君に貴公子たちの助命を嘆願、その怒りを宥めたので、公爵は、では一人だけ死なせることにする、と言った。しかし奥方はこの一人の死をも阻もうと思い、塔の見張り番がこの夜全く角笛を吹けないよう、この男を呼び寄せ、安心できる部屋に閉じ込めた。もっとも酒と食べ物はたっぷり与えておいた――。さてそれでも青年貴族らは、真夜中、松明に照らされた城の中庭の処刑台に引き出された。不敬な所業を犯した罰として彼らに少なくとも恐怖を感じさせようというわけだった。刑吏は準備を調え、一同を跪かせて剣を振り上げた。けれども刑吏は公爵が命令を撤回したことを知らされていなかった。そこで真夜中を告げる角笛の音が塔から陰陰と響くと、親方ヘンマーリング[3]は血のような松明の光の下で血みどろ仕事に取り掛かった。首が一つ落ちた。――再び角

笛の響き――再び首が落ちた。そしてまた一つ、また一つ。これを聞き付けた公爵夫人は驚愕の叫びを挙げて失神した。塔の見張り番もこれを聞いて仰天した。角笛が吹かれたのを耳にした公爵[1]はかんかんになって塔へ急行した。陰険な坊主は塔の番人がいなくなっていることを知っていたのである。こやつ、見張り番の代わりに十二回目の角笛も吹き鳴らしたので、最後の公達の頭も落ちた。次いで復讐に狂った僧侶の心臓を公爵の剣が貫き、その体は激昂した殿に摑まれて塔から投げ落とされた。今も僧侶は亡霊となって聖モーリッツ教会の中や周囲を彷徨い歩き、時折あのトゥート・オーゼル[2]のように叫んで、衆人を恐れ戦かせる。

七一一　九種類の物

コーブルクではかつて九種類の物がさまざまの迷信的習俗に使われた。貴族の令嬢たちが何人か九種類の料理を――それも降誕祭の夜に――食卓に並べ、それで〔未来の〕恋人たちの姿を見ようとした。男たちは出現したが、めいめい小刀を携えていたので、乙女たちはびっくりして悲鳴を挙げて逃げ出した。逃げて行く娘らの後ろから男の一人が小刀を投げ付けた。乙女の一人が振り返り、投げた男の顔形を見定め、小刀を拾い上げた。やがてこの令嬢はかつて自分の前に現れた通りの夫を得た。もっともいつもこんな風にうまく行くとは限らない。

同地の他の娘たちの話。これまた降誕祭の宵、九種類の薪を集め、これを燃やした。それから一人が服を脱ぎ、最後に肌着まで取って、これを部屋の扉の前へ投げ出した。そして九種類の木の焚き火の傍に坐り、こう唱えた。

わたしはここで赤裸、なにも纏わず坐ってる

Neunerlei Dinge.

恋しいお方よ、やって来て、
膝に投げてよ、わたしの肌着。

すると男の姿が戸口から覗き、肌着を投げてよこした。これがその娘の未来の恋人だった。その時他の娘たちも友だちの真似をしたくて堪らなくなり、皆先を争って最初の娘の通りにし、脱いだ肌着を部屋の扉の前に投げ出して焚き火の傍に坐り込んだ。ところがそのため引き寄せられた〔未来の〕恋人たちの霊が一斉にやって来て、室外でどたばた恐ろしい争いを始めたので、娘たちは怯えきった。慌てて九種類の薪の火を消しはしたものの、だれも扉を開ける勇気はなかった。彼女らは肌着を着けずに寝床に潜り込んだ。翌朝見ると、扉の前では全員の肌着がまぜこぜになっており、しかもずたずたに引き裂かれていた。夫を持てた者は一人もいなかった。

七一二　沈んだ教会

コーブルクのすぐ近くでラウター川がある長閑な谷を流れている。この谷にはその昔町があり、住む者は悲嘆とは無縁の幸せな人たちばかりだった。死者を偲んで嘆き悲しむ万霊節が到来すると、町の住民は「わしらにゃ何も嘆き悲しむことはないのに、どうしてこの日を祀らにゃならんのだ。祭礼はやらんことにしようじゃないか」と言った。すると主なる神は、町民たちが大きく深い苦悩を味わい、万霊節を謙虚に行い、死者たちのために祈りを捧げるようにさせようと、子どもたちが死ぬ病を送りたもうた。――そこで子どもたちは全て死んでしまい、教会墓地は一日の内に新墓で一杯になり、棺桶にも事欠くような有様だった。そこで万霊節には大きな葬列が教会に向

かい、教会内はただもう溜息と啜り泣き、愁歎と名状し難い懊悩に満ち満ちた。子どもたちが死んで全ての幸せを奪われた父親母親の苦しみを見そなわした主は彼らを憐れみ、慈悲を垂れ、教会と墓地を子どもらの墓もろとも地中深くに沈めた。幸せな人人の町があったラウター谷のその場所は荒寥とした。祭日になると時折、そして万霊節には大抵、沈んだ教会の鐘が地の底で鳴るのが聞こえる。ラウター河谷に点在する村村の子どもたちはその場所を知っていて、あの言い伝えを語り合い、地下の音にひっそりと耳を澄まし、身震いして祈りを捧げる。

七一三　四十人の騎士

アイスフェルトの白鳥亭と鷲亭の間だが、ここにはその昔ヴェラ川が流れ、沼沢地を作っていた。甲冑に身を固めた騎士が四十人、敵勢に追われてここに入ったが、重武装が仇となって軍馬もろともどろどろの沼に嵌まり込み、哀れな最期を遂げた。

単純かつ不思議に遠い過去から響いて来たこの伝説は奇妙にもかの四十人のローマの騎士を示唆しているように思える。三月九日が殉教の日で、皇帝リキニウス[7]がキリスト紀元三一〇年の寒い冬、凍てついた沼地に裸で坐らせ、惨めに横死させた彼らを。

七一四　ホレ夫人火炙り

アイスフェルトでは、公現祭[8]が日曜日に当たると、教会での午後の礼拝の後、音楽付きで聖歌を歌う古い習慣が

ある。これには全住民が出席する。そして子どもたちと老人たちがお互いに「ホレ夫人が火炙りになる」[9]と叫び合う。この習慣について人人ははっきりしたことは何も言えず、彼らが語る話ではホレ夫人の名もその火炙り云云もまことに不得要領。いわく。昔むかしのこと、アイスフェルトに男子修道院と女子修道院があった。二つは向かい合っていて、地下道で繋がれていた。この通路は前の前の大火まではまだ開いていたが、その後埋められた由。修道士はこの通路を使って修道女の許を訪れたので、とうとう女子修道院長その人すら――決して喜ばしいことではなかったが――ただの体ではなくなり、男の赤ちゃんを、それも二人産んだ。そしてこの不始末を隠し果せることはできなかった。犯人は結局露見しなかったので、だれか世間一般ありきたりの色男――哀れな悪魔野郎――が彼女の情人だったんだ、と片付けざるを得なかった。これが本当の贖罪の牡羊で、その背中にはたっぷり重荷だの悪徳だのが載せられたもの。さて贖罪の牡羊はこの新しい重荷も我慢して背負ったが、女子修道院長は、年明けの日曜日の午後、衆人環視の下、市の広場で火刑に処されたのだ、と。彼女の名はフルダ[10]だったかも知れない。であれば、ホレ火炙りの謎は解けるのだが。

七一五　豌豆畑（エルブセンアッカー）

アイスフェルトから一時間の行程にあるクロック村[11]の高みの険しい丘の上にこの村の古い教会が立っている。昔はイルメン教会（キルヒェ）と呼ばれた。教会の近くに深い泉もあって、これはいまだにイルメンの泉（イルメンブルンネン）という名である。伝説にいわく。ここにさる王女が住んでいた。人目を忍ぶ恋をしてここへ駈（か）け落ちして来たのだ。けれどもとうとう持ち物が一切尽き、恋人も去った。手許（てもと）に残ったのはほんの一マースほどの〔干し〕豌豆（えんどう）だけ。王女はこれを手に取

り、しょんぼりアイスフェルトへ向かった。ところが豌豆の入っていた小袋には穴が開いていたので、クロック山の麓でほとんど無くなってしまった。イルミンの泉[12]の傍に住んでいた王女がどこへ行ったのか分からないが、落ちた豌豆は全部石に変わり、いまだに王女を偲ぶよすがとなっている。なにしろ丘の麓には毎日豌豆大で豌豆色の小さい丸い砂利――時折はもうちょっと大きいことも――が見つかるのだ。豌豆が石に変わったというこの伝説は――解釈を試みても構わないなら――貧しい者はなけなしの財産まで失ってしまうということと、苦悩の石化力を示唆していよう。豌豆石の伝説（DSB三七五）では貪欲を罰するため石に変えたのだし、パレスティナの伝説では嘘をついた罰である。かの地の、エルサレムからベツレヘムに行く街道の畔に、やはり荒寥とした不毛の豌豆畑がある。かつてここで一人の農夫が豌豆を播いていた。幼いキリストを連れたマリアが通り掛かり、「何を播いているのですか」と農夫に訊ねた。このアラブの農夫のがさつさは疑いもなくドイツのご同輩に引けを取らなかったので、ぶっきらぼうに「石だ」と返辞。「それではそなたの畑では今後それが稔りますように」とマリアは叫んだ。――以来この畑には食べられない石の豌豆ができるだけ。昔の自然科学者たちはこうした豌豆大石状形成物をピサ・ベトゥレヘミティカ[13]と呼んだ。

七一六　ウンマーシュタットの話

そもそもウンマーシュタット[14]は、いつも都市だった、という徴として、インマーシュタットなる名となった由。――昔はそう主張する者が少なくなかった。その証拠として――と彼らは言う――あるところ（どの建物だか分からない）の飛梁に以前ギリシア語で ἀεί ――これは「いつも」という意味に他ならない――と記されていた、と。

さりながらこの町の都市権が実証されるのはやっとこ一三九四年以降なのだ。とにかくこの年、住民はテューリンゲン方伯（ランドグラーフ）バルタザーに、都市の自由権、歳の市と週市開催権を認める文書が行方不明でなおざりになっているのを更新して戴（いただ）きたい、と上申、これが認められている。かつてウンマーシュタットはシルダの市民的愚行[15]（シルトビュルガー）――近在の市町村は、ウンマーシュタットの市民がそういうことをやらかしている、と言い囃（はや）したのだ――のため界隈で有名だった。これらの行為はヴァーズンゲン市[16]とかレーン山地（ゲビルゲ）のディッティス村[17]、その他いろいろの所の阿呆（あほう）ぶりとまずまあ同工異曲である。

　ウンマーシュタットの人たちは自分らが兎猟（うさぎ）をしたしだいが語られるのを聞きたがらない。彼らのちょいと愉快な話の一つは塩袋の一件だが、これは元来ウンマーシュタットの愚行とはいえない。コールベルクの農家に奉公している下男がウンマーシュタットの町を通ってコーブルクへ行こうとした。するとウンマーシュタットのある内儀が声を掛けて、どこへ行くんだね、と訊（たず）ね、そんならコーブルクから塩を一袋買って来ておくれでないか、と頼んだ。女が下男に預けた袋には下の隅にかなり大きな穴が開いていたが、これは女が紐（ひも）できゅっと括（くく）ってあった。コーブルクの塩商人はこの紐で括られた方を本当の口だと思い、結び目を解いて、なんとか塩を中に入れた。で、もっとぎっしり詰めようと袋をぐいと持ち上げたところ、逆さまになっていた袋の口からどさどさと塩が全部出てしまい、塩屋の手に残ったのは空っぽの袋だった。「こりゃまあなんたるこった、なんたるこった」とコーブルクの商人は叫んだ。「あんた、さだめしウンマーシュタットから来たんだな」。こう言われた下男は顔中真っ赤になり、おずおず口籠（ごも）もっていわく「うんにゃ、旦那（だんな）、わっちゃあそうでね。だども袋はそうだよう」。――一八五一年のこと、ある麺麭（パン）屋が麺麭焼き竈（かまど）を作らせた。壁工が一人、作業の間中に寝そべって、内側から粘土やら石灰やらを塗った。他の職人たちは外側から煉瓦（れんが）を積んだ。竈がとうとうでき上がったが、わあ、大変、中にいる壁工が

抜け出すことになっていた竈口が小さ過ぎた。哀れや、そやつは出られなくなった。自分で自分を塗り込めちまったわけだ。――かくなるしだいで、へまをやらかした職匠殿が無事におてんとさまの下へ出られるように、竈はまた一部を壊さなければならなかった。

七一七　シュテルツェンと巨人たち

アイスフェルトの町を下に見ながら、森を登って行くと、ブレス[18]の山麓にシュテルツェン[19]という名の村がある。ここには盲人や蹇者を癒やす鉱泉があった。泉は大層年古りた木立――かつては聖なる杜だったのではないかと思わせる――に囲まれた陥没地のような洞窟の中にあったが、足が治った人たちは泉の周りに使っていた撞木杖や義足をぶらさげた。すなわちこれが村の名の由来である。泉は普く有名だったが、やがてその近くに村ができると、村の住民は貪欲という悪魔に目を眩まされて癒やしの鉱泉で一儲けしようと思いつき、随分遠方から巡礼して来ることもあるのに、哀れな病者や癒やしを求める人人から水の使用料を取ることにした。すると噴泉は涸れこそしなかったが、治癒力を失ってしまい、効き目と申せば喉の渇きを鎮めるだけにあいなった。このシュテルツェンの樹[20]はイスの泉である[21]。同地方、アイスフェルト、シュテルツェン、バッハフェルト、ブルクグループ周辺にはその昔強大な巨人たちが棲んでいた。例のエルザスの巨人の玩具（ＤＳＢ三一）の伝説は、テューリンゲン山地のブランケンブルクその他でもしばしばお目に懸かるが、ここでもそっくりそのままのを聞かされる。シュテルツェンを見下ろす高みの巨人たちが、半時間ほど離れたトッセン谷で九柱戯をやっていた。球路の長さはトッセンタールからアイスフェルトにまで及んだ。巨人たち／騎士たち――伝説では両語まぜこぜ[22]――はシャ

ウム城を頂くシャウム山からブルクグループへ重い金鎚や木槌を投げ合ったり、ふざけ半分城から城へ水の掛けっこをしたり、黄金の球を投げたりした。

シュテルツェンの教会の祭壇に黄金でできた牡角鹿の枝角が隠されているという言い伝えがあった。とうとう祭壇を開けてみたところ、小さな銅製の櫃があるだけだった。櫃の中には聖人の遺骨が数本と黴び腐った古い羊皮紙の断片が一枚入っていた。バッハフェルトでは、特に降誕祭の折、灯火が行列を作って教会の中を練り歩き、教会の外にも出て来る。けれども灯火を持っている者の姿は目に見えない。シュテルツェンの教会は大層裕福である。柱状巨巌のブレス山の樹木は悉く、村ではなく教会のものである。その結果訴訟沙汰がしげしげ起こった。ブレスの右斜面では広広とした美しい草原が平野までなだれている。これはかつてハンシュタインの殿たち[23]の所領にして避難所[24]だった。ここに逃げ込んだ者には、それがだれであろうと、捕吏も徴募官[25]も手を出せなかった。ここの山地およびその他マイニンガー・オーバーラント[26]高地のびっしりと森に覆われた地域には、ひとりでにせっせと働く夜の鋸の伝説が語られる。これは貧しい木樵たちを少なからず豊かにしてやったものである。この鋸を動かすのは小人たちだ、との説もまずまああありはするが、こうした鋸とその作業は今日なおなんとも測り難い森の秘密のまま。

七一八　ツィンゼル洞窟とツィンゼル小人

マイニンガー・オーバーラント高地のメッシェンバッハ村[27]とラーベンオイスィヒ村の間にかなり狭い、けれどもとても長い鍾乳洞がある。ツィンゼル洞とかツィンゼン洞と呼ばれているが、ツィンゼルなる名は以前そこに棲んでいた山小人であるツィンゼル小人ないしドゥリゲライン[28]に由来する。そこから遠からぬところにもう一つ、ツィンゼル教会という

地下の窟（いわや）がある。もっともこちらもツィンゼルロッホ同様、前世紀〔＝十八世紀〕初頭、〔小人の〕会衆に見棄てられた。事のしだいは以下に述べる通り。メッシェンバッハのある農夫が自分の豌豆（えんどう）畑で一群のツィンゼルメンヒェンに出くわした。小人たちはふざけ散らして畑の畝（うね）をぴょこぴょこ跳び交い、青豌豆（グリンピース）を莢（さや）からつまみ食いしていた。そこで農夫はかんかんに腹を立て、やみくもに摑（つか）み掛かり、とうとうまく一人のちいちゃな縁無し帽[29]を取り上げた。そこでそのツィンゼルメンヒェンはひどく泣き喚（わめ）き――なにしろ帽子を被（かぶ）らずには家へ戻れなかったのでね――、占い棒（ヴュンシェルルーテ）[30]をあんたの畑に挿しとくからよう、あんた、それを使ってぎょうさん宝物を見つければええ、と約束した。そう言われて農夫は小人に帽子を返してやったが、不実なドゥリゲラインはいかさまぶりを発揮して畑一面棒を挿した。だもので農夫はその中から占い棒（ヴュンシェルルーテ）を見つけ出せず、従って宝物も見つけられなかった。また一説によれば、初め農夫は畑でツィンゼルメンヒェンを見掛けた折りすぐに怒鳴りつけ、ちいちゃい子ども相手のように棒で脅かした。すると小人たちはこぞって畑全体に棒を植え、棒を振り回したくなってもこれなら不自由しないよね、とおちゃらかしたのだ、とか。畑をめちゃめちゃにされて激怒した農夫はその後こっそり見張りを続け、ツィンゼルメンヒェンの一人から縁無し帽を奪い、抵抗できなくなった小人をかわいそうにぶち殺してしまったそうな。ツィンゼルメンヒェンは悲嘆にかきくれた。畑に挿された棒は一夜の内に樹木――それも神神しいまでの柊（とねりこ）[31]の老樹に育った。そして同じ夜ツィンゼルメンヒェンたちもいずこへか立ち去ってしまい、それからというもの、ただの一人もこの界隈に姿を見せなくなった。

七一九　シュヴィッカースハウゼンの騒霊（ポルターガイスト）

ヘルトブルク行政区[32]にシュヴィッカース――俗にシュヴァイカース――ハウゼン[33]なる村がある。この村にハンスあるいはハインリヒ・ケーゲルという名の農夫が住んでいた。一六六六年、復活祭（オーステルン）の一週間前のこと、彼は部屋の寝台の下でドンドン叩く音を耳にし、なにやら妖精を目にした。この精はヒンツェルマン（ＤＳＢ二七五）のように子どもの姿だったが、頭（かしら）に黄金（きん）の冠を被（かぶ）っていた。そして最初、自分は天使だ、と告げ、その後、ちょっと前に死んだある女の亡霊だ、と言った。大胆な者が数人、これと握手したが、妖精の小さな手が氷のように冷たいと感じ、ぞおっと身震いした。けれども精は握手をした者皆にドゥカーテン金貨九万枚という財宝を約束したので、勇気を奮（ふる）い起こしたしだいである。だってねえ、こんなに莫大な金額のためだったら、連中、悪魔や悪魔の祖母（ばあ）様の手だって喜んで握ったろうからなあ。その後この家ではドンガラドンガラけたたましい騒音が始まり、だれかれも到底中にいたたまれなくなった。そしてこのうるさい音と傍（はた）迷惑な妖精は家から村中にのたくり出したので、百姓衆は精魂尽き果て、ヘリンゲン[34]とヘルトブルクの坊さんたちに泣きついた。坊さんたち――ヘルトブルクの牧師ブーヘンレーダー修士、ヘリンゲンの牧師ヨーハン・ハーゼ――は連れ立ってやって来て、シュヴィッカースハウゼンの衆に向かって、おまえがたはろくでもない金のために握手なんぞをして生きている悪魔に身売りをしたのだ、と決めつけた。そこで一同は死ぬほど恐れ戦（おのの）いた。さて両牧師は熱誠籠（こ）めてもろともにひたすら祈り、説教し続けた。これには騒霊（ポルターガイスト）は辟易（へきえき）し、「あたしに子どもを一人おくれ、そうすりゃ退散してやる」と叫んだ。「糞（くそ）でも喰（く）らうがいい、子どもなんぞ渡すものか」とヘリンゲンの牧師が怒鳴れば、妖精の方も辛辣（しんらつ）に応酬、双方ああだこ

うだと言葉を尽くして言い合った。騒霊（ポルターガイスト）が引き下がらなかったので、ヘリンゲンの牧師も村に居坐（いすわ）り、とことこん粘り強く頑張ったため、とうとう月曜日の夜から三位一体の日曜日（トリニターティスゾンターク）[35]に掛けて妖精は出現しなかった。かくして三週間に三回、ドンドンガンガン、ドシンバタバタの騒ぎがありはしたが、結局祈禱（きとう）に制圧された。それというのも説教師たちが、我らは専ら祈（いのり）をなすことと御言（みことば）に事（つか）ふることとを務めん[36]、という聖書の言葉に従ったからであって、騒霊（ポルターガイスト）はシュヴィッカースハウゼンから退散のやむなきに至ったしだいである。さはさりながらこの種の民間信仰の妖精、まことに変化自在のヒンツェルマンももろともにいなくなったわけではない。なにしろごく最近にだってこの村に住む遣（や）り手の魔法医にして賢い男の許（もと）に群れを成して人人が訪れたことがあるくらいなので。

七二〇　シュトラウフ近郊のごろた石の十字架

ヘルトブルクとヒルトブルクハウゼンの中間に樹木の生い繁（しげ）った高い山があり、頂きには山城シュトラウフの巨大な廃墟（はいきょ）がある。俗にシュトラウフハイン[37]、あるいはシュトラオホハーンと呼ばれている。これは往古のヘンネベルク伯爵家の城の一つで、〔ドイツ〕農民戦争の折破壊されたもの。昔のあるヘンネベルクの史家はシュトラウフハイン城について以下のように記している。一六九八年四月のこと、野良にいた者たちが、城の廃墟と周囲の樹林で恐ろしい喚声が湧（わ）き起こり銃砲が轟（とどろ）くのを耳にした。どうやら悪霊どもか荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ヘーア）のしわざだったようだ。

シュトラウフ城址（じょうし）とシュトロイドルフ[38]からさして離れぬ禁猟林の中に、かつてある若者が死に遭遇、埋葬された場所がある。彼を悼む恋人が不滅の記念碑を建てて偲（しの）ぶよすがにしようと思ったがそんなお金はない。でも愛は思いつきを生むもので、娘はすぐにそれを実行した。ごろた石を入念に草原に並べ、十字架を形作ったのだ。この十

字架は悪意もしくは気紛れからしばしばばらばらに壊されたが、そのたびに娘は愛情籠もる手でせっせと十字架を作り直し、死ぬまでそうした。その後辺りのだれかれが故人の遺志――言葉にはされなかったが――を体して十字架の維持を引き受け、人間かその他の偶然により石の十字架に空隙ができると、それをまた填めた。かくして十字架は長いこと路傍に横たわり、民衆の記憶の中で常に伝説の証であり続けた。他の地域にも同様の話がある。マイニンゲン近郊では羊飼いや牛飼いらが芝の十字を手入れしている。ここの牧場でかつて男が急逝し、その草地にある牧人が十字架の形を掘ってやったのである。

七二一　殺しの丘の黄金の太刀

ミルツ村近郊、レームヒルト[39]から遠からぬところに、真ん丸で頂きの尖った丘がある。ここには今日に至るまで黄金の太刀が埋められているそうな。夜更けに旅人が一人、丘の麓を通り掛かると、騎馬の男に行き逢ったが、馬も男も首無しだった。旅人は震え上がって足を速め、後でつくづくこの身の毛もよだつ経験を思い返した。つまりはこういうしだいである。三十年戦争の折、ある隊長が悪魔と契約を結び、魂を譲り渡す代償に、地獄の業火で鍛えられた黄金の太刀を得た。これを手にしている限り、どんな大軍を相手にしても決して打ち負かされなかった。ある時この傭兵隊長が前述の丘に騎馬で登り、周辺の土地を見渡していると、敵の騎兵部隊が近づき、丘を包囲した。彼らは丘に攻め上り、隊長を取り囲んで長いこと闘った。ついに一人が一撃で馬の頭を切り落とすのに成功、馬はばったり斃れたので、隊長は落馬し、落ちる際太刀が手から離れた。馬の頭を切り落とした兵は素早く隊長に跳び掛かり、またも剣を揮って隊長の首を刎ねた。次いで一同は隊長が身に着けていた金子、装身具、夥しい高価

な宝石を奪い取り、亡骸を丘の上に埋めた。黄金の太刀は墓穴の中の死馬の上に横たえた体に突き刺した。出所が悪魔とあってはだれもそれを佩用しようと思わなかったからである。それから一切に土を被せた。そこで今日でもこの丘は殺しの丘と呼ばれ、頭のない騎手の伝説が語られている。

七二二　悪魔の城と地獄の壁

レームヒルトを見下ろす大小両グライヒ山は大層展望がよく、また大層名が高い。双方とも天気占いに使われ、二峰の頂きに霧の面紗が懸かると、民衆は、グライヒベルクの山山が料理をしてる、今日中に羹汁が出る〔＝雨が降る〕ぞ、と言う。――大グライヒベルクの胎内には舟航可能な川が流れ出るのに充分な水が貯えられている、という伝説がある。山麓にはネーブラーなる場所があり、そこには時折火男が出現する。一方山頂には氷洞があり、人人はこれを寒冷地獄と呼んでいる。

小グライヒベルクは石の城とも呼ばれる。その名の由来は巨大な玄武岩の塁壁が三つあるからで、これらは山を取り巻き、山頂附近では長長と拡がっている。民間伝承にいわく。その昔山には城があった。とはいえあまり堅固ではなかった。城主は気難しい老騎士だったが、姫君はとびきり美しく淑やかだった。騎士は陰鬱に引き籠もり、年寄りの乳母と共に娘を箱入りにしていた。にも関わらず姫はさる若い騎士と恋の絆を結んだ。もっとも老人はこの公達が、お嬢様のお手を戴きとう存じます、と申し込んだ時、おぬしなんぞの妻にするくらいなら、悪魔にくれてやるわ、とけんもほろろに拒絶した。辱められた騎士は、いつか不意打ちを喰らわせるぞ、と老いた殿を脅かし、絶縁状・挑戦状を突きつけた。恐慌に襲われた老城主は悪魔に助けを求め、一番鶏が啼いて夜明けを知らせる

前に、決して乗り越えられない三重の城壁を城の周りに繞らしてくれたら、代償に娘を遣わそうぞ、と約束した。悪魔は条件を承諾、建築は大急ぎで始まった。無数の巨大な使役霊が際限もなく巌石を運搬、厳めしい囲壁が刻刻と積まれていった。しかし姫を頗る可愛がっていた乳母が、主人と悪魔との間に取り交わされた盟約を立ち聞きしており、払暁、洋灯を携えてこっそり鶏小屋に出掛けた。灯火を目にした雄鶏は、夜が明けた、と思い、声高に刻を告げた。途端に地獄の壁は城もろとも粉粉に壊れ、幾千もの瓦礫と化した。これらは今日なお山を取り巻いている。要石にするため巌を引きずっていた悪魔は仰天したあまり巌をテマールの町[42]を見下ろすある山に落とし、その代わりに老騎士の魂をかっ攫った。これでもう若い恋人同士の仲を堰く障害はなくなったわけ。現代でも巷説にいわく。古城に通じる階段を見つければ、莫大な財宝がいまだに山の胎内にある。もっともこれは〔開門の鍵となる〕白い花がなくては掘り出せない、と。山上では丑三つ刻に彷徨える乙女が出没することもある。

グライヒアムベルク村[43]――その名の由来は山麓、すなわちグライヒベルク山麓すぐ傍にあるからだとか――の近くでなんとも奇妙な、長長と延びる岩石堆積層が始まっている。これはグライヒャーヴィーゼン[44]村有地を横断、この村をも掠め、更にリントとハウビンデを通り、トラップシュタット町[45]有地に入り、それからアイヒェルボルン、シュテルンベルク、アルスレーベンの間を抜け、オーバーレスフェルト村[46]有地にあるヘッケンミューレ亭[47]に達する。田舎では異教徒の壁とも地獄の壁とも呼ばれている。この石積みは、昔のローマ街道の遺構なのだ、なぜなら近傍でローマの古銭が発見されたから、と主張する学者も少なくないが、民衆は悪魔が造ったとする。堆積した石の幅は大抵の場所で三靴尺[48]しかないが、深さは大層ある。トラップシュタット近辺では十八脚尺[49]掘ってもまだ底まで届かないことが分かった。これは耕地の下を走っており、畑を犁き返す折しばしば日の目を見るだけである。前述のヘッケンミューレ亭傍では三十靴尺[50]もの幅の石床に拡がり、この幅は延長六十ルーテ続き、それからまた狭

まって三靴尺（シュー）となる。その場所でフレンキッシェ・ザーレ川の二つ目の源流がこのいわゆる地獄の壁（ヘレンマウアー）を越えている。ヘレンマウアーはなおブレンハウゼンを経てフリーデンハウゼンとアイヒェルスドルフの間でホーフハイムとリュークハイムに行き当たり、マイン川の岸辺に達する。マイン川の河床をも貫いていて、シュタイガーヴァルト[51]で消えるという話である。〔前の伝説で〕悪魔が落としたあの巌はいまだに悪魔巌（トイフェルスシュタイン）ないし野良巌（フェルトシュタイン）と呼ばれ、テマール上方のある山に横たわっている。これは薪を積み上げたように層を成している巨大な列状玄武岩である。莫大な財宝がその下に眠っている由。しかしながら巌上には踏む者の頭を眩（くらま）す惑わし草が生えているので、踏みつけると長いこと走り回らねばならず、どこにいるのか途方に暮れる。こんな目に遭ったら、急いで坐（すわ）り込み、靴下を取り替えなくてはいけない。そうすれば、また路が分かるようになる。

七二三　鐘が十二鳴るのを聞く

ダッハバッハ[52]近郊の三つの町、テマール、マリスフェルト、オーバーシュタットの間には、ゲルトレス（ゲルトリッツ）もしくはゲートレスと呼ばれる広い野原がある。ここにはその昔村があった。草原には至極不気味な気配が漂っている。ある旅人がこの曠野（こうや）を過（よ）ぎっていたところ、突然――廃村ガーメルスハウゼンのあの軍医[53]（ＤＳＢ四九八参照）のように――綺麗な村落に出くわした。折しも日曜日で、村内では鐘が打ち鳴らされて教会へと招いていた。旅人が村に足を踏み入れると、住民たちが粛粛と教会目指して歩いて行くところ。もっとも彼らの衣装は大層古めかしく異様で、てんから当世風ではなかった。旅人は幾人かの通行人に村の名を訊（き）いたが、一人も返辞をしてくれず、だれもかれも黙りこくっていた。いや、それどころか、しんとして何の音も立てず、跫音（あしおと）もなく、旅

人の姿が見えないかのように傍を通り過ぎて行き、その目は硝子(ガラス)みたいに凝然と坐(すわ)ったまま。そこで旅人は激しい恐怖に襲われ、蒼惶(そうこう)としてこの奇怪な村を後にした。テマールに辿(たど)り着くと、市門のところですぐ、村の様子を説明、あれはいったいいかなる村か、と問い質したが、知っている、と言う人は出ずじまい。以来再びその村を目撃した者はなかった。こんな伝説がある。ゲートレスで鐘が十二鳴るのを耳にしたら、大層な幸運を授かる。ただし、そのためには勇気を出して十二聖夜(降誕祭(ヴァイナハテン)の聖夜からご公現の祝日まで)全てをこの悪名高い野原で過ごさねばならない。マリスフェルトのある農夫が大胆にもあえてこれに挑戦、十二夜(ツヴェルフテン)になると夜毎荒寥(こうりょう)たる曠野に出掛けた。すると十二夜の一夜、願い通りのことが起こった。すぐ身近で鐘が十二鳴るのが聞こえたのだ。けれどもその響きたるやとてつもなく物凄(ものすご)かったので、最初の幾つかで男は恐怖驚愕(きょうがく)のあまり地面にひれ伏し、小娘さながら朝まで失神して野原に倒れていた。朝になって覚醒すると、やっとのことで身を起こし、村まで体を引きずるようにして戻った。戻ったのはいいが、高熱に見舞われ、三箇月もの間病みついた。やっと恢復(かいふく)すると、元通り働き始めた。再開した仕事は何もかもうまく行き、利益を生んだ。彼の納屋はおのずと満ち満ち、彼の畑はついぞ雹(ひょう)に見舞われることなく、彼の衣嚢(ポケット)は決して空にならなかった。いや、この男なら、仮に石を播(ま)いたって、極上の小麦が生い育ったことだろう。男は村一番の金持ちになった。これが勇気の報酬だった。そこでこの地方にはこんな俚諺(りげん)ができた。つまり、だれかがはっきりした理由もないのに急に裕福になると、やつはゲートレスで鐘が十二鳴るのを聞いたんだ、と言うのである。

七二四　お下げ髪の乙女

ヘンネベルク＝シュロイジンゲン伯爵家[54]の紋章は、金色の紋地で三つの緑の山に止まった赤い鶏冠の黒い雄鶏を描いたものだが、その上に飾り付きの冑が置かれている。この冑飾りは長いお下げ髪で、両腕のない、冠を被った乙女の半身像である。この紋章は往古のヘンネベルク伯爵領の塁壁、城門、礼拝堂、橋梁等等に無慮無数掲げられていたし、この冑飾りは他のどれよりも民衆に馴染まれていたので、一つならぬ伝説が作られ、拡がった。これらの伝説は多かれ少なかれお互い似ており、相互補完している。

ヘンネベルクのさる伯爵がイタリアを経て聖地に出征した。そこで伯爵はあるアラビア王の息女を知り、その愛を贏ちえたが、やがて彼女の許を去らざるをえなくなり、苦悩の裡に訣別、故郷へ引き揚げた。その後焦がれ焦がれて矢も盾も堪らなくなったアラビアの姫は、しばらくは恋心を抑えつけようとしたものの、あまりにも強い愛に抗うことができず、財宝をたっぷり携えて祖国を出発、恋しい人の跡を慕った。フェスラ修道院[55]の辺りに来た時、教会の二つの塔および近隣の村村から鐘が祝祭を告げて長いこと鳴り続けるのを聞いた。いったい何なのだろう、と問い質すと、あんたは随分遠くからやって来たに違いない、ご領主様が今日婚礼を挙げなさるのを知らないとは、との返辞で、領主の名も告げられた。悲しいことながらそれは彼女の恋人だった。姫は哀れにも懊悩のあまり失神せんばかりになった。絶望した彼女は太く長いお下げ髪をほどき、面紗をかなぐり捨て、所持金の全てと豊かな財宝を敬虔な事業に使った。それらの事業は、フェスラを囲む修道院の壁や上マースフェルトと下マースフェルトの橋の数数などである、とのこと。右の村村およびフェスラ周辺の言い伝えでは、サラセン女性がヘンネベルク[56]

へやって来た、とだけ。異国の乙女の愛と苦悩に深く衝撃を受けた伯爵は、その像を胄飾りとして紋章に描かせ、至るところに掲げさせた。そういうしだいでお下げ髪の姫君がヘンネベルク家の紋章に加わり、今日でもなおフェスラ、上マース（オーバー）フェルト橋脇の礼拝堂その他で頻繁に目に留まるのである。アラビア女性はフェスラに埋葬された。かつて〔フェスラ〕教会階上合唱席に六つの小柱に乗る記念石像――髪を靡（なび）かせた、あるいは、髪を地面に振り乱している乙女の姿――があった。ある古記録によれば、この乙女はどこかの王女で、軍隊と共にこの邦へやって来たのだ、とのこと。彼女はこの地で生涯を終え、所持していた若干の装身具を修道院に寄贈した。像は内に着けた服（ドレス）あるいは下裳（スカート）の上に長い外套（マント）を纏（まと）い、幅の狭い帯を締め、胸の半ば下に高価な留め金を垂らし、全身を覆う面紗（ヴェール）ないし布紐（ぬのひも）を頭から足の上まで下げ、頭部にあてがわれた褥（クッション）の両脇には天使が二人いて、この褥（クッション）を支えていた。サラセン女性の記念像はこんな形状だった。

　ヘンネベルクの伯爵が二人、九柱戯をし、いさかいとなって、兄弟の片方が他方を殺害して逃亡した、という話もある。彼は巡り合わせでロシアに入り、モスクヴァに辿（たど）り着いたのである。瞞（だま）された女性――つまり愛しい男の跡を追うことになる女性――はモスクヴァの商人の娘。これは明らかにより近世に作られた伝説だが、それでもなお東方（オリエント）指向である。更に新しい類話では伯爵はヴュルツブルクまでしか行かない。同地の商人の娘に愛と信実（まこと）を誓い、やがて信実を尽くすという約束を破る。親族が家柄の等しい相手と結婚するよううるさく責め立てたからである。財宝をたっぷり携えて男を追って来た婚約者は凶事を耳にし、悲嘆傷心のあまりお下げ髪をほどき、その財宝で幾つも敬虔な施設を作り、橋梁を架けなどしたが、ある村に来た時、そこで心慰められので、修道院を創建、この慰藉（いしゃ）の場所を慰め（トロスト）シュタットの地と名付けた。

七二五　シュロイジンゲンの由来と名

この都市の象徴であるセイレーン[57]もしくは女の水の精（ヴァッサーニクセ）――この象徴は市庁舎に掲げられた盾型の一つに今日でも見られる――と結びつけられている伝説によれば、シュロイジンゲン市の由来と名は以下のごとし。町ができる随分前のこと、ある富裕な伯爵がこの地域の森に狩りに行き、一頭の白いのろ鹿（レー）を追い続けたが、仕留めることはできなかった。そうこうするうち夜になり、従者たちともはぐれてしまったので、伯爵は森のどこかの空き地に仮寝の床を探す羽目になった。ごつごつした巌（いわ）山の裾に横になっていると、なにやら常ならぬ輝きが見えるのに気付き、きらきら光っている洞窟に行き当たった。洞窟内には水晶の水盤があり、白銀（しろがね）のような三つの泉から水が流れ込み、そして明るく輝く水面（みなも）には額に燦（きら）めく鉢巻（ヘッドバンド）――その上にはＳＬＶＳという字が記されていた――を着けた魅力溢れる水の精が浮かんでいた。この精は甘美で蠱惑（こわく）的な唄を歌い、歌い終わると、伯爵に傍へ寄るよう手招きし、伯爵が追ったあの白いのろ鹿（レー）はある邪（よこしま）な魔法使いに変身させられた自分の娘だ、と打ち明けた。いわく。その魔法使いはこの泉の上に聳（そび）える山にある巨大堅固な塔に住んでいる。彼女はこの魔法使いに唄を歌って眠らせるから、伯爵はこやつを抑えつけて、殺して欲しい。自分の鉢巻（ヘッドバンド）の飾りとなっている言葉――その意味は、彼女Sie（すなわち水の精の娘のこと）は愛しLiebe、かつV(=Und勝利せんSiege――の力でそれを果たすことができよう、と。なにもかも本当にこの通りになった。そして邪な魔法使いが殺されると、伯爵はかののろ鹿（レー）を水晶の水盤の水で三度濡らすよう頼まれた。水盤に注ぐ三つの泉は三本の渓流シュロイゼ、エルレ、ナーエ[58]を意味する。三度水を注がれたのろ鹿（レー）は素晴らしく美しい乙女の姿に変わった。伯爵はこの乙女と結婚、自らとその家系の名乗りをフォ

Schleuſingen's Urſprung und Name.

ン・デア・ブルンシュテット〔＝「泉の地」殿〕とし、シュロイジンゲン城とシュロイジンゲン市を建設した。その名はあの三つの[59]神秘な字母ＳＬＶＳから作られたもの。シュロイジンゲン市はその象徴としてセイレーンを市の紋章にとどめた。かの水の精は今なお城の泉――全市で最も清澄――の中に棲んでいる、とのこと。しかしながらフォン・デア・ブルンシュテット一族はその後衰微凋落してしまい、ヘンネベルク伯爵家によってその地方から追われたそうな。

七二六　死者たちの弥撒

シュロイジンゲンの上手に死者の教会なるものがある。教会の前に極めて古い見事な科の木が聳えている。かつてシュロイジンゲンのある女が、葬式に参列してお説教を聴いているうち、ついうとうと寝込み、会堂内の椅子に坐ったまま、かなり長いこと眠ってしまった。目を覚ますと、もう夜になっていたが、教会は人で一杯だった。弥撒が執り行われており、合唱の声が低くうねっていた。女も一緒に歌おうと思ったが、暗くて讃美歌番号が分からなかったので、隣席の女性をつついて唄の番号を教えてもらおうとした。で、隣席の女をよく見ると、その顔はもやもやした蜘蛛の巣みたいだったが、とっくの昔に死んだ馴染みの知り合いだった。死者は乾涸らびた手――骸骨はまだちゃんとくっついていたのだ――を持ち上げ、黄色に変じた指骨で唄を指し示した。そこで女は番号と歌詞が分かったわけ。唄は「おお永遠よ、汝、雷の言葉よ」[60]だった。死ぬほど仰天した女は怖くて堪らず甲高い悲鳴を挙げた。すると満堂の青白い影は悉く一遍に消え失せた。女はわななきながら戸口を目指し、家へよろめき帰ったが、その後あまり長くは生きなかった。

七二七　死者の水溜まりの水の精

ラッペルスドルフの近く、シュロイジンゲンとクロスター・フェスラの間に――伝説によればだが――底知れぬ深さで、水の漲る池がある。長さは四百靴尺を越え、幅はほぼ百靴尺、いかにも異様で、界隈の民衆の風評は芳しくなく、死者の水溜まりと呼ばれている。ラッペルスドルフの物故者はシュロイジンゲンで埋葬されるのだが、会葬者らと共にこの水溜まりまで担われて来て、それから先は会葬者を返して町まで馬車で運ばれて行く習わしである。死者の水溜まりなる名は元来このことに由来する。穴の水はとびきり清澄で、全面結氷したためしはない。ディー・ハールトと呼ばれる近くの山の洞窟や断崖、特にベーレングラーベン谷のある泉と地下で結ばれている。その泉に投げ込まれた軽い物体が水溜まりに浮かび上がるのを実験したことがあるとか。水溜まりは年年大きくなるともいう。古老の物語によれば、三十年戦争の少し前、それからとりわけクロアチア兵によるシュロイジンゲン襲撃前[61]、水の精たちが水溜まりから現れるのがたびたび目撃されたそうな。

ある時こんなことがあった。死者の水溜まりから女の水の精が出て来た。ほっそりした若い小娘のような容姿だった。頸には黒い数珠[62]を巻き、上体には水溜まりの水さながら湖水緑で鱗模様の胴衣を着け、赤い肩掛けを羽織り、真珠の花束[63]を捧げ持っていた。腰には猩猩緋の前垂れが巻き付いていたが、後ろに引きずるのは醜い魚の尻尾。水の精が飛ぶように急いで行ったのはラッペルスドルフから程遠からぬフーデルブルクだかルーダーブルクだかという旅籠屋で、折しもそこでは婚礼の舞踏が闌だった。水の精は、のっぽのフリーダーなる威勢の良い若い衆の隣の席に就き、喋喋喃喃、軽口を交わしたので、男はすぐに彼女に惚れ込み、彼女も楽しげに共に科の木の周り

で踊った。水の精は踊りながらフリーダーに様様睦言を囁き、とりわけ、あなたのお嫁さんになりたくて堪らない、と告白、抱き締めて接吻した。そうこうする内日が暮れ、夜になった。すると水の精は泣きながら男に向かっていわく。「フリーデル[64]、あたし、あんたともうお別れして、棲んでるあのお池の中へ帰らなくちゃならない。愛しいひと、あんまり長くあんたと一緒に居過ぎちゃった。あたし、父さんの言い付けに背いてここへ来たの。ここへ来てあんたと楽しく過ごしたことを命で償わなくちゃならないわ。お別れが辛くて、辛くて。それじゃ、さよなら、明日水溜まりに来てちょうだい。水が澄んでいて緑色なら、あたしは無事。どんより濁っていたら、あたしは生きてない」。そしてチュッと接吻をするなり、身を翻して逃げ去った。翌朝フリーダーが急いであの小さい湖の畔に行くと、水は濁っていて血の色だった。そこで青年は愛の苦悩に焦がれ焦がれて死者の水溜まりに身を投げ、死によって愛しい水の精と結ばれた。

ラッペルスドルフの下方、街道の左側にも小さな湖があり、夏は睡蓮が一面に咲く。その折はなんとも不気味な風情である。

七二八　男の水の精ハッケルメルツ

ヘンネベルクの極めて古い小都市テマール――昔の名はダガマリ[65]――では、子どもたちがヴェラ川で水浴する時、脅かしっこをして、「おい、逃げろ、ハッケルメルツが来るぞ」と叫び合う。――子どもたちが考えるハッケルメルツというのはいやらしいのっぽでがりがりに痩せた灰緑色髭の男の水の精で、川の深みからぽっかり浮かび上がって、子どもたちをとっ捉まえるのである。このハッケルメルツ一族はヴェラ谷で幾たびも目撃されている。

別名もあるが、その名はハッケルベルント――ただしこれは荒れ狂う猟師(ヴィルダー・イェーガー)で、大気の精であり、水怪ではない――を思い起こさせる。ラッペルスドルフの粉挽(こな)き場とシュヴァルツバッハの製紙水車場の間でシュロイゼ川――テマールの程近くでヴェラ川に合流する――は七年毎にきっと一人溺死者を出す。――さてテマールでも子どもたちは、冬大きなぼた雪が降ると、「ホルのおばちゃんがお床を振るってら」[66]と言う。

七二九　雌鶏城(ヘンネンブルク)

古伝承にいわく。昔さる高貴な家柄の殿が、要害堅固な城を築ける場所を求めてドイツを経巡った、と。フランケンに来たところ、ある山を見つけてこれが気に入った。騎馬で、もしくは徒歩(かち)で森を抜け、山頂に着くと、雛(ひな)たちを連れた野生の雌鶏(ヴィルト・ヘンネ)が目に入った。殿はそこに立派な城塞を建設、これを雌鶏山(ヘンネンベルク)と名付け、古きフランケンのガウ伯爵(グラーフ)[67]たる富裕・高貴な一族の始祖となった。この家系はフォン・ヘンネンベルク〔＝ヘンネンベルク殿〕と名乗り、グラープフェルトからテューリンゲン(テューリンガーヴァルト)山地[68]に至るまでを領し、数数の城塞を構えた。この話は後世多様な形で伝説化したので、ヘンネベルク城[69]建設についてこんな縁起もある古文書に記されている。いわく「ヴェンド人[70]がローマに蟠踞(ばんきょ)、ローマとイタリアをほとんど劫略(ごうりゃく)破壊した――キリスト紀元四五八年のこと――ので、争乱に耐えかねたある富裕なローマ人がローマから移住した。この者はかの大門閥(もんばつ)デ・コルムナ家、すなわち円柱殿と呼ばれた一族の出身[71]で、現在ヘンネベルクのある森に従者たちとともにやって来て、ここに城を築きたくなった。彼は雛たちを連れた野鶏(やけい)を見つけた場所に築城したので、ヘンネベルク城と命名したのである」と。

ほぼ同様の記事が上述の一門出身のあるローマ人に言及した年代記にも見つかる。いわく「当該人物はこの地方

に入り、その果ての今日ヘンネベルクがある山に至り、ここに定住した。この地方、この場所が至極気に入ったからである。そこでこの者は山に城を築き始めた。定住と築城を始めた時、同所で雛たちを連れた野生の雌鶏（ヴィルデ・ヘンネ）を見つけたので、彼は城をヘンネベルクと命名、雌鶏（ヘンネ）を紋章に取り入れ、彼およびその子子孫孫はヘンネベルク殿と名乗った。由緒はかくごとし」と。

古城ヘンネベルクの城壁には壁龕（へきがん）が一つある。古老はこれについてこう物語る。築城の際壁工の一人が息子を売った。その子がかの壁龕に生きながら塗り込められると、城は永遠に難攻不落になるからである。酷（むご）い父親は自分で子どもを塗り込めに掛かった。この子は三文白麺麭（パン）[72]を食べていたが、最後の積み石が置かれると、「父ちゃん、父ちゃん、真っ暗になっちゃうよう」と泣き叫んだ。――子どもがこう悲鳴を挙げると、その声は男の胸を刃物のように切り裂いたので、壁工は梯子（はしご）から転がり落ち、頸根（くび）っこを折っぺしょってしまった。

ヘンネベルク、フーツベルク、ランツベルク（元ランツヴェーア）なる三つの城にはこんな言い伝えがある。これらの城こそヘンネベルク伯爵家の紋章で黒い雌鶏（めんどり）が止まっているかの三つの緑の山なので、これから「ヘンネ・フーツ・ラント」、すなわち「雌鶏が邦（くに）を護る」[73]という標語（モットー）ができたのだ、と。一五二五年このかたヘンネベルクとフーツベルクは廃墟（はいきょ）と化し、ランツベルクも長いこと荒れ果てている。もっとも、ランツベルクにはごく最近君侯の堂堂たる騎士様式の城塞[74]が屹立（きつりつ）、全邦の真の飾りとなっている。

ミュンナーシュタットとキッシンゲンの間にあるリュートリンゲン[75]を見下ろす高みにも古城がある。これはかなりの丘の上に位し、今日では鶏山（フーンベルク）と呼ばれているが、その昔は雌鶏山（ヘンネベルク）であり、このことはある古文書にはっきり記されている。城と城山のこの名は放し飼い、ないし家禽（かきん）の鶏（にわとり）に由来する由。城を築こうとしたが、まだどんな名を付けたものか分からずにいた時、こうした鶏がその場で卵を生んだのだそうで、これよりずっと前に建設されてい

たヘンネベルク家発祥の城と区別するため、後にヘンネベルクではなく、フーンベルクに改めたのだ、と。また、前者の紋章に家禽の鶏が使われているのに対し、この城のそれは野生の鶏であるところが違うのだ、と。伝説によれば、築城以来百年毎の真昼と真夜中、城山の上で鶏が三度朗らかに啼き、百年経ったことを告げ知らせ、古い年代記の文言を確証する。

ここにて鶏、卵を生み、
城と城山、命名されぬ。

更にまたこんな話も。鶏城(フーンブルク)[76]の今は埋もれている穴蔵には莫大な金子と葡萄酒が匿されているそうな。巷説にいわく。財宝やその掘り出しのことなど夢にも思わずに初めてこの城址にやって来た者には、だれであっても必ず、地底深くに通じる小さな開口部が見つかる。そしてこの幸運をうまく摑めば金持ちになれる。けれどもこうした機会は二度とは与えられない。開口部を見つけた者が石を投げ込んでも、底に当たった音は聞こえない。穴蔵はそれほど深くにあり、財宝はそれほど深くに鎮座ましましている。これを掘り出して引き揚げようとすると、完全に失敗する。そういうことをしてはいけないのだ。掘り出している最中なんとも言いようのない恐ろしい目に遭い、意図を挫かれるからで。もっともこうした試みはその筋の命により禁じられた。かかるしだいで財宝は、開口部を見つけながら、欲に駈られることなく、そこへ降りて来る人間を待ち望んでいるわけ。

伝説によれば、フーンブルク城址のかつての井戸の傍で、城の破却後随分経ってから大きな鐘が一つ豚どもに掘り出されたそうな。この鐘はリュートリンゲン教会の鐘楼に吊された。この鐘には素晴らしい特性があり、その朗

らかな響きが聞こえる限りの地域では、冬にも霜が降りず、夏にも嵐に襲われなかった。けれども後世この鐘がもっと小さい鐘二つと交換されてヴュルツブルク[77]に行ってしまうと、すぐさま辺り一円からあの霊験が消え失せた。城山のごく一部にのみまだそうした祝福が残されているようではある。城山の東側には決して雪が積もらず、雪が降るとすぐさま溶けるので。

七三〇　荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ヘーア）の話

荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ヘーア）や荒れ狂う猟師（デア・ヴィルデ・イェーガー）について古老は語り草に尽きない。これらはノイブルン[78]やその山山谷谷を越えて行ったとか。大抵は秋の真っ暗で恐ろしい夜のこと。さりながら若い人たちはそんなものを信じようとせず、年寄り衆の体験談を笑い飛ばす。荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ヘーア）が轟轟（ごうごう）と空を過（よ）ぎって行き、老人連が「そら、荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ヘーア）のお通りだて」と口走ると、若者たちは「風がピュウピュウ唸（うな）っているだけさ、真雁（まがん）か鶴（つる）が啼（な）いてるんかも知んないが」と言い返す。でも、とにかく何かが渡って行くのである。「昔はなあ」と古老は語る。「あれはノイブルンの三軒の家をいつも通り抜けたもんじゃった。その三軒の戸口が真っ直ぐ並んどったからそうなったのだがの。つまり最初の家の玄関、真ん中の家の勝手口、三番目の家のもう一つの出入り口が、同じ方を向いていた。一つ家の三つの戸口が同じ方を向いていると――なにがなんでもそうなんじゃ――荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ヘーア）がそこを通り抜けるのよ」と。古老はこうも言う。「通りか中庭にいて荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ヘーア）が通るのに出くわしたら、頭をその辺の車輪の輻（や）の間に突っ込まにゃあいかん。そうすりゃ無事に通り過ぎてくれる。さもないと頸（くび）を捻（ねじ）られちまうだ」と。マースフェルトの老人の話ではこんなことも。荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ヘーア）はツィンケン・シュティル（シュティル森の一部）を下ってノイメーザー橋（ブリュッケ）の

傍でクロイツ通り――あの界隈はなんとも不気味な雰囲気だそうで――を横切り、それから山山を越えてドライスィヒアッカーの方へ行ったものだ、と。多くの人人がそうしたことを見聞したと主張、誓言して強調する。

マイニンゲンとザルツンゲンの間にあるローザ谷のロスドルフでも同様のことが語られる。つまり荒れ狂う同勢の騒音が聞こえたら、声を出さずに地面に身を投げなくてはいけない。さもないと、木木の梢高く連れ去られてしまう、と。それからこの地方の民衆は方言で「吹き暴れ（荒れ狂う）同勢」としか言わない。他のドイツの地域のように「荒れ狂う猟師」なる呼称は決して用いない。

七三一　ハスフルトの乙女と幸運の花

マイニンゲン近傍の山林にごく深い巌井戸のある荒れ果てた古城址が残されている。これはかつて盗賊城だった由。この城址のすぐ下をかつて往昔のフランケン街道が通っていて、かのランツヴェーアの古城塞――現存――と[70]結ばれていた。これら両城塞の奥底には莫大な財宝がいまだに匿されているそうな。そこには百年毎にいわゆるハスフルトの乙女が姿を現す。白装束で腰に鍵束を提げ、時時黒犬が一頭随き従っている。姿を現しても良い時節が到来すると、その歳一年間ずっと彷徨うことが許されるのだ。すると乙女は古城址や森や下の谷でしげしげ目撃される。彼女は宝を掘り出してくれる人を懸命に探す。財宝発掘が彼女の救済に繋がるからである。百年以上前のこと、何人かの貴公子が狩りを催したことがある。主猟官が必要な手筈を調えるためかなりの数の若者を連れて先行した。準備が済むと、領主家に仕える猟師たちは適当な場所で待つことにした。これは城山の下だった。その頃はまだ山上にはハス城の廃墟が建っていた。すると猟師たちは最初は泥、それから灰泥、更には小石のつぶて

を浴びた。彼らは、朋輩が山の上に隠れ、自分たちをからかっているのだ、と思った。しかしつぶては一向に止まず、飛んでくる石はますます大きくなった。そこで主猟官は、怒声を挙げ、石の雨を冒して城山へ馳せ登った。しかし山上には人っ子一人おらず、石も飛ばず、森閑と静まり返っていた。そして振り向くと、なんとまあ、屍衣のごとき白ずくめのハスフルトユングフラウの乙女が目の前に立っていた。しかしそれも一瞬に過ぎず、彼女の鍵束から鍵が一つ落ち、その姿は消え去った。主猟官が地面に目を凝らすと、鍵は本当にそこにあり、傍らには金色の花が二本生えていた。彼は鍵を拾い上げたが、花は顧みなかった。そうこうする内主君たち一行が下の谷に到着したので、彼は慌ててそこへ戻り、見つけた物を示した。――「近くに他に何か無かったか」。すぐさま一行の一人が訊ねた。「ええ、黄色い花が二本」が返辞。「それを摘んでいたら、おぬし、幸運を摑んだのになあ」。主猟官は蒼惶としてまた山に登り、花を摘もうとしたが、もはや何も生えてはいなかった。――ハスフルトユングフラウの乙女はしげしげ出現したということだが、財宝はまだ発掘されていない。城の穴蔵に通じる口をいくら探しても無駄である。――それまでこの地方に足を踏み入れたことがなかった余所者の錠前職人が、ハスブルクの地下に大きな穴蔵があり、戦具、武器、黄金が満ち満ちているから、行って、財宝を掘り出せ、証拠として鹿角柄の短刀が見つかるだろう、という夢を見たことがある。職人は森に入り、城と短刀を見つけた。短刀はある巌の上にあった。もっとも、それでどうしたらいいのか皆目分からなかった。

全く同じ伝説がランツベルク城についてある。こちらでは主猟官の面前で幸運にも城山の入り口が開いた。中に入ろうとした時、谷で角笛が響き渡った。主君たち一行が到着したのだ。そして殿輩が大声で自分の名を呼ぶのが聞こえた。そこで鍵をしまい込み、花は帽子に挿して、急いで立ち戻った。狩猟が終わり、任務から解放されると、侍従〔＝主猟官〕は急いでまたランツベルクに馬で引き返し、背後でどしんと閉まったあの扉を探した。けれ

どももう何も見つからず、花も失くなっていることが分かった。幸運の花が彼のために開くことは二度と無く、彼は悄然として帰宅した。かの古い鍵はいまだに現存、どこかの文書庫にある、と唱える者もいる。

七三二　トリッケンハウゼンの湖の話

ヘンネベルク家発祥の古城の下をマイニンゲンから幸多きフランケンの邦へ通じる大街道が走っている。道はすぐに、オストハイムを水源としフレンキッシェ・ザーレ川に合流する静かな流れ、シュトロイ川の河谷に入る。この河谷の、メルリヒシュタットから程遠からぬところに、トリッケンハウゼン村とトリッケンハウゼンの湖がある。静かで深く、周囲は高い木木にほぼこんもりと覆われており、底知れぬ深さと険しい山山に囲まれていることで広く有名である。この界隈の住民が湖についてかつて語った、あるいは今も語り継いでいる伝説・民話の数数は素晴らしい。ある者たちは力説する。この湖は水面には何一つ浮かばせず、ぐいと呑み込んでしまう――ヴェストファーレンのあの聖なる湖（ＤＳＢ二八二）のように――と。もちろん新たに実験を重ねたところ正反対の事実が証明されたが……。湖中に巨大な魚がいるのを見た、とか、かつて湖がどっと水を吐き出し、フランケン全体に氾濫したことがあるのだ、なにしろこの湖は大洋と繋がっているのだから[80]、と父祖から聞いた、と説く者たちもいる。そこで界隈の住民の多くは、湖が出水するような憂き目に遭わせないよう、神に祈りを捧げるし、ヴュルツブルクの司教座聖堂では――と彼らは言う――、トリッケンハウゼンの湖のせいでフランケンが浸水せぬよう、神よ、守りたまえ、と毎年弥撒が執り行われるのだ、だから、だれも小舟に乗ってこの謎多く悪評高い湖を渡ったりしない、と。湖中に魚はいるが、滅多に人目に触れないとか。一七九三年、近在のある猟師が、その大きさと来た

ら成長しきった牡豚にもおさおさ引けを取らない魚を目撃した。この話が界隈一円に広まると、この不思議な大魚を見て驚嘆せんものと、人人が群をなして集まった。しかし、見届けた者はいなかった。別の猟師だが、ある時湖畔で一眠りした。弾丸を籠めた銃を傍に置いて。激しい水音に目を覚まされ、そちらへ目を遣ると、湖面に二匹の化け物のような巨魚が浮かんでいるのが見えた。猟師はすぐさま銃をおっ取り、片方の巨魚に狙いを定めてぶっ放した。二匹はすぐさま水に潜った。しかしどうやら当たったようで、鱗が数枚湖面に浮かび、猟師はこれを拾って、人人に見せた。それらは錫の皿くらいの大きさだった。――周囲全地域に雨が降らなくても、この湖の水はしばしば濁る。また、日照りが極めて長く続いても水は減らない。シュトロイ河谷のシュトロイ川中流近く、嵐の時轟轟と奔出する濁水の大きな泉があり、これはその源泉のすぐ近くで幾つもの水車を動かしているが、この水は湖が地下で噴出するのだ、と信じられている。

七三三　男の水の精の細長耳小人

草原を流れる細流シュトロイ川はいかにもささやかで、幅が狭いが、こんな川にも悪戯好きな男の水の精が棲息、シュトロイ河谷のメルリヒシュタット上流下流、シュトックハイムからこの流れがザーレ川に合流するホイシュトロイに至るまで、活躍している。この水の精、人呼んで細長耳小人[81]。耳が細長いからである。こやつ、シュトロイ川を渉る人人を水中に引き込み、あっぷあっぷさせておもしろがる。もっとも溺れさせるまでのつもりはないのだが……。古老の話によればすでにかなりの人間がこうした目に遭わされた。さて家の精や水の精たち――その数ときたらまことにもって枚挙にいとまがない――のへんてこりんな名はどこから来るのだろう。古きプ

ロイセンの邦、ラウエンブルク近傍のプラッセン城に出没した小人族ちび指のだれかれは赤耳小人、金耳小人と呼ばれた（ＤＳＢ二七三）。この耳小人なる名は何かこう秘密めいたことを暗示しているかのようで、耳を欹てて聴く、といった感じである。ちいちゃな鼠耳（＝勿忘草）（古名アウリクラ・ムリス。新名ヒエラキウム・ムロルム。他にも種類多数。この中にはヒエラキウム・アウリクラや細長い変種ヒエラキウム・シルヴァティクム――植物界の細長耳小人――がある）なる草の、とりわけ洗礼者ヨハネの祝日後に咲くものの、根っこの最も太い部分には古い葉の葉脈の間に何滴かの赤い滴がいわばくるみ込まれているのが見つかる。これをヨハネの血と称して、ヨハネ祭あるいはこの時分の正午この草を掘り起こし、赤い滴を手に落とせば、その色がどれくらい保つかで、生涯の長さを予知することができる、と言う者がいる。すぐ褪色したら、その年の内に死んでしまうのだ。――動物界にも細長耳小人に相当する存在がある。耳紐虫、すなわち鋏虫[82]――フォルシクラ・アウリクラリア・リンネ――で、ヴェラ河谷からシュトロイ河谷に至るまでシュリッツエーアヒェンと通称される。伝説界と自然界の内面精神的関係は、なるほど未発見とは言い難いが、それでもまだほとんど未開拓の地――詩という魔法の黄金で満ちたカリフォルニアとでも譬えられようか。

七三四　夢魔となった修道女

昔シュトロイ河谷から程遠からぬところにヴェヒタースヴィンケルという女子修道院があった。同修道院に絵のように美しい若い下男が仕えていた[83]。この青年はしばしば夢魔にのし掛かられたが、どうすれば魔物から身を守れるか皆目分からなかった。そこである賢い男に[84]苦しみを訴えたところ、男いわく。夢魔を祓うくらい簡単なことは

ない、もしまたのし掛かられたら、手応えを感じたものに思い切ってこちらから摑み掛かり、捉まえたら放さないで、何かに閉じ込めてしまえばいい、と。下男は言われた通りにし、夢魔が次ぎに激しく胸を抑えつけに来た時、摑み掛かって放さないでいたところ、これが綿毛だった。こんな軽い羽毛があんなにどっしり体に乗ったとは信じられなかったが、それでも身心共に突然軽やかになり、重石とは一切おさらばで、寝床から跳ね起き、くだんの羽根を小さな手箱にしまった。その翌朝、修道院中に絶叫が響き渡った。修道女の一人が僧房の寝床で窒息している、つまり死んでいるのが見つかったのだ。たまたま例の賢い男に出逢った下男が綿毛の一件を語り、ついでに息が詰まった修道女のことも知らせると、男は「そりゃあ大変、すぐに箱を開けて、羽根を飛ばせてやんなさい」と応じた。――下男が箱を開き、丁度窓が開いていたので、死んだ修道女の独居房に羽根をふわふわと飛び込ませると、途端に修道女が生き返った。その後ついぞ下僕は夢魔に悩まされることはなかった。夢魔はかの修道女だったのである。この話、ルール〔＝ルーラ〕の例の女性（ＤＳＢ四七八）に似ている。ただしルーラの男は夢魔と共に、もっと色色なことを体験したわけだが……。

七三五　怒りの谷の話

ハーゼル川が貫流する谷がエリングスハウゼンを経てアインハウゼン村からシュヴァルツァへ伸びているところは昔緑濃いため緑の谷と呼ばれた。緑の谷がヴェラ河谷に出ようとする地点の、すこぶる大きな科の木の下に、かつて処女マリアの像のついた古い祈禱台兼賽銭箱があったが、灌木にすっかり囲まれてほとんど忘れ去られた存在だった。ある時、上マースフェルト在住のハインツ・トイフェルという騎士が、騎馬の狩りをしている最中、急

病に襲われ、マリア像に這い寄り、お助けたまわれ、と懇願した。するとすぐさま苦しみが消えたので、騎士はこれぞひとえにマリア様のお蔭と思い、御像の奇蹟の力を触れ回り、敬虔にも献金をして、木像を雨風に当てないよう礼拝堂を作った。するとここへの巡礼が大流行になり、奇蹟を行うマリア像の評判が四方八方へ拡がり、どの地方からも人人が群をなして押し寄せ、蹇者、瞽者、聾唖者など――多くは夢の中でしか見られないような――ありとあらゆる障害者が、忿怒の谷(グリンメンタール)――この奇蹟の地はこう呼ばれるようになった――で救いと治癒を授かろうとやって来た。そして固い信心で救われた者が多かった。それゆえ後に領主のヘンネベルク伯ヴィルヘルムがこの場所に壮麗な巡礼教会を建立した。聖母はグリンメンタールで数数の奇蹟を行った。その内一つだけを挙げよう。マイニンゲンの市城の大塔に三人の者が囚われ、厳しく縛められていた。彼らがグリンメンタールのマリアに呼び掛けると、なんとまあ、マリアが彼らの前に現れ、禁獄から解放してくれたので、人間の手助け無しで晴れて自由の身になった。そこで三人はすぐさまグリンメンタールへ向かい、マリアを誉め讃え、感謝した。グリンメンタールには一年に四万四千の巡礼が訪れた。一五〇三年シレジアからやって来たほぼ三百のムーア人騎士がこの地でやはり祈りを捧げた、との記録を読むと、なんとも奇妙な感じがする。ルター博士はこうした巡礼行には熱烈に反対し、これについてこう語りも書きもしている。「さればグリンメンタールへの巡礼は悪魔の大いなる欺瞞のなせるわざなり。惑わされし人人が――下男も下女も、牧人も女らも――狂気愚昧に陥りしごとく、なさねばならぬ仕事をなおざりにし、我も我もとかしこへ馳せ参ずるゆえに。まっことグリンメンタール、怒リノ谷(ヴァリス・フロリス)[85]と言いつべし」。――宗教改革後間もなく巡礼行は終焉を迎えた。昔の巡礼地には現在美しい病院が建ち、その下に聖母像があったグリンメンタールの科(リンデ)の木は今なお毎夏緑の葉をつけ、花を咲かせる。幹周りは三十六脚尺(フース)ある。

七三六　緑なす杭

下（ウンター）マースフェルト村近傍に魔女の山（ヘクセンベルク）が聳（そび）えている。これは魔女たちが山上で踊ったりしたからではなく、焚殺（ふんさつ）されたからである。それも大層夥（おびただ）しく。ロイタース村（ドルフ）の貧しい若者[86]ハンス・シャウも妖術を使ったと訴えられ、マースフェルト行政管区で[87]拷問され、無実だと言い張り続けたが、とうとう邪（よこしま）な妖術師だと自白せざるを得なくなり、火刑に処せ、との命令がイエナから届いた。若者は村から連れ出され、ヴェラ橋を渡り、魔女の階段（ヘクセントレッペ）[88]を抜け、ヘクセンベルクへと登った。たくさんの民衆が随（つ）いて行った。罪人の哀れな行列が山腹の半ばあたりに差し掛かった時、農夫が若木を結び付けるため何本も杭を打っている場所に出た。こうした杭の一つの傍で若者は泣きながら民衆に向き直り、枷（かせ）を嵌（は）められた両手を天に挙げてこう叫んだ。「おれがほんとは無実なのに死刑にされるなら、神様がその証拠に、この乾涸（ひか）らびた杭が葉っぱを出して、立派な木に育つようにしてくださるだろう」。――裁判官と民衆はその言葉を笑い捨て、若者は山頂で火炙（ひあぶ）りになった。一同は山を下りて来たが、その内何人かは杭の傍に残った。すると、なんとまあ、緑の若葉が萌（も）え出し、茶色の小枝が伸び、枝は芽吹き、命の無かった杭が緑滴（したた）る木になったのだ。皆これに愕然（がくぜん）とし、首うな垂れて家に帰った。以来ヘンネベルク伯爵領では魔女と妖術師の焚刑は行われなくなった。さて杭は堂堂たる山毛欅（ぶな）――針葉樹の山であるヘンネベルク唯一の山毛欅――に成長、いまだにかつての炭焼き（ケーラース）の山の庭園（ベルクガルテン）に立っていて、だれでも見ることができる。

七三七　母の祈り

ランツベルク城とハスフルト山地（ヴァルト）から程遠からぬところに高いゲバ山（デア・ホーエ・ベルク）が聳えている。この山の麓のマイニンゲン側、小村トレーベスの近くに、俗にトレーベスの穴（トレーベザー・ロッホ）と呼ばれる深い陥没地がある。ゲバ山麓にはゲバ村があり、その傍に小さな湖がある。昔むかしトレーベザー・ロッホは縁まで満満と水を湛え、現在湖のある場所には谷一番見事で稔り豊かな牧草地があった。この牧草地を所有していたのはさる富裕な高齢の寡婦（かふ）だった。やがて寡婦は病気になった。ひどく衰弱して寝床に横たわっていると、二人の息子が、母親は眠っていると思い込んで、その枕辺（まくらべ）に近づき、遺産相続の話を始めた。どう分けるかについては、例の牧草地を除き決着がついたが、牧草地は兄弟のどちらも分割せずにそっくり自分のものにしたがった。やがて低い囁（ささや）きが声高になり、兄弟は母親が息を引き取ろうとしている寝台の傍でやいのやいのと口論の果て、ぶち殺してくれるわ、と脅し合い、かんかんになって部屋を後にした。何もかも耳にした病婦は、胸がきゅっと締め付けられる思いで、神に祈りを捧げ、あの牧草地のせいで、もしかしたら兄弟殺しともなるかも知れない息子たちの不和をお防ぎください、あれを相続したいという息子たちの望みが水の泡になりますように、と切願した。すると神は母の祈りを聴き届けたもうた。なぜなら、次の日の朝になると、牧草地は跡形もなく、そこには水面が渺茫（びょうぼう）と拡がっていたので。これだけの水がいったいどこから湧いたのやらとんと見当も付かなかったが、やがてトレーベスの農夫たちが山から下りて来て、前の晩うちの湖がなくなっちまってよ、代わりにおっそろしく深（ふけ）え、漏斗（じょうご）みてえな穴ができただ、と告げた。兄弟は仰天し、母親の寝床の傍で仲直りをし、母親は神と息子らを祝福し、息を引き取った。

七三八　石を胸に抱えて

ローザ谷（グルント）には二つの村エッカルズとフリッテルスハウゼンがあり、お互いそう隔たっていない。その昔、どちらの村にも伯爵が住んでおり、お互い兄弟だった由。両者は狩りが故（もと）で不和になり、エッカルズの伯爵がフリッテルスハウゼンの伯爵を殺したとのこと。この重罪を償うため、エッカルズの伯爵は徒歩でローマへ巡礼、教皇は、殺害現場に修道院を建立せよ、修道院の礎石をエッカルズからその場所まで自分の胸に抱えて運び、修道士としてその修道院に入れ、そうすれば罪は贖（あがな）われる、と命じ、伯は課されたことを全て実行、修道院は罪人の家（ジュンダーハウス）と称されたのだ、と。これが後にジンナースハウゼンとなったヴィルヘルム会派[89]修道院で、とうの昔に破却され、現在は君侯家の所有である。同所の壁龕（へきがん）――ひどく壊れている――にまだ男の高い石像が立っている。身分ありげな姿であり、騎士の装束を纏（まと）っていて修道士のそれではない。髪は巻き毛で波打ち、十三世紀の簡素な服装をし、胸の左脇に角張った大石を抱えている。子どもたちは、これが修道院の罪人（つみびと）なんだよ、と語り継いでいる。もっともこの修道院が罪人の家（ジュンダーハウス）と呼ばれたことは決してない。後世における名前の歪曲である。元来修道院の名は最古の文書でジュンデロースフーゼン（ジュンデロース）と綴られている。罪を悔い、贖罪をしたかの兄弟殺しがその罪を許され、天と和解したからである。

七三九　ヴァーズンゲンのとんちき

南ドイツには北ドイツと同様頗(すこぶ)る気の利いた御仁がおられる。中部ドイツだって例外ではない。シュヴァーベンのとんちき[90]をご存じない向きはなかろうが、北国や北国沿岸のお利口さんたちも有名である（ＤＳＢ一九〇[91]参照）。さればマイニンゲン地方の小都市ヴァーズンゲン[92]にしても、ウンマーシュタット[93]や同地方のシュネット[94]と同じく、埒(らち)もないあほんだらをやらかした、と陰口をたたかれ、他の町だってどっこいどっこいだい、と定番のつまらぬ自己弁護で自らを慰めざるを得ないしだい。他の町にしたところでうちより増しなわけはない、というのもまあ道理。なにせ、シルダ、シェッペンシュテット、ポルクヴィッツ、ボルスハイム、テッテラ、ヴェーゼンベルク、ヒルシャウ、アムヴァイラー、トリフェルス、ヴァイルハイム、シュトックアッハ、カールシュタット、アーレン、ボイテルスバッハ、ボプフィンゲン、ロイトリンゲン、デューレン、ミュールハイム、ガングスローゼン、カーゼンドルフ、ヴェンロ、メッヘルン、ホトシュトルップ、ガーベル、レメ島、ビューズム、キスドルフ、ビスホルストその他何百もの町にお仲間がいるのでね。世間がヴァーズンゲンなど阿呆町(ラーレンブルク)のとんちきをあげつらうのは別段目新しいことではない。もう百年以上前にこう書かれている。「ところでヘンネベルク伯爵領で知らぬ者はまずなかろうが、ヴァーズンゲンなど阿呆町(ラーレンブルク)の衆を種にしてありとあらゆるおもしろおかしい笑い話、逸話が語られている。これらはマイセンで有名なシルダの市民の物語とかなり似寄りがある」。ヴァーズンゲン市当局はその頃も、その後もましなことをしたわけではない。時代、場所を問わず書類鞄(かばん)から愚行の数数を引っ張り出している。――たとえば一五七八年当局は、冬期ヴァーズンゲンの羊飼いが羊群を城山およびフンネン城城址(ブルクじょうし)に追って行ってよろ

しい、と明白かつ寛大に認可した。おそらく羊たちには雪の華や氷柱を喰わせればよい、というつもりだったのだろう。またヴァーズンゲンの衆は、余所者の泥棒を自分らの絞首台に吊すのが我慢ならず、塵はたきをくれてやり〔＝公開笞打ち刑に処し〕、どこへでも行って、好きなところで首を括ってもらいな、という訓戒と貨幣一枚を与えて追い出した。だから、まず斬首してからどこへ行こうと勝手にさせたエアフルト市民（DSB五九四）よりは穏やかな遣り口ではあった。なにも笑うには当たらない。ヴァーズンゲンの衆のかかる行為は利巧だったのだ。近代、愛する祖国ドイツにおいては、貴賤取り混ぜ、少なからぬ浮浪人に関し、これに倣った処置が行われた[95]。ヴァーズンゲンの衆はまたどこかの馭者に売りつけられて、驢馬の卵を孵そうとした。この卵なるもの、実は凝乳乾酪だったのだが……。――この点でもヴァーズンゲンの衆は我が愛する祖国にどっさり同志を持っている。現在はしばしば驢馬〔＝莫迦〕自身が凝乳〔＝くだらぬ事〕の上に坐り込み、分別ある人士だけが喜べるような気の利いたもの一つ孵せないのが違っているだけ。ヴァーズンゲンの衆と猫に関する話はガーベルの衆の場合（DSB一九〇）とほぼ同じである。運べる凱旋門の話[98]、塩の種の話、一足の長靴をお利巧にも切りこまざいて一組の上履き靴を拵えた話については多言を弄する必要はあるまい。つい先だっての名高い一八四八年の愚行と同様である[99]。この年にはヴァーズンゲンでもヴェラ河谷が燃え上がり、乳鍋は吹きこぼれ、甘い乳は空しく酸っぱくなってしまった。

七四〇　天から降った石

ヴァーズンゲンとザルツンゲンの間にあるフラウエンブライトゥンゲン[100]には大きな黒石が転がっている。これは

かつて天から野原に落ちて来たもので、だれもこれを運び去ることができなかった。それほど重かったのである。[101]石が天から降って来た時、フラウエンブライトゥンゲンの衆はそれをなんとか自分たちの教会に安置したがった。この村には重罪を犯した囚人が一人いたが、稼業は亜麻布織り工で、同時に――亜麻布織り工は普通そうではないけれども――強力（ごうりき）ハンスみたいな力持ち[102]だった。この男は、自分を無罪放免にしてくれるなら、その石を――エッカルズの伯爵（ＤＳＢ七三八）のように――野原から村の教会に運び込もう、それも胸に抱いてではなく、締めている前掛けに入れて、と名乗り出た。力持ちの亜麻布織り工にこれが認められ、男はフラウエンブライトゥンゲンまでの一行程、ちゃんと石を運んだ。ところが市の立つ広場（マルクト）に差し掛かった時、前掛けが真っ二つに裂け、石が滑り（グリット）出して、そこに落ちた――いまだにその場所にある。亜麻布織り工は愕然（がくぜん）として膝を突いた。それ以来この稼業の者は皆これを忘れぬよう短い前掛けを締める。石はいまだに転がっていて、滑り石（グリットシュタイン）[103]と呼ばれている。

七四一　埋められた妖魔（コーボルト）

フラウエンブライトゥンゲンの石造家屋で修理が行われることになった。昼時、石工職人の一人がのらくらして家の隙間からどこかの庭を見下ろしていると、女が歩いて来て、梨（なし）の老樹の下へ行き、そこに穴を掘り、外套（マント）の下に隠し持っていた箱を穴に入れ、また芝土で念入りに穴を塞ぐのを目にした。その日の仕事が終わると職人は、女がその穴に埋めたものが、宝にもせよ、なにか犯罪の成果にもせよ、見届けたくて堪らなくなり、木の根元に行き、掘り返して箱を引っ張り出した。開いたところ、中に横たわっていたのはおぞましい妖魔（コーボルト）で、身の丈半肘尺（エレ）、悪魔のように真っ黒け、頭には牡山羊（おやぎ）の角、足には馬の蹄（ひづめ）という具合、どこからどこまで悪魔さながら。それから

皿のように大きく、火のように燃える目をしていた。びっくり仰天した職人がどすんと箱を取り落とすと、妖魔（コーボルト）は中からぴょいと跳び出し、からからと厭（いや）らしく笑い、顔を顰（しか）めておちゃらかしながら助けてくれた職人の周りをぴょこぴょこ跳び回り、甲高い哄笑（こうしょう）を挙げて大きなブライトゥンゲン湖に急ぎ、そこに飛び込んで消え失せた。職人は熱病に取り憑（つ）かれ、驚愕（きょうがく）死した。その後妖魔（コーボルト）を見た者はおらず、こんなとんでもない宝物を埋蔵した女も探し当てられなかった。

七四二　リーベンシュタイン城近傍なる悪魔（トイフェルスマーテン）の刈り取り地

女子（フラウエン）ブライトゥンゲンと男子（ヘレン）ブライトゥンゲン――ここには名前から分かるように昔女子修道院と男子修道院があった。ヘレンキームゼーとフラウエンキームゼー（ＤＳＢ九三〇）と同じ――から程遠からぬところ、ヴェラ川下流一行程――ザーレ川下流のザールフェルトと同じ。こんな具合にまだまだたくさん対比できる観光名所が挙げられる――ほどに、古い山城リーベンシュタイン[104]がある。この城には少なからぬ伝説が纏（まつ）わっている。まず――これは至るところに伝えられているが――生きながら城壁に塗り込められた子どもの話。その啜（すす）り泣きはいまだに聞こえるし、子どもの母親は幽鬼となっていまだに廃墟（はいきょ）の周りを彷徨（さまよ）っている。それから白装束の祖妣（そひ）の話――彼女は財宝を守護しているのだ。悪魔の刈り取り地（トイフェルスマーテン）の伝説は古城リーベンシュタインに特有のもの。昔この古城に騎士が居を構えていた。至極兇暴放埒（ほうらつ）な男で、例の言い回し「悪魔が跣（はだし）で歩くのを見た」[105]〔＝悪魔の訪問を受けた〕」輩（やから）の一人だった。騎士は悪魔と魂を売り渡す盟約を結んだ。その代わり悪魔は、かの地のワールデンベルフ〔＝ワールデンブルフ〕城で悪魔ヨーストがファウスト博士に仕えた（ＤＳＢ一四一）ように、難行苦行の末騎士に奉仕し

なければならず、散散あくせく骨を折り、馬ならばったり斃死しちまうほどもこき使われたので、他に就職先があるものなら、喜び勇んで悪魔稼業から足を洗ったことだろう。騎士は下僕の悪魔にやらせる辛労辛苦の種をしょっちゅう新たに考え出した。とうとう、城の横手に拡がる広大な畑の収穫を全部――百人の刈り手で優に三日は掛かろうという量――一夜の内に刈り取れ、と命じたものである。悪魔は心配で堪らなくなった。なにせこれをやってのけられなければ、騎士は自由の身となってしまい、死んでもその魂を手に入れられないからで。死神から大鎌を借り受けて仕事に掛かった悪魔はさしも広大な刈り取り地の全穀物を刈り終わった。終わったものの、気が遠くなるは、ほとほとうんざりするはで、ザルツンゲンの悪魔の隠れ処まで出掛けて跳び込み、冷泉浴療養をした。さて、この時悪魔は穀物をあるいは右へ、あるいは左へと刈り倒した。なにしろ悪魔とその臀舐め連中〔＝追随者たち〕と来た日には左袒したかと思うと右袒するのでね――これは周知の事。かくして今日に至るまで穀物は、立っている時も、刈り取られても、切り株だけになっても。こんな具合になっている。で遠くから見ると、前述の畑の穀物はまるで不気味な刈り取りで刈り纏められたかのよう。今日に至るまで悪魔の刈り取り地と呼ばれている。悪魔が近在での沐浴を終えてまた騎士の許に帰って来たかどうかは伝えられていない。なにせヒルトブルクハウゼンの諺だと「確かでないこと分かりゃせぬ」だからね。

七四三　ボニファツィウス巖とルター山毛欅

アルテンシュタインの城館のすぐ近くにボニファツィウス巖が聳えている。このテューリンゲンの使徒がこの場所でこの巖から民衆にキリストの教えを説いたこと、そしてこの近くに礼拝堂を建立したことは、疑いもなく単な

る伝説ではない。これは一つならずの遺構と少なからぬ歴史的な証拠が物語っている。百年以上前には巌の傍に、屋根は落ちているが、高い、丸い石壁がまだあった。礼拝堂の名残で、その当時既に言い伝えによりボニファツィウス塔と呼ばれていた。アルテンシュタイン城とその周辺の古い見取り図にははっきりその名で記されている。

一五二一年の春ルター博士は、ヴォルムスからの帰りがけ、故郷の村メーラに立ち寄って休息し、説教を行ってから、ヴィッテンベルクに戻るため、この丘を越え、ボニファツィウス巌の傍を通り過ぎた。この時博士は森を半時間ばかり登った辺り、ある巡礼礼拝堂の廃墟から程遠からぬところ――泉に覆い被さる逞しい山毛欅のすぐ近く。ルターはこの泉の水を飲んだ――で勾引され、ヴァルトブルクへ連れて行かれた。グラースバッハ近く、路傍の巌に男の足型が捺されている、と人は示し、これをルターの足跡と呼んでいる。ルターの勾引はヴァルトブルク城守備隊長兼領地管理官ハンス・フォン・ペルレプシュとゴータの献酌侍従にして執事ならびに領地管理官ブルクハルト・フォン・ヴェンクハイムによって行われ、ザクセン選帝侯が秘かに命じたものである。[10] ここアルテンシュタインはブルクハルト・フント・フォン・ヴェンクハイムにとって一族発祥の城であり、父祖代代の相続財産だった。フォン・ヴェンクハイム一門には、あの一度に九人、十二人、七人の男の子が生まれたという伝説（ＤＳＢ四一七および八〇〇）でヴェルフェン家の由来譚と同様の話がある。フォン・ヴェンクハイムの奥方が三つ子を授かっている物乞い女を痛罵し、そのため物乞い女に呪われ、一度に十三人の男児を出産したというもの。その内十二人を水死させるよう言い付けられた女中が、行き逢った殿に、何を運んでいるのだ、と訊かれ、犬たちでございます、と答えた。すると殿はその男の子たちをこっそり育てることとし、母親〔である奥方〕を修道院に押し込め、息子たちに「フント」なる姓を与えたのだ、と。かくして――今は湮滅したが――フント・フォン・ヴェンクハイムという一族が誕生、この名は当地方の少なからぬ教会で祈禱中に唱えられ、いまだに生き長らえている。

七四四　二つのリンゲルシュタイン城

アルテンシュタイン城裏の森の奥深く、ヴィルヘルムス谷方向にその昔、古リンゲルシュタイン、新リンゲルシュタインと呼ばれる二つの城があった。いまだに見えるのは城址だけだが、纏わる伝説はたくさん残っている。もともとこの辺り全地域が伝説に満ち満ちているのだ。両城には盗賊騎士が巣くっていた。ここはいわゆる葡萄酒街道――今日なおこの名で通っている――のすぐ近くである。この古道はテューリンゲン山地からフランケンとブホーニエン[11]へうねくねと下っていた。リンゲルシュタインの盗賊騎士どもはある時ザルツンゲンから一人の花嫁を拐かして来た。彼らは馬の蹄鉄を後ろ前に取り付けて跡をくらまし[12]、ある洞窟を抜けて己らの城塞――城門は全く無いのだ――へと引き揚げた。盗賊城がふるふる厭でならなかった娘は、城から飛び降り、泉から流れ出す川でできている濠を越えて無事に逃げ果せた。この小川は今日なお流れていて、花嫁の泉と呼ばれている。

ありきたりではあるが、古リンゲルシュタイン城には、鍵束を腰に提げた美しい乙女が救済を待ち焦がれて出没する、との伝説がある。彼女は森の空き地に白布を拡げ、その上で亜麻の実を脱穀する。さて盗賊騎士どもは葡萄酒街道のごく近くに居を構えていたので、彼らの略奪品の大部分は葡萄酒から成っていた。彼らは好きなだけ酒をあおったが、それでも全部は飲み尽くせなかった。それゆえ地下洞窟の酒蔵に葡萄酒がいまだに夥しく積み上げられている。酒樽の桶材はとっくに朽ちて、鉄の箍は錆でぼろぼろだが、酒石が水晶のような膜となって貴重な液体をくるんでいる。いつの日か、二度目の大洪水が人間という罪ある族に襲い掛かり、主が生者をも死者をも裁くため恐ろしい最後の審判に臨む時、これらの洞窟は天日に曝され、酒樽は開くだろう。そして栄光に満ち満ちた主は

許される者たちをお選びになり、敬虔にして正しき人人にこの葡萄酒を飲ませ、永遠の生命の証となさるであろう。

七四五　アルテンシュタイン城周辺の山の精たち

アルテンシュタイン城の城山下に幸せの泉村がある。昔は小屋掛けの集落だった。かつてこことシュタインバッハに夥しく住んでいた鉱夫たちが活気ある鉱山業に従事していたが、今日ではごく僅かな収益しか上がらない。鉱山の縦坑や横坑にはやはり数数の山の精がいて、少なからぬ人人に宝を授けてくれたし、ヴェネチア人たちは足繁くやって来て、たっぷり故郷へ持ち帰ったものだが……。シュタインバッハ上手のレーゲ河畔には黄金の牡角鹿がしばしば見られた。ある時シュタインバッハの若い鉱夫が受け持ちの縦坑に入ろうと巻き揚げ機のところにやって来た。巻き揚げ機の近くに来ると、ちいちゃな山小人の一団がそこに群がっていて、せっせせっせと鉱石を巻き揚げ機で引き揚げ、これを砕いていた。若者が世にも不思議なちいちゃな鉱夫仲間の姿にびっくり仰天、口をあんぐり開けて歩み寄ると、ひゅうっ、ちびさんたちは一斉にとんぼ返りをうって縦坑に跳び込み、縦坑がそっくり崩壊したかと思うようなずっしーんという音がした。若い鉱夫は心底ぞおっとし、縦坑の傍に行くと、臀当て革を外し、坑内灯もろとも坑の中に抛り込み、「おいら、おまえさんたちと一緒に坑内にゃ入らねえぞ」と叫んだ。それからはるばるルール〔＝ルーラ〕まで出掛け、小刀鍛冶に弟子入りした。そしてこの結構な手仕事を覚え込むと、シュタインバッハに戻り、定住して小刀作りを始め、この伎倆に掛けては一流の親方になった。そこでシュタインバッハの衆はこの男の真似をし、鉱夫が小刀作りに変身。現在百五十人以上の親方が住んでいるが、鉱夫は一人もいない。

昔グリュックスボルンの鉱夫が女王縦坑（レギーナシャハト）で働いていると、何か物音が聞こえた。鉱夫長だろう、と思っていると、やがて目に入ったのは鉱山監督局のお偉方のような風采（ふうさい）の人物。黒い帽子、折り返しの附いた上着、黒洋袴（ズボン）に黒靴、白い靴下を身に着け、片手に明るく燃える坑内灯を提げていた。端正な顔立ちで目はきらきら輝き、身の丈がとても高く、五靴尺（シュー）以上もある場所なのに、坑道の天井に頭が届いた。[13] はっとした鉱夫は何も言わず、緊張してますます素早く激しく仕事を続けた。するとその姿は東の方に向きを変え、坑道を去って行った。怯（おび）えていたのだから是非もないが、もし鉱夫が鉱山業に携わる者の挨拶「無事に上がれや（グリュック・アウフ）」を唱えてさえいたら、幸運の富鉱脈が彼の前に打ち開いたことだろうに。とにかく彼は二度と再びこの鉱山の幻影を見ることはなかった。別の鉱夫たちの前に現れた山の精は、鉱夫の上っ張りを纏（まと）い、膝当て附き革洋袴（ズボン）[14]を穿（は）き、斜め帽子（シーフフート）を被り、大きな目をぎらぎらさせ、片手に坑内灯を提げ、近づいて来たが、この鉱夫連も恐怖に包まれて精を避け、縦坑から逃げ出した。精の坑内灯は縦坑全長のほぼ半ばまで照らし出した。

七四六　巡礼の庭園

ルターの泉から登った高みにある天牛巌（ゲルバーシュタイン）の下方にその昔――伝説によれば――女子修道院があり、大勢の巡礼者がしょっちゅう詣（もう）でたし、修道院がとっくに破壊された現在もやって来る。修道女たちは破壊される前に莫大な財宝をそこに埋蔵し、彼女らの一人が財宝を守護するよう財宝の許（もと）に呪封された。たくさんの人人――というのもルール〔＝ルーラ〕へ行く街道はその傍を通っているので――が雪白の修道衣を纏（まと）った彼女が彷徨（さまよ）うのを目撃している。もっとも彼女はだれにも危害を加えたことはない。この場所で宝探しをやった連中は何一つ見つけられな

かった。百年前のことだが、早春、まだ若葉も花も無い時、ここの繁みまで登って来た人たちが、連れてきた五、六歳の小さな子を、自分たちの仕事が終わるまで背負い籠の傍に坐らせておき、森に入った。けれどもやがて籠のところに戻ると――エップレヒトシュタイン城の女（DSB七〇三）の場合と同様――子どもがいなくなっていた。夫婦は森中子どもの名を呼んで探し回ったが無駄だった。しかし、かなりの間探しあぐねた二人の許へ子どもが喜色満面で走って来た。赤い漿果、花、桜桃を手にして。子どもはこういった。「父ちゃんと母ちゃんが行っちゃって、一人っきりになって、長いことほったらかしにされたでしょ。だから怖くなって泣いてたの。そしたら白い着物のお姫様がふいっと来て、『泣くんじゃない。二人ともうすぐ戻って来る。おまえはわたしと一緒にわたしのお庭にいらっしゃい。お庭には漿果や熟した桜んぼやお花があるわ』って言うの。それで好きなだけ採っていい、毎日ここへ登って来なさい、ともね。そのあと白い着物のお姫様が『もうお帰り。母さんが呼んでる』って言ったんで、それで帰って来たの。父ちゃんと母ちゃんは一度だけならあの清い、きれえなお庭に一緒に行ってもいいんだって」。――何もかも全然信じられないと思えたが、とにかく二人は子どもに随いて行った。すると本当にその庭園に行き着き、数数の草木の花、さまざまの漿果や桜桃を目の当たりにした。そして白衣の乙女の姿も。白衣の乙女は庭に入るよう手招きしたが、二人は恐ろしくなり、子どもを引っ張って急いで逃げ出した。けれどもそれからというもの、子どもは連日庭園と白衣の乙女を探し求め、彼女の許に行きたがった。そして、行かせて貰えなかったものだから、しくしく泣き続け、悲嘆に暮れ、瀕死の病になった。母親が子どもの小さな寝台の傍に坐り、子どもを奪おうという御旨の天なる神に泣きつき、祈りを捧げていると、突然寝床の子どもが起き直り、両手を拡げ、可愛い顔をほころばせて高笑いし、「見て、見て、母ちゃん、白い着物のお姫様だ。ぼくに赤い漿果（苺）と酸塊を持って来てくれたのかな」、そう言ったかと思うと息を引き取った。その後巡礼行の折、周辺で白衣の乙

女の庭園を見た者はいない。

七四七　フルス山の男たち

リーベンシュタインの町を遙かに見下ろす山地には、裂け目数多の蛍石の巌塊から成る山が聳えおり、その名をフルスベルクという。ここには計り知れぬ昔から魑魅魍魎が徘徊、旅人たちを悩ませた。目に見えない手で平手打ちを喰わされたり、小さな子どもの啜り泣きが聞こえるので探し回っても何も見つからず、森の繁みで迷ったり、といった具合。荒れ狂う同勢もフルスベルクの蔭に潜んでいる。彼らは天牛巌とヒルシュパルツの向かう側からやって来てフルスベルクに下りる。同勢に捉まった者は消え失せてしまう。彼らが大気をつんざいて飛翔して来る音を聞いたら、すぐさま長長と腹這いになって顔を地面に伏せ、主の祈りを唱えなければいけない。そうすれば通り過ぎて、何も害は加えない。なにしろ同勢はここフルスベルクとかヘールゼーレンベルクその他みたいな山の洞穴で休んでいない時には常に空中を飛んでいなければならないのでね。フルスベルクの洞窟は山の胎内奥深くまで通じており、そこにはツォプテンベルクの洞窟（ＤＳＢ六四八）同様、やはり三人の男たちが呪封されている。もっとも彼らは『服従ノ書』を読みもしないしラテン語を話しもしない。一人はリーベンシュタイン近郊シュタインバッハの旅籠屋の亭主で肉屋もやっていた男。この男は肉の目方や麦酒の量をお客に少なく売りつけるのを常習とし、死ぬとすぐに酒蔵や肉貯蔵室でしょっちゅうがたがた騒ぎ回り、「一カンネなのに四分の三。一封度なのに四分の三」と叫んで止まなかった。とうとうあるイエズス会士が呼ばれ、この亡霊を祓い、袋に押し込み、フルスベルクに運んだのである。二人目はリーベンシュタイン近郊ザウアーブルンス＝グルムバッハの粉挽き

だった男。この男は客から穀物を預かって挽く時に誤魔化し、粉挽き料も客の目を盗んで多く取った。そればかりか境界標石を動かしもした。そこで死後こやつも彷徨い歩く羽目になり、粉挽き小屋の中をがたがた騒ぎ回ったり、火男の姿になって所有していた耕地や牧草地――生前境界標石を動かした――をふらふらした。そこでこれまたあるイエズス会士が祓い、フルスベルクの洞穴に運び込まねばならなかった。後の一人はシュヴァイナの男で、実に巧妙に境界標石を移動させたので、その耕地は年年大きくなった。死後こやつの亡霊は全く悪質だったので、そろそろ暗くなりだすと、シュヴァイナからシュタインバッハへ向かう街道――この道筋に男の耕地があり、男が彷徨っていた――に足を踏み出す者は後を絶ったものである。亡霊はやはりある祓魔師によってフルスベルクの胎内に担ぎ込まれた。今でもこの三人組は山の洞窟の中に坐り、イエズス会士らが暇潰しにと鉄の骨牌をくれたし、生前しょっちゅう骨牌遊びを楽しんでいたので、ゾーロをやり続けている。そしてお互いにいかさまをやらかし、仲違いし、しばらく殴り合い、荒れ狂う同勢並みの大騒ぎをおっぱじめる。真夜中フルスベルクの洞穴の傍を通る者は、穴の奥の方でがなったり、叫んだり、やっつけ合ったりする声を耳にする。「一カンネなのに四分の三。一封度なのに四分の三。切り札を出しな。一マースなのに三メッツェ。切り札を出しな」――これらが入り混じって、ひっきりなしに続き、果ては全山の巌が揺らぐばかりの殴り合いとなる。

七四八　真実なるやをたれぞ知る

リーベンシュタインとザルツンゲンの間にエットマールスハウゼン――旧称オットマールスハウゼン――という小村がある。かつて村には庭園が一つあって、壁で囲まれていた。この壁と入り口が完成すると、壁工の親方は片

方の門柱に竣工（しゅんこう）年と自分の名の頭文字をこう刻み込んだ。

主[A]のご生誕[D]後一五四八年。なべて作りしは
C・F・なり。

さりながら実際に仕事に従事し、完成までこぎつけたのはこの親方ではなく、使われた職人だったから、職人はもう一方の門柱にこう彫った。

真実（まこと）なるやをたれぞ知る[118]。

その後この地方全体にこんな言い回しができた。だれかが、自分ではなく他の者がやってのけたのに、自分がやった、と誇ると、「真実なるやをたれぞ知る、ってエットマールスハウゼンの庭園の門に書いてあったよなあ」と譏（そし）る。あるいは、当人に面と向かって、「おい、エットマールスハウゼンの庭園の門のことを考えな」と言う。庭園と門、壁と文字はとっくになくなったが、この言い回しはいまだに使われている。

七四九　ザルツンゲンの湖の幾つか

ザルツンゲンのごく近傍にとても美しい湖があり、そのすぐ近くにもっと小さな湖――その名は[119]――があっ

た。現在はただの深い水溜まりに過ぎない。この地域にはその他にもかなり小さな湖が幾つかある。これら全てに女の水の精の伝説が纏わっている。ザルツンゲンの大湖に昔女の水の精が暮らしていた。この精はよく水門を通って肉屋の店――水門のすぐ近くにあったが今は無い――へやって来た。ある時子どもを一人連れてやって来た。それはいいが、置き去りにして、二度と戻って来なかった。どんな子だったのか、その後どうなったのか、だれも知らない。湖畔に面してヒューン（ハウン）邸と呼ばれる古い煖房家屋があり、ここへ湖乙女が二人踊りに来て、長く居過ぎたため、やがてまた湖に跳び込むと、湖水が血の紅に染まった。一六三〇年のこと、冬の最中、湖全体が血紅色に変じたように思えた。一七五五年の十一月一日、湖の水が突然渦巻いて漏斗に吸い込まれるように湖底に流れ込み、次いで雷鳴のような轟音とともに噴出、泡立ちながら岸辺に氾濫した。この日はリスボンが地震によって破壊された（ＤＳＢ三九八）その当日である。

古文献によれば、悪魔の隠れ処ないし穴にはしばしば飛翔する有翼龍が関わりを持った。現在穴と呼ばれているこの陥没地がまだ水で一杯だった時、ここを通り掛かったある駅者が何か化け物に馬たちを脅かされて、人も車も深みにざんぶり転げ落ちたことがある。ザルツンゲンからヴィルプレヒトローデの方へ少し行ったところに、ブーヘン湖ないしビューヒェン湖がある。昔その場所には至極壮大な城が建っていた。城の日常は奢侈逸楽に終始、果てはオーデンヴァルトはノイエンキルヒェン近郊のかの女子修道院（ＤＳＢ五九）のようなことになったのだ。疲れ、飢えた旅人が二人やって来て、中に入れてくださいまし、そして飲み物・食べ物、ささやかな一夜の宿りを、と懇願した。しかし城門はいっかな開かれず、旅人たちは悪罵を浴びせられて追い払われた。すると彼らは城を呪詛、城は即座に沈み、代わりに小さいが底知れぬ湖が生じた。これがブーヘン湖である。けれども、かの女子修道院の善良な修道女と同様、この城にも三人の姫がいて、貧者らを城に入れてやりたい、と願い、彼らを拒

んだ非情・嘲罵には関わらなかった。それなのに姫たちも城とともに地中に沈んだ。ただし彼女たちは毎年一度、ヴィルプレヒトローデの教会堂開基祭の折、踊りに加わるのが許されていた。でも毎回夜中の十二時になる前に必ず急いで引き揚げねばならなかった。ヴィルプレヒトローデのある猟師だが、鳴猟から帰るさ、姫たちが乗ったいかにも古風な馬車に行き逢ったことがある。猟師は上臈方の若さに華やぐ美しさと、極老揃いの供回りにびっくり、こりゃあどこか余所のご領主が所領を訪問なさる途中だろう、と思い、もっと速く先に行けるようにと、馬車の踏み段に坐り込んだ。ところが突然ざわざわと水音が聞こえ、ばしゃりと体が水に浸かった。急いで跳び下り、なんとか助かったが、馬車はブーヘン湖に没してしまい、鳴猟師はずぶ濡れの尨犬さながらのていたらくで家に帰った。その後のことだが、この三人の令嬢たちもやはり例の女の水の精と同様の運命となった。舞踏から戻るのが一度遅れたのだ。踊り相手の男たちが随いて行ったのだが、彼らは乙女らが湖に跳び込むと、やがて水中から幾筋かの血潮が立ち昇るのを目撃、乙女らは二度と踊りにやって来なかった。

ザルツンゲンからいくらか先、フラウエン湖の方角に浮島を一つ持つ小さなデンゲス湖あるいはハウト湖がある。これについてもほとんど類似の伝説が語られている。水の精の乙女が二人、湖から上がって来て、近くの村デンゲスの踊り場でしばしば楽しんだが、ある時一人の若者が片方の乙女から手袋を盗んだ。乙女らがおろおろとそれを探している内、真夜中になってしまい、とどのつまりは、女の水の精が刻限に遅れた話のいつもの結末となった。デンゲス湖にはある産婆が騎馬の男にむりやり連れ込まれたことがある。そこで莫大な財宝を目の当たりにし、たっぷり報酬を与えられて解放され、村に戻れたのだが、だれにも一言たりとも洩らさない、と厳しく誓言しなければならなかった。その後多年経って病の床に臥したが、司祭にあの夜の騎馬行を懺悔しない内は安らかに息を引き取れなかった。

ヴィルヘルムス谷（タール）の傍にも湖があり、一筋の小川が貫流している。エルネ川なるこのせせらぎにはエルネの水の精が棲（す）んでいる。ある若い猟師がその姿を見、惚れ込んで、婚約したのだが、その後信実（まこと）を破ったので、水の精は男を罰した。精は男を深みに引き込み、死ぬまで接吻（くちづけ）して、また外へ投げ出した。投げ出した村は蟇蛙（ウンケンローデ）の開墾地。この村の名はなんともぞっとする響きである。猟師はそこに埋葬されている。

七五〇　賭け物邸（シュピールハウス）

ティーフェン村（オルト）には小城とでもいえよう石造の邸宅がある。昔これは途方もなく賭博（とばく）好きな騎士の持ち物だった。ある時この男は別の騎士と賭（か）け事をやって財産を失（な）くした。最後にこの邸も賭け物にされた。相手はある切り札――赤の六――で邸を贏（か）ちえた。嬉しがった彼はこの札（カード）を自家の紋章に組み込み、添え名をシュピールハウスとし、このように所有権を活用した。しかしその後邸は他の者の手に移った。手に入れた者がどんな一族だったのか、子孫はどうなったのか、ティーフェンオルトになにも資料は残っていない。しかし土地は相変わらずシュピールハウス領なる名称で、建物には幸運な勝者の石の紋章が飾られている。また教会にはその騎士の紋章が懸かっており、縦長に二つに分かたれた黒地と銀地に赤の六が記されている。この札（カード）を掲げている腕が冑（かぶと）飾りである。牧師が説教する時、真っ正面にこの札（カード）を見ることになる。

七五一　石の揺り籠（かご）

ティーフェン村（オルト）を見下ろす古城クラインベルクがフランケンシュタインの殿たちによって築造された時、城が難攻不落になるように、と、幼児が石の揺り籠に寝かされ、生きながら壁に塗り込められた。かくして揺り籠が柩（ひつぎ）になったしだい。土地の衆は折折廃墟（はいきょ）でしくしく泣く声を聞いた。声は城壁の内部から出て来るように思えた。白装束の子どもが独りぼっちで花を手にし、城の中庭で遊んでいるのを見た、と言い張る者も少なくない。近寄ると子どもは消えてしまう。もっとも現今ではもはや何も聞こえず、何も見掛けない。数年前石材の大部分をティーフェンオルトで何戸かの農業用建物（ファーム・ビルディング）[120]を作るため城壁の一つを壊したためかもしれない。その際ちいちゃな石棺と子どもの骸骨が本当に見つかったのだ。

七五二　郁金香（チューリップ）

クラインベルク城は周囲を森に包まれ、中庭は芝草で覆われている。ある時羊飼いがここで群れの番をしていると、ある場所に綺麗な郁金香（チューリップ）が一輪咲いているのを見つけた。この種の花がここにあるなんてなんとも不思議だったが、羊飼いはそれを手折り、帽子に挿した。そうした途端、絵のように美しい、けれども蒼白（あおじろ）い顔の姫君が前に立ち、一緒にいらっしゃい、と身振りをした。羊飼いがとやかく考えずに後に従うと、幻は彼を古城の許（もと）へ連れて行った。そこの壁には羊飼いがついぞ見たことのない入り口が開いていた。これを深く下って行くと、壮大な広間

に出たが、広間のぐるりには金貨がどっさり積まれていた。姫君は羊飼いに、欲しいだけ、運べるだけ取るように指図した。ところが彼の衣嚢（ポケット）ときたらどれもこれも穴だらけだったので、詰め込むとまたこぼれてしまった。そこで羊飼いは被（かぶ）っていた帽子を脱いで、これをぎっしり一杯にした。その時例の花が落ちた。そこで――いつもの筋書きになるが――同様のことが起こったそうな。姫君が「一番大事なものを忘れないで」としきりにかきくどくのに、羊飼いは莫大な金貨のことしか念頭になく、花には目もくれなかった。穴蔵から戻って来ると、入るときには全然気付かなかった鉄の扉が背後で激しく閉じ、金貨は悉（ことごと）く消え失せた。羊飼いは大層驚愕（きょうがく）したのでひどい消耗（しょうもう）病に罹（かか）り、三日後に死んだ。

奇蹟の花を述べる際、地域伝説が郁金香（チューリップ）を挙げるのは稀で、普通は大体黄色い鍬形草（くわがたそう）[121]の花か青い鐘形草（ふうりんそう）[122]の花、あるいは白百合か緋色の百合である。

七五三　羊歯（ファレンザーメン）の種を見つけた男

羊歯（ファレンザーメン）の種――羊歯（ファールザーメン）の種とも言うが[123]――を苦労して探し、ベンスハウゼンの猟師（ＤＳＢ五〇〇）のように黒魔術や地獄の手助けを借りてこれを手に入れようとする者は少なくない。一方、探してもいないのに見つけてしまう人もいる。適切な時期刻限に発見・採集した羊歯（ファレンザーメン）の種は幸運を齎（もたら）し、猟獣などを必ず撃ち留める効能を持つばかりでなく、所持者の姿を見えなくもする[124]。ヴェラ河畔のベルカのある男だが、まことに妙ちきりんな経験をした。子馬が森で迷ってしまったので探し回っていたところ、森の空き地で種が成熟した羊歯（しだ）を踏みつけたのに気付かずにいた。その時種がいくらか靴に入ったのである。長いこと森の中を歩き回ったが、子馬が見つからずじまいだった男

は漸く明け方家へ戻り、煖房部屋に入って陶製煖炉の後ろの肘掛け椅子にむしゃくしゃしながらぐったり腰を下ろした。妻や子どもたち、下男下女らがそこいらを行き交い、せわしなく働いたりしゃべったりしたが、だれも、お早うございます、と声を掛けて来ない。男はなんとも訝しくなってとうとう「わしにゃあ子馬は見つからなんだ」と口を切った。――これには一同びっくり仰天。突然のこの声がどこから聞こえたのか見当も付かず、お互いに顔を見交わしているのに、男を見る者は一人もいない。「あら、あなた、いったいどこにいるの」と妻が不思議そうに叫んだ。そこで男は椅子から立ち上がり、部屋の真ん中に歩み出て「わしゃあここにおる。莫迦だなあ、おまえ。わしはおまえの真ん前におるでないか」と言った。――すると家の者はもっと驚いた。なにしろ彼が立ち上がって歩いた音は聞こえたのだが、その姿は相変わらずとんと見えなかったから。そこで男は、自分が他の者から見えなくなっているのに気付いたが、そのままではいたくなかった。思案を巡らしたところ、何か砂粒みたいな物が靴に入ったことを思い出し、すぐさま靴を脱ぎ、逆さにしてとんとん叩いた。すると魔法の種が落ちた。落ちはしたがだれにも見えなかった。人間に見つかる時期が過ぎていたからで。もっとも種を見つけた男の方は皆の前にまた姿を現した。

七五四　ゲルシュトゥンゲンの肉屋たち

かつてゲルシュトゥンゲン[125]に奇妙な語り種ができた。同地の肉屋たちとブランデンブルク伯との間に、オスナブリュック市の屠畜業者らとトレッフェンブルク伯との間に起こった事件（ＤＳＢ二八〇）とほとんど酷似した経緯が生じたのだ。ブランデンブルク伯は――トレッフェンブルク伯と同様――肉屋たちの販売料金を規定する権利を

持っていた。この肉料金通告役はリンパートといい、トレッフェンブルク城から下って来たのが〔城仕えの〕侏儒だったように、こちらブランデンブルク城から下りて来る方は不具の蹇者だった。この男、乗った驢馬ともども悠閑閑を楽しんだので、とうとうゲルシュトゥンゲンの肉屋連は堪忍袋の緒を切らし、癇癪持ちの肉屋組合組合長がのんびり屋の料金通告役をとてつもなく速い旅に送り出した。すなわち永遠の世界への旅である。殴り殺してしまったのだ。次いで肉屋たちは不具者をばらばらに解体、これを驢馬の背の振り分け籠に詰め、ブランデンブルク城へ追い返した。城の伯爵はもとよりこれに激怒、これまでゲルシュトゥンゲンを防衛・保護する立場にあったのに、以降市を攻めに攻めたので、こちらはもはや心休まる日とて無くなり、遂には、なにとぞご寛恕を、と哀願するに至った。ブランデンブルク伯はトレッフェンブルク伯のようにこれまた三つの、苛酷過重かつほとんど調達し難い貢納を申しつけた。一シェッフェルのヘラー銀貨、それも全て同一刻印のもの、淡青色の風犬を三頭、男の背丈の長さでこれっぽっちも節の無い柏の棒を三本である。いわく。これらが一年以内に納入されなければ、市は屠畜業者組合員全員を縛めてこのほう〔＝伯爵〕に引き渡さねばならぬ。さすればこのほうはばらばらにされたこのほうの家臣たる肉料金通告役の四肢よりきやつらの四肢が固いかどうか検分いたす、と。ヴェラ河畔の小都市ゲルシュトゥンゲンはなんとしたものか途方にくれたが、結局オスナブリュックと同じく名案が浮かんだ。練達の斡旋人たるユダヤ人がヘラー銀貨を両替業で手に入れ、柏の棒は硝子管で育成、毛並みが雪白の風犬雌雄に必要付属品を備えた淡青色の飼育部屋を用意したわけ。かくして難しい芸当は成功、伯爵の怒りは鎮められた。次いで屠畜場[16]が貧しい不具者たちのための救護院に改装され、肉屋たちがリンパートをばらばらにした広場には幅広の石板が置かれた。これは今日なおリンパートの石と呼ばれている。相互にかくも離れた町と城に纏わる、全ての細部が共通、差違はごく僅かなこの伝説を繰り返してみると、なんとも奇妙である。今日、ブランデンブルク城はその

宏大な廃墟がヴェラ河谷を飾っているだけ、ゲルシュトゥンゲンの傍をテューリンゲン鉄道が走っている。

七五五　リンディッヒの小奥方

ゲルシュトゥンゲン近郊にはブランデンブルク城――ここではいまだに亜麻の種を携えた彷徨える姫君が徘徊する――の他にもう一つ城があったそうな。その名はリンディッヒの城館。昔ここに絶世の美姫が住んでいた。その麗しさは全地域の諺になったほど。けれども姫君は四大の精、渓谷の女の水の精、ライヒェンドルフ鉱山の山の精や小人のヴィヒテルマンたちとまことに奇妙なつきあいをしていた。そこで両親は娘をアルンスベルク山下の修道院――ボニファチウス聖者が創建したとのこと――に送り込んだ。しかし姫はブランデンブルク城のある青年騎士によってこの修道院から拐かされ、騎士は彼女を奥方にした。が、結婚しても彼女は水の精たちとの交わりを全く止めることはできず、一人息子を水の精と婚約させ、この水の精は婚約者を若過ぎるのに自分の濡れた領分へ連れ去った。平たく申せば、一人息子はヴェラ川で溺死したのである。若き奥方は暗い慕情に衝き動かされ、安らぎを得ることなく歩き回り、幸せを見出せず、既に半ばはあの世のひとだった。花の盛りに臨終を迎えた彼女は告解をすることなく息を引き取った。深く閉ざされた乙女の、そして更には成熟した女性の胸を、いかなる歓喜に溢れた素晴らしい秘密が揺るがし満たしていたか、坊主に打ち明けようなんて気はさらさら無かったからである。それゆえ免罪を受けずに身罷った彼女は天国に行かず、亡霊たちの暮らすどっちつかずの領域――彼女には別段不快ではないのかも――を彷徨うことになった。そこで奥方は七年に一度、それもまず、ブランデンブルク城とゲルシュトゥンゲンの間、かつてリンディッヒ城があった場所に、次いでゲルシュトゥンゲンからコールバッハ谷なるかつ

ての修道院へ向かう街道筋に出現しなければならない。腰に鍵束を提げ、老女の服装をした彼女には困った癖があって、通行人の背中に負ぶさりたがる。それに生前は大気の精とつきあっていたというのに軽やかとはおよそ程遠いのだそうだ。もっとも我慢して彼女の目的地までおんぶしてやると、彼女が提げている鍵束で財宝の詰まった城の、あるいは修道院の穴蔵を開けて貰える由。そして、財宝の半分は自分のものにしてよいが、残り半分でローマに小教会を建立せよ、と言われる。そういう人間はまだいないが、リンディッヒスフラウヒェンの小奥方をおんぶした中何人か——農夫のエーメ、肉屋のレージングその他堅気な連中——は死んでしまった。奥方の姿を目にしただけでひどく驚き、重病になった人たちもいる。さて、リンディッヒスフラウヒェンの小奥方はこれからもずっと救済されぬままどっちつかずの領域に留まらねばならないだろう。だってさ、仮にだれかが本当にそんな財宝を手に入れたとしてですよ、こう考えるんじゃないかな。ローマに教会を建てる——そいつはヴェラ川に水を運ぶようなもんだよな、ってね。

七五六　ヴェラ河谷の小人たち

ヴェラ河谷の、ヘルシェル川が魂哭山の下を静かに過ぎり、アイゼナッハ近郊へ流れてヴェラ川に合流する辺りに、その昔小人のヴィヒテルマンがたくさん暮らしていた。いや、それどころではない、ゲルシュトゥンゲンの辺りやベルカの町の上の方まで夥しく群がっていたのである。同地の城館の厩の地下に棲み着いており、この厩におとなしくしていられる馬などいなかった。ここに入れられると馬たちは狂ったようになり、鎖を引きちぎり、何もかも打ち壊し、噛み裂いた。人間より獣の方が精たちの存在を見聞きし、嗅ぎつけるものだからである。ベルカを見下ろすダンクマールスハウゼン村のある農夫にもそんなことが起こった。飼っている馬が次次に斃れ、貧窮の

どん底に陥りそうになった。ある日の宵、農夫が玄関を通り掛かったところ、伏せてあった盥の下でひそひそ喋る声が聞こえた。そっと窺うと、盥の蔭で四人のヴィヒトラインが薄明かりを便りに捏ね桶――廊下に置いてあったのだ――から掠めて来た捏ね粉で麺麭を練っているところで、「よおく練りな、よおく練りな」と小人の一人が仲間に言ったのだ。農夫――小人の邪魔をする気なんぞ無かった――に気付くと、ヴィヒテルマンの一人がこう言葉を掛けた。「ねえ、あんたの馬たちがなぜ死ぬのか知ってるかい。わしらが厩の地下で暮らしとるからさ。他の厩に移してやんな。そうすりゃ一匹も死にゃあせん」。――こう勧められて喜んだ農夫はその通りにし、以来一頭も死ななくなった。ヴィヒトラインはいろいろせっせと力を貸してくれるようになり、農夫は裕福になった。これというのも、小人たちが捏ね粉を盗んで麺麭を練ったのを叱らなかったからである。

シュピヒラ村[129]の下方、ヴェラ川右岸にシュパーテン山が伸びている。この山麓に土の洞窟[130]があり、今日でもヴィヒテルの隠れ処と呼ばれている。かつてこの中にはヴィヒトラインがたくさん、そして長いこと棲んでいた。ところがある朝のこと、シュピヒラの渡し守ベックの許に小人が二人やって来て、向こう岸へ渡してくれ、と言い、一緒に川の渡し場に行った。渡し場に着き、渡し守が岸から舟を離そうとすると、小人たちは、まだちょっと待って欲しい、これから来る者がいるので、と頼んだ。そこで言われた通り暫く待ったが、だれも来なかった。だれも来なかったのに、渡し舟はどんどん深く沈み込み、どんどん重くなった。渡し守がとうとう舟を岸から離した時には、こんな重荷を渡したことはついぞ無かったわい、と思えた。ところが右岸に着[131]くと、舟は見る見る軽くなり始めた。「なあ、渡し守さんや、わしらの渡し賃に何が欲しい」と小人の片方が訊いた。「頭数だけの金かね、それとも浪の華（塩）一枡かね」。一枡の塩というのは、二人分の渡し賃としてはおそろしく気前の好い手間代に思えたので、渡し守は、塩をくれ、と答えた。「頭数だけ、って言った方がずっと得をしたにさ。あんた、わしの右

の肩越しに見てみなあよう」ともう片方が言った。渡し守がそうすると、数限りない小さな人たちが舟から岸辺に下りていたし、まだ陸続と下りる最中だった。それから最初の二人も下船、次いで全員渡し守の目から消え失せた。けれどもこの上もなく純良な塩をぎっしり盛った枡が一つ渡し舟に置いてあり、この塩は枡から決して尽きることはなかった。

七五七　ホレ夫人の沐浴場と池

ヘッセン邦には長く幅広の背を持つ高山がある。この山に纏わる伝説は数多ある。山の名はマイスナー[132]。この山塊はテューリンゲン山地のシュネーコプフ[133]、シレジアのツォプテン、レーン山地等とごく似通っている。シュネーコプフ峰の下方に殺しの場があるように、マイスナー山上には屠殺の芝生が、あちらには幾つか悪魔の環があるように、こちらには悪魔の穴が数箇所ある。ホレ夫人もやはりマイスナー山上に沐浴場と池を持っている。彼女はしばしば真昼刻そこで水浴びをするのが見られ、それから消え失せた、とは古老の話。ホレ夫人とその眷属は折折旅人や猟師を山の上で縦横に引き回して迷わせたものだが、夫人を信頼しきってその沐浴場にやって来る女たちには、スパなる聖レマクルスの足跡（ＤＳＢ一三一）とかボックレート[134]に勝るとも劣らぬ霊験を授けた。ホレ夫人は山上に赤ちゃんの泉を持っている。彼女はここから子どもを取り出して女たちの家へ運ぶ。しかし子どもを連れて来てしまうこともある[135]。ホレ夫人はまた、巡礼の庭園の乙女（ＤＳＢ七四六）と全く同様、花卉や果樹が豊かに生い繁る極めて美しい庭園を持っているが、なにせ自身糸を紡ぐので、亜麻もぎっしり育っている。彼女は勤勉に糸紡ぎをする女たちには褒美を与え、怠け者の女たちには罰を加える。彼女は、ある時は蜘蛛の巣のように灰色の装

束を纏った婆様の恰好で空ろな木の切り株に坐って、またある時は白衣の美女の姿でホレ夫人の池の汀、あるいは水面に出現する。魂哭山（ヘールゼーレンベルク）で特に用事がなかったり、荒れ狂う同勢（ダス・ヴューテンデ・ヘーア）と連れ立つ必要がない場合、ホレ夫人は大抵マイスナー山にいるのだが、見掛けなくなることもよくある。――だがホレ夫人の池の深みから鐘の響きや陰鬱なざわめきが聞こえることがしばしばである。陰鬱なざわめきはあのヘールゼーレンベルクの洞窟の傍に立つと聞こえる（ＤＳＢ四五七）のと全く同じ。古人の考えたフルダ夫人[136]の思慮深く見事に描かれた肖像を見たければ、ペトラルカの『幸運の書』[137]の第十対話――あるいは章――にある木版画を御覧ぜよ。そこでは彼女は薬草が生い繁り、稲妻の閃光が焔のように交錯する深い森の中に立ち、勤勉な糸紡ぎ女たちに与えるぎっしり糸の巻き付いた紡錘で一杯の、大きく長い糸巻き棒を高高と持ち、月と環になった十二の星――これは彼女が巡行する十二夜（ディ・ツヴェルフ・ネヒテ）を示す――を下にしている。夫人自身は年寄りで、腰は曲がり、皺だらけ、その長い巻き毛はざんばらで頭の周りを風に靡いている。こうした〔十二夜の〕巡行の際、娘たちが新しい糸巻き棒を用意したのを見つけると、彼女はこう言う。

髪の数ほど
良いことある歳を。

でも新年になってもまだ去年の亜麻が糸巻き棒に残っていると、彼女はこう言う。

髪の数ほど
悪いことある歳を。

そして怠け娘らの布団を剝ぎ取り、素っ裸で雪の中や冷たい敷石の上に転がし、紡いだ糸を引きちぎり、おそろしく無慈悲に振る舞う。

七五八　愛の小川（リーベンバッハ）

マイスナー山からそう遠くないところにシュパンゲンベルク[138]の町がある。その名はある山に由来する。この山の上では多量の丸い小石が見つかるが、これらには全て天然自然に帯金（シュパンゲ）の模様がある。市はその飲み水を向かいのある山から得ている。シュパンゲンベルクがこの上質の水に恵まれる前のことだが、昔この町に相思相愛の恋人たちがいた。二人は結婚を切望したのに双方の両親は厳しく反対した。しかし二人が決して思い切ろうとしなかったので、おまえたちだけであちらの山の良い水源から町まで水を引いて来るなら、婚礼を許してやろう、と条件を課した。そこで恋人たちは苛酷な作業を始め、小川を掘りに掘り、長い間努力を重ねて年老いた。けれども彼らはお互い真心籠めて愛し合い続け、とうとう辛い大事業は成功した。完成するまで四十年は下らぬ歳月を掘るのに費やしたのだった。二人は周囲から、おめでとう、と囃され、花環――婚礼の花環で飾って貰った。そこで彼らはじっと目を見交わし、涙を流し、ひしと抱き合い、くずおれて息を引き取った。――こういうしだいで、恋人たちがひたむきに掘った小川は愛の小川と呼ばれているのだ。

七五九　射手オットー

かの勇猛果敢なテューリンゲン女性ゾフィーア[139]が彼女のブラバントの子どものため支持者の助けを借り、ハインリヒ高貴伯（デア・エアラオホテ）と素晴らしい遺領を争った挙句、ヘッセン家の基礎がしっかりと築かれてからのこと、鉄方伯（デア・アイゼルネ）と添え名されたヘッセン方伯（ランドグラーフ）ハインリヒ[140]――ハインリヒ一世、すなわちブラバントの子どもの孫の一人――には子息が二人と息女が三人いた。ハインリヒ、オットー、アーデルハイト、エリーザベト、ユーディトである。父方伯は多くの相続人に分割するほど邦（くに）を損なうことはない、と賢明に考慮、それゆえ長子に邦を与えると定め、オットーを修道士にしようとした。しかしオットーには毛頭そんなつもりはなく、武器・甲冑（かっちゅう）を手に入れ、従士一人、乗馬二頭を連れただけで、秘かに父君の宮廷を抜け出し、射手という触れ込みでクレーフェ公アードルフの宮廷に現れ、ご奉公を、と申し出た。公は喜んで召し抱えた。なにしろオットーは手練（てだ）れの射手だったので。そうこうする内オットーの姉妹は三人とも結婚、アーデルハイトはポーランド王カジミールに、エリーザベトはザクセン＝ラウエンブルク公オットーに、ユーディトは豊かな――あるいは、気前が良い、と申すべきか――ブラウンシュヴァイク公に嫁いだ。ところがオットーの兄ハインリヒは死んでしまった。老方伯の次子が杏（よう）として行く方（かた）知れずとなっているので、もはや跡継ぎのいないヘッセン邦を相続・併呑しようと望んだのは一人ブラウンシュヴァイク公だった。しかし同公はヘッセン人に好かれておらず、老方伯にしても自分の死去をこの娘婿（むすめむこ）の喜びとする気はさらさら無く、あの穿（うが）った古諺（こげん）「死にたがるやつは死にはせぬ[141]」通り生き続けた。

そうこうする内射手オットーは主君の息女エリーザベト姫に恋をし、彼女からも愛されたが、二人ともこれをご

く内密にしていた。これはそうせざるを得なかったわけ。なにしろ姫自身は相手の高貴な出自については皆目知らなかったのだから。ところがある時、ヘッセンから来た遍歴の騎士ハインリヒ・フォン・ホンブルクがたまたまクレーフェの宮廷を訪れ、生まれながらの若きご主人が公爵に仕えているのを目にした。すぐさま若殿と気付いた騎士は大層恭しくご挨拶申し上げた。かくして若殿の秘密があからさまになり、その恋ももう隠さずに済んだ。公爵は喜んで二人の結婚に同意、老方伯は神が再び息子を贈ってくださったことを感謝した。かくしてブラウンシュヴァイク公はこのたびは何も相続できず、後になっても同様だった。というのは、射手オットーは父より先に世を去り、相続者不在という事態になったが、邦は老方伯の弟の子息で学者だったヘルマン[12]の手に落ちた。この人から〔後の〕全てのヘッセン方伯が出ており、その名も高い偉大なフィリップ寛大方伯（ディア・ホッホヘルツィゲ）[13]もまたこの系統である。

七六〇　呪い

かつてフィリップ方伯は殊更目立つ供回りを従えずに領内を巡行した。これは彼が好んでしたことである。その際は粗末な服装で、だれにも身分が分からぬようにした。縒り糸の束を運んでいる農婦に行き逢ったので、「どこへ行くんだね、おばさん」と方伯が訊くと、女はくどくどと嘆き始め、こう恨みつらみを並べ立てた。「あたしゃあこの糸を売りに行かにゃならねえですよ。何でもかんでも足りないものだらけだがね。それっちゅうのもあの方伯が取り決めた税金を払うためさ。悪いご時世だよ、ひどい締め付けだよ」。方伯が、女が納めねばならない税はどれほどの額になる、と訊ねると、一四分一グルデン[14]、との返辞。――そこで方伯は財布に手を入れ、四分一ターラーを一枚女に与えた。貧しい女は嬉しくて火のように顔を赤くした。けれども貨幣の表に鋼鉄の鎧をきちんと

纏っているフィリップの肖像が刻印されている――裏面は胄飾りの付いた方伯の胄と「神の授けたもうものは常に拒めず」[15]というあの素晴らしい金言である――のに、それは見ずにこう叫んだ。「神様が報いてくださいますように。神様が報いてくださいますように。お偉い旦那様。だども、このあなた様のお銭が、あたしがあれの金蔵に持って行かにゃなんねえこのお銭が、方伯の魂に地獄の焔みたように焼き付くとええだ」。――方伯は笑いながら女と別れ、扈従たちに向かって言った。「者ども、聞いたか。なんとも妙な取引よな。他ならぬ余が己が金でこんな呪いを買い込むとは。したが、ままよ――『神の授けたもうものは常に拒めず』だ」。

七六一　ニッダ

フリードリヒ赤髭帝が世を治めていた頃、ヘッセンの邦に盗賊伯爵がおり、界隈に大層危害を加えた。その名はベアトルト。アルテンブルクなる山塞が棲処だった。やがて皇帝に告訴された彼は城を包囲され、猛攻を受けた。遂に盗賊の配偶である伯爵夫人が開城・降服を申し入れ、夫人の驢馬と夫人自身が運べるだけのごく大事なものを携えての安全退去を要求した。これは承認されたが、伯爵は驢馬に乗らないこと、伯爵は「ごく大事なもの」には入らない[16]との条件の下でだった。伯爵夫人は、夫ベアトルトを驢馬に乗せない、と応諾、驢馬の背には三人の小さい子息を乗せた。しかし夫は自分の背に負ぶって城を退去した。もっとも他にも「ごく大事なもの」を若干衣嚢に入れてのことだったが……。一行はアルテンブルク――既に皇帝の兵士に破却された――からそう遠くないところへ差し掛かった。伯爵夫人は、夫を背中から下ろして、驢馬が立ち止まった場所に定住する、と誓った。ところが驢馬はその後すぐに立ち止まったばかりか、もう梃子でも動かなくなった。そこで伯爵夫人は先へ進むよう促し、

「ここじゃない、ここじゃない」と叫んだ。――でも驢馬は、かの言葉を喋ったバラムの牝驢馬[147]のように、頑として立ちっぱなし。一行は余儀なくそこに留まり、火を焚いてその夜を過ごさねばならなかった。結局彼らはそこに住むことにし、ニッダと呼ばれるようになった城館を建てた。子息にそれぞれ一つづつ、三つの城を造ったのだ、との説もある。破却されたアルテンブルクの幾つもの穴蔵にはまだ莫大な財宝が眠っている。また城址ではかつて蹄鉄がたくさん見つかった。この蹄鉄はベアトルト伯が騎馬で掠奪行に出掛ける時、馬どもの蹄に逆に打ち付けさせたもの[148]。

この伝説は愛情溢れる詐術を繞らして夫を救った話の最も初期の例である。もっとも逞しく貞節なドイツ婦人のこと、その後もシュタウピッツ騎士の救出では一回、ヴァインスベルクの女たち（〔双方とも〕DSB八八七）では合わせてどっさり、繰り返されている。

七六二　ツィーゲンハイン伯

ヘッセンの都市ツィーゲンハイン[149]はその昔何代か伯爵家の所領だった。もっとも既にこの家系は断絶している。伯爵家はテューリンゲン方伯ルートヴィヒ鉄方伯の分かれだった。最後の伯爵はヨーハン[150]といい、強者伯との添え名があった。まことに彼は強力ハンスみたいな力持ち[151]で、あの――ブランデンブルク選帝侯の酒蔵から葡萄酒の小樽四つを一遍に運び上げた――貴族ヨッヘム・フォン・シャペロウ（DSB三六一）にしたところで、もしかすると伯には引けを取ったかも知れない。ある日のこと、これまた上ヘッセンの小さな町フランケンベルクを母堂と一緒にご散策遊ばそうと思し召されたツィーゲンハイン伯ハンス[152]は、いくらか狭い路地に差し掛かった。ところが

道の真ん中に酒樽を満載した荷車が止まっていて、両側を除いては通せんぼ。そこで壁か車に服を擦りつけて汚さずには通り抜けられない。母君の伯爵夫人は渋い顔をなさった。そこで奮起したハンス伯、ぐいと一押し、ぐいと一引きして満載の積荷ごと荷車を片側に寄せたので、道に面した家家の壁はがたがた揺れ、中の住人は地震かと驚く始末。これには母御前、再びご機嫌斜めとなり、こうお叱言。「どうしてもそうしなければならなかったのですか。そなたの体力を埒もなく振り絞って、かように軽軽しゅう無駄遣いいたすとは」。——こう言われたツィーゲンハイン伯ハンスは神妙に「母上、なにとぞお怒り召さるな。お許しくだされ。それがし、良かれかし、と思いましてな、母上がお通りになれるよう場所を空けたかったのでござる。どうもやり損ないましたので、過ちを改めようと存ずる」と応じるなり、母夫人が口を挟むのを待たず、すぐさまぐいぐいと二度動かして積荷ごと馬車をまた元通りの位置に戻した。かくして方伯令夫人におかせられては後へ引き返し、別の横丁を抜ける散歩径路を見つけねばならなかった。

七六三　ボイネブルクの姫君たち

ヘッセンのボイネブルク城とそこに住んでいた女性らについては数多の伝説が民間に語り伝えられている。昔三人姉妹がおり、末の姫が、神意により三人の一人が霹靂に撃たれて死ぬだろう、という夢を見た。朝になって姉たちに夢の話をし、昼に真っ黒な雷雲が湧き起こると、長姉が「きっとわたしが死ぬ定めなのだわ」と言い、椅子を外に運び出させ、嵐の中でじっと待ち受けた。けれども何事も無かった。二日目、再び雷雲がおどろおどろしく近づくと、次姉が同じ事をした。しかし、これも長姉同様恙なく戻った。そこで三人目が「神様がお召しなのはわた

しです」と言い、これまた同じく準備を調え、告解を行い、形見として寄進をし、椅子に坐っていた。するとすぐさま稲妻が一閃し彼女を殺した。

まるきり違う物語もある。樹齢千年を閲した柏がボイネブルク城の中庭に立っていた。ある夏の日、城主の騎士の一人娘が木蔭に横たわってとろとろまどろんでいた。急に嵐が近づき、姫は雷鳴と驟雨に目を醒まし、起き上がって城内に入ろうとした。その間に一条の電光が柏の樹に落ち、姫君も死んだように投げ出された。けれどもただ気を失ったに過ぎなかったので、間もなく無事に正気に返った。そこで父親は喜んで感謝の徴に貧民救済基金を設けた。以来毎年聖木曜日[グリューンドンナースターク](155)に城の礼拝堂付き司祭は引き裂かれた柏の前で記念の説教を行うのが習わしとなり、二十四箇村の貧民に穀物と肉が頒け与えられた。姫は修道院に入った。城はとっくに廃墟と化したが、救済基金はいまだに存在している。これはダッテローデ村の牧師の話。

昔、聖木曜日[グリューンドンナースターク]になっても積雪が深く、施物を積んだ四頭立ての馬車でさえも城へ通じる険しい路を登り切れずにいた。そこで駅者は引っ返そうとした。ところが突然、美しいが厳しく怒った顔つきの白衣の乙女が車上に出現、駅者に城へ登るよう身振りをした。仰天した駅者はまた元の路を辿ったが、なんとまあ、馬たちが今度は楽楽と重い荷車を牽いて行くではないか。城に着くと乙女はにっこり微笑んで消え失せた。馬車の周りに集まった民衆は皆この姿を目撃した。

ヘッセンの邦がヴェストファーレン王国なるもの(156)に変わった時、フランス軍当局はこの由緒ある救済基金など知ったことかとばかり、経費節減というありきたりのいんちき名目――フランス軍に留まらずよく使われる悪辣な財政上の手管だが――の下、他の歳入もろともちょろまかそうとした。そこで実際、一八〇八年には施物分配とお説教は行われずじまいだった。けれどもヴェストファーレン国王が恐ろしい幻影を見たので、彼の財務官たちは救

済金を支出、ボイネブルク城の遺言を実行しなければならなくなった。

ボイネブルク城址の地下にはいまだに莫大な財宝が眠っている。そしてこれを姫君が守護している。彼女も白布を拡げて亜麻の種を干しており、何人かの者を幸せにしてやった。三十年戦争の折、エシュヴェーゲ、ザンドラ、その他近隣諸都市からたくさんの財貨が城へ運ばれて隠された、という話である。

ボイネブルク城の姫君は白衣の騎手の姿でも出現する。彼女は城山の台地で深紅の萼を持つ白百合が咲いているところまで駒を駈り、これを折り取ると、急いで引き返す。行き逢った者が、純真無垢・品行方正な人柄で、「その花をください」と声を掛ければ、大層幸福になれる。しかしながらまだだれもそうなったことはない。もはや純真無垢・品行方正な人間なんぞいやしないからである。

七六四　灰色衣装の小人

前世紀〔＝十八世紀〕の半ば、ある時ボイネブルクの猟師たちが何人か、じめついた天気のある秋の日、城山に集まり、一雨来る前に古城の廃墟で射撃を試みたことがある。彼らは雪白の髪をした灰色衣装の老小人が物思いに耽りながら城址の苔と石の上に坐り込んでいるのを発見した。そこで言葉を掛け、あれこれ問い質したが、小人はうんともすんとも答えなかった。猟師たちは腹を立て、小人を幾つか引っぱたいた。ところが小人はどこを風が吹くといった風情、笑うでもなければ泣くでもなく、神色自若、沈黙を守った。猟師たちは小人を犬の牽き綱で繋ぎ、縛り上げてライヒェンザクセン(四)にいる主君の許へ連れて行った。そこに行けば――と彼らは考えたわけ――やっこさん、きっと喋るに違いない、と。しかし小人は依然として黙りこくったまま。頷きもせず、首を振るでも

ない。相変わらずの無言の行で、また、こうしたい、と身振りで意志を示しもしない。食べ物や飲み物には触れようとも。喜怒哀楽を一切表さない。時が経てばさだめし折れるだろう、と考えた殿たちは、小人を厳重な隔離室に禁錮、そうするまでもないのに部屋の外にも見張りを付けた。けれども翌朝になると――一説によれば、三日後――小人の姿は消え去っていた。置き土産として卓子の上にあったのは勿忘草一輪。これは菫に見紛うほど似ていた。――マイセンで初咲きの菫を見つけてそれに被せておいた執事の帽子の下に宮廷道化が入れたのはこの花である。この奇妙な話[138]はマイセン城の階段吹き抜けの石壁に刻まれている。

七六五　最後の葬送の騎士

昔からつい近年に至るまでヘッセン邦では――もっともここばかりでもなかったのだが――君侯や領主が死ぬと、頭から足まで甲冑に身を固めた黒装束の武士が、黒い馬鎧を纏った駒に跨り、葬列の先頭に立つ柩に扈従するのが習いだった。そうした騎士を人は葬送の騎士と呼んだ。こうした騎馬での扈従に当たった者はその年の内に――生前故人を送って暗い地下納骨堂に下りたように――主君の後を追って黄泉の国に赴くのだ、と言い習わされたものである。現選帝侯の祖父君たる大公殿下、ヘッセン選帝侯ヴィルヘルム一世[139]が一八二一年逝去した際、若きエシュヴェーゲの殿が葬送の騎士として柩に従うことと定められた。

エシュヴェーゲの殿ルートヴィヒは力に満ち溢れ、堂堂たる風采で、花も盛りの眉目好い男だった。一八一一年から一三年までドライスィヒアカー[140]で林学を学び、また果敢に剣を揮いもしたので、この役割にはぴったりだった。しかし伝説を気にした家族は辞退するよう警告した。だが雄雄しい青年は、ご主君に尽くせ、と命じられた最

後の栄誉あるご奉公を拒めず、また拒みたくもなかった。彼は完全に甲冑に身を固めて騎乗、霊柩馬車に続き、更には棺に従い冷たい納骨堂に下りた。が、彼の場合伝説は実証を示した。僅か数日後ルートヴィヒ・フォン・エシュヴェーゲ殿は亡骸となった。かくして故選帝侯の後継者はこの古い宮廷儀礼を廃止、以来君侯の柩に黒鎧の騎士が扈従することはない。

七六六　フランケン邦の使徒

その名も高き司教レミギウス[161]が西フランク族の偉大な支配者クロディオのある勝利の後、その姉妹アルドフレディスおよび三千のフランク族をキリスト教に改宗させ、洗礼を施し、一同に向かい、「そなたらがこれまでに焼き払ったものに祈りを捧げ、これまでに祈りを捧げたものを焼き払え」と語り掛けると――新しい信仰の光輝は東フランク族の領国へも向かって迸った。

当時はスコットランド、アイルランド、イングランドでは異教徒をキリスト教に改宗させようという気運がますます高まり、同地の諸修道院の聖職者から敬虔で天啓を受けた男たちが選ばれ、地域派遣者なる名称の下、宣教者としてあらゆる国国の異教徒たちにキリスト教を運ぶのに努めた。キレナ（キリアン）[162]という地域派遣者に任じられたある司教が他に十一人の随行者――彼らはローマへ赴きこの職務の任命・認可を受けた――と共に、ドイツの異教徒たちに福音を説くため、六八五年大陸を目指したのもこうした活動の一環である。伝道師はさまざまな地域に分かれたが、キリアンの許には司祭コロナートと助祭トトナンが残り、三人はフランケン邦へ行脚、ここでキリアンの道心堅固とそれに劣らぬ火のような雄弁は間もなく信奉者・帰依者を引き寄せた。その頃遠方にいるフラン

ク王の名においてフランケン邦を支配していたのはヘタンの子ゴッバート公で、公は使徒を自らの宮廷へ招き、その教えを聴聞しようと決めた。ゴツバート公はヴュルツブルクを見下ろす山上に居城を構えていた。伝説によればここにはローマの女神ディアーナの神殿があったとか。かねてキリアンとその随行者らは荒寥としたレーン山地に庵を結び、そこの最高峰に新しい教えと新しい契約の象徴たる聖十字架を立てた。今日フランケン邦でも至るところにたくさんあるキリアンの山、キリアンの頂き、そしてとりわけレーンの高嶺である聖十字山の存在がこれの証である。もっともこの山が現在の名称を授かる前に何世紀もが経過した。民衆はもともとこれをアッシュベルクと呼んでいたのである。ゲルマン族黎明期の異教時代、既に周辺の住民にこの山がアーゼンベルク[163]と呼ばれ、彼らの素朴な自然神殿として神聖なものとされていたとしても、あり得ないことではない。聖キリアンが仲間と共にこの地方に現れたのは六六八年とされる。彼らは山麓で平和な移住民たちに出逢った。人人は、改宗させるべき邦をつぶさに調べ、つぶさに知ろうとやって来た異邦の客らを歓待し、これら聖徒が齎したお告げを虚心坦懐に聴いた。間もなく近隣の諸地域から聴聞者がどっと押し寄せるようになり、キリスト教が根付き始めた。教父たちがヴュルツブルクで殉教死を遂げ[164]、かしこで異教が若木のキリスト教に再び猛猛しく覆い被さって枯らした時、クロイツベルク周辺の森林の中で新たなキリスト教信者たちが秘やかに寄り集まり、十字架の下で救世主に祈りを捧げた。現在巡礼教会が建つところである。クロイツベルク山麓のキリアンスホーフ村はいまだに聖者に雨露を凌ぐ宿を提供した場所と言われている。今でも、聖者が上に立って説教したというキリアンの頭巌や異教徒らに洗礼を与える水を汲んだという癒やしの泉を見せられる。

　クロイツベルクの近くに、高山に三方を囲まれて、極めて古い小都市司教の里がある[165]。キリアン聖者が随行者らと共にこの荒寥とした地域にキリスト教を齎した時、彼は――伝説によれば――ここでまず安全な滞在地、平和な

宿に巡り逢った由。それゆえ高貴な異邦人に宿を提供した前述の移住民たちの家は司教の家（ビショーフスハウス）と呼ばれ、家数が増えて村にまでなった時、司教の里（ビショーフスハイム）と命名されたのだ。後世になってもビショーフスハイムは、ボニファチウス聖者の敬虔な姉妹リオーバが滞在していたキッシンゲンからやって来たことで、格別の栄誉を享けた。この小都市――一二七〇年市壁を繞らした――の古さは〔バイエルン〕王国出納局の傍にあるビザンチン風建築様式の塔が実証しよう。この塔はかつて教会の鐘楼および見張り塔の両用に使われたらしい。

七六七　沼の乙女たち（モーアユングフラウ）

高いレーンの山並みの背、現在赤い沼と黒い沼が渺茫（びょうぼう）と底無しの水面（みなも）を拡がらせているところに、その昔村が二つあった。赤沼にあった村はポッペンローデといい、村民の罪深い生き方、あるいは彼らに対する呪詛（じゅそ）の結果沈んだのである。黒沼にあった村は沼（モーア）といい、同様の理由で滅亡、玄武岩の舗道――レーン山地（ゲビルゲ）に住まう者には石（ディ・シュタイネルネ・ブリュッケ）の橋の名で知られている――と腐朽した沼科の木（モーアリンデ）――沈んだ村の中心に聳（そび）えていた科（リンデ）の木と見なされている――以外は何も残っていない。この二つの沼には夜、かつては現在より頻繁に、キラキラ輝く光となって沼の乙女（モーアユングフラウ）たちが現れ、昔の棲処（すみか）の上をふわふわ飛び回ったものである。その内の二、三がヴューステンザクセン村へやって来て、教会堂開基祭の踊りに加わり、とても可愛い声で歌ったこともある。ただし決して十二時過ぎまでぐずぐずしたりせず、いてもよい時刻が過ぎようとすると、いつも白鳩（しろはと）が一羽飛んで来て、彼女らはその跡を随（つ）いて行くのだった。そして歌いながら最寄りの山中に入り、物見高くくっついて来た連中の見送る目から消え失せた。赤沼は界隈の住民にとって天気予報者でもある。明け方薄い靄（もや）が漂っていると、晴れにはならない。靄が濃く

なると、悪天候になる。沼全体が煙ると、雨、霰、雷雨が襲う。汚らしい沼の水がざわざわと波打てば、これはもう暴風、颶風、それどころか地震の懼れさえある。

これまた伝説の語るところだが、沈んで消えたポッペンローデ村で神の審判を免れて助かったのは二人の品行方正な娘だけ。でもこの子らもある時踊りに出掛け、罪深い快楽に身を落とした。すると突然姿が見えなくなった。娘たちのお気に召していた若者らが一心不乱に可愛い子ちゃんを探し回ったが、長いこと甲斐もなかった。しかし若者らの前に薄鼠色の装束を着た男が現れていわく。「おまえたちがどんなに探しても無駄だ。したが、笞を手にして、それで赤沼の水面を叩くがいい。そしてどうなるか眺めていろ」。若者たちがその通りにすると、なんとまあ、笞から血が滴った。これは若者たちが綺麗な踊り手らと二度と逢えないという徴だった。

七六八　聖ガンゴルフとミルゼブルク山

ミルゼブルク[166]はレーン山地の響岩でできた巨大な山で、近隣の山山を凌いで屹立している独特な山容が遙か遠くから見える。その形は六月ともなれば高地の牧草豊かな草原から遠近の谷の村村へ夥しくやって来る荷を満載した干し草車に似ている。そこで干し草満載の異名がある。もっとも棺のようでもあり、死人の柩と巷間呼ばれもする。この山は他の高嶺と同様周辺住民にとって天気予報者の役割をする。ミルゼブルクがもやっと煙る――下世話な表現を借りれば「団子を料る」――と、いつだってちゃんと雨が降る、と彼らは言う。山には薬草やらその他稀少植物がたくさん生えている。それから山について民衆が語る伝説も夥しい。幾人かが書いているように、この山は本来メルジーネンベルクといったのだとの説は、単なる作り話、好い加減な嘘っぱちである。レーン山地はメ

ルジーネ[107]とは縁もゆかりもない。第一メルジーネは水の精であって、山岳の女精とか森の女神ではない。ガンゴルフ聖者[108]がこの山をお気に入りの滞在地に選んだそうなので、ガンゴルフの山とも呼ばれる。高みにある小さな巡礼礼拝堂――一四九三年に建立された由――はこの聖者に奉献されたものである。昔むかし山の高みには荒荒しい盗賊一味が巣くう騎士の城があり、こやつらは天然自然の要害であるほとんど登攀し難い絶壁で守られた巌上の棲処で、長いこと罰せられることなく、家来どもを駆使して界隈全域の脅威となっていた。だれがこの城を築いたのか、最初はいつ築かれたのか、言える者はいない。極めて美しく、新鮮で、治癒効果のある泉をミルゼブルクに運んで来たのもガンゴルフ聖者である。それと共にあのラングドックのガンゴルフ伯（ＤＳＢ一三九）と全く同じ不思議なことが起こった。従ってあの邦の伝説がこの峨峨たるレーン山地でそっくりそのまま妍しているわけ。ミルゼブルクにはガンゴルフ聖者の穴蔵もある。ただしそれがどこなのかだれも言えない。穴蔵には莫大な財宝が満ちているが、いずこへともなく消え失せ、閉ざされている。だれにもそれは見つからない。ある時老婆が偶然摘んだ桜草[109]のお蔭で首尾良くこの穴蔵を発見した。穴蔵が開いているのを突然見つけたのだ。だが、彼女は怖かったので中に入らずに立ち去り、どんなことがあったのか、何を見たか、他の者に知らせた。この話を耳にした連中は皆訝しんだが、大勢が老婆にくっついてその場所に行った。しかし穴蔵はまたもや消え失せており、老婆は二度とそこを発見できなかった。

ところで聖ガンゴルフが自らに奉献された場所を持っているのはミルゼブルク山上ばかりではない。ヒルデンブルクと上エルスバッハ[110]の間にガンゴルフ修道院の廃墟のあるガンゴルフの山がある。その上方には自然にできた巌窟があり、これまたガンゴルフの山穴蔵といわれている。この修道院はやはり農民戦争の折破壊された。ここから遠からぬところに悪魔の教会ないし石の家なるものがあり、ヴァイスバッハ川[111]附近の小村ギノルフスを見

下ろしている。ここには極めて美しく絵のように積み重ねられた五稜（ごりょう）および六稜形の石の列柱がおそろしく整然と並んでいる。高さは四十脚尺（フース）に達する。これについて民間伝承にいわく。その昔下の谷に教会建立の企てがあり、建築現場に営営と石材が集められた。悪魔がこれに大層腹を立て、毎夜同じ量の石材を運び去ってこの山の高みに運び、こんな風に縦横に並べ、人人はどれ一つとして運び去ることも、下へ運び降ろすこともできなかったのだ、と。巷間言われることだが、悪魔が石を置いた場所から石を片付けようとしても無駄。なにしろそうするたびに、悪魔がその石か他の石をまた元の場所に戻すので。

ところでここでのように自分の教会すら持つほど悪魔が棲（す）み着いたようなところでは、ハルツ山地やテューリンゲン（テューリン）山地（ガー・ヴァルト）でもそうだが、一般にまだ他にも悪魔の所有物やら造った工事やらがあって、これはレーンでも同様。それについては少なからず伝説が行われている。

七六九　レーン山地（ゲビルゲ）の悪魔の造作いろいろ

ミルゼブルクに教会が建立され始めたのを見た悪魔は、この界隈（かいわい）の住民の一人に、近くの山の上に居酒屋を作ってやる、と約束した。居酒屋が教会より一日早く竣工（しゅんこう）したら、この住民は体と魂を提供する契約である。けれどもミルゼブルクの小教会の建築にはガンゴルフ聖者自身が手を貸し、石材は悪魔の呪いなんかより聖者の祈禱（きとう）の方に速く反応したので、小教会は丁度悪魔が最後の石を担いで空中を飛んで来た時に完成した。賭（か）けに負けた上、魂も手に入れ損ねた、と分かった途端、悪魔はその巨大な石を居酒屋の上に投げ落とし、工事をそっくり瓦礫（がれき）の山とした。今日見られる通りである。これらの巌（いわ）は割られた柏（アイヒェ）の薪（まき）の山のように積み重なっている。

悪魔の壁（トイフェルスヴァント）――石の壁（シュタインヴァント）ともいうが――の起源も似たようなもの。そこでは玄武岩の列柱が八十脚尺（フース）から九十脚尺（フース）の高さで垂直に屹立（きつりつ）しており、昔日の大城壁さながらである。同所には悪魔の説教壇（トイフェルスカンツェル）と悪魔の祖母（ばあさま）様の酪乳室もある。これらは一種独特な形状の巌の造化で、玄武岩の砕片の混じった巨大な瓦礫の堆積で、界隈がいかにも不気味な曠野（こうや）であることを告げている。伝承によれば、人類の敵〔＝悪魔〕――かつてはあれほど固く信じられていた――がそれらの胎内に住んでいるのだとか。

ビショーフスハイムから一時間、とある渓流――ホルツベルクとバウエルンベルクの間で八十脚尺（フース）もの高さの巌壁を越え、瀧となって迸り落ち、やがてシュヴァルツバッハの流れになる――に臨むおどろおどろしい峡谷に、深さ数靴尺（シュー）の巌の水盤、悪魔の水車小屋（トイフェルスミューレ）がある。この凹みでは増水した折にはしばしば幾つもの大きな石がごとごとと渦巻き逆巻きながら揺（す）り潰すような勢いで転げ廻る。嵐が来ると、黒装束で巨大な体軀（たいく）の男が巌壁を攀（よ）じ登ったり、攀じ下りたりし、己（おの）が水車の周りを荒荒しく跳びはねながら駈（か）け回るのをよく目撃した、と主張する連中がいる。

七七〇　巌（いわ）の聖母像

麓（ふもと）の踊り（クンツヴィーゼ）の原および同名の農場からごつごつと険しいミルゼンブルクの断崖――ここには稀少な花や薬草が生えている――へ登るとすると、狭い石ころだらけの小径（こみち）が峰へ通じている。この小径は教会道（キルヒヴェーク）という。この道を辿（たど）る者の左手、道のすぐ近くの巌の上に、小さな、彩色された石造りの聖母像が、救世主を懐に抱っこ、野天に鎮座ましましている。敬虔（けいけん）な人たちが手作りした真珠やら冠やらで荘厳（しょうごん）されてはいるが、この荒寥（こうりょう）とした高みのもろもろの悪天候に剝（む）き出しのまま。かつて何人かの信者が、雨風に損なわれないようもっとちゃんとした場所にお守りし

ようと考え、御像が立っている場所からほんの数歩離れた、ただし巌路の右側に、壁龕を設え、小像をここへ鄭重にお移し申し上げた。でも翌日、人人が見に行くと、御像は元の場所に立っていた。こうしたことが相次いで三度あった。像は三度壁龕に運ばれ、三度元のところに戻ったしだい。そこでそれ以上手を触れないことにした。像はまだ全くそう古くはない。足許にはゲオルク・シュテープリングなる名と一六六四年という年数が読める。――聖処女の祝福は村と高みを目指す旅人たちを守護している。決まった祝聖日には数千の人人がこの峨峨たる山と断崖に攀じ登って来るのだが、その内のだれかが危険な顚落をしたとか体に怪我をしたなんてとんと耳にしたことはない。今日でもイエスの優しい母御は巌路の傍らのちっぽけな差し掛けに過ぎないお堂の中に吹き曝しでおられる。装身具がほんのちょっぴりとでも掠め取られたなんてことは皆無。

訳注

(1) コーブルク公某　ein Herzog zu Coburg.　だれかは不明。コーブルクは一五八六年から一六三三年の間初めて独立の公国ザクセン＝コーブルク家の首邑とされた。しかしながら同市は一四八五年以降ザクセン選帝侯の所領（DSB七〇四注参照）であり、既に一五二四年市に対し宗教改革が推輓されたので、「城の礼拝堂付き聖職者」Schloßkaplanを「司祭」ではなく「牧師」とし、一般に「修道士」と訳されるMönchを「僧侶」とした。なお現コーブルクは現バイエルン州北部上フランケン行政管区の都市（現人口四万一千余）で、コーブルク郡郡庁所在地。

(2) そこで拘禁されたが、待遇はまずまずだった　dort in leidlicher Verwahrung gehalten wurden.　この大貴族間の交戦による捕虜たちは、やがてしかるべき身代金が支払われれば、釈放されるはずだった、と思われる。

(3) 親方ヘンマーリング　Meister Hämmerling.　悪魔、騒霊、死刑執行人、手品師、道化師の異名。ここではもちろん刑吏を指す。DSB六二五では山の精として登場。同注参照。

(4) 角笛が吹かれたのを耳にした公爵　der Herzog vernahm den Schall.　公爵は、一人だけ処刑する、との命令も撤回していたのであろうか。いずれにせよ、刑吏にきちんと指示をしていなかったとすれば、司法責任者として無責任極まる。また、一人を処刑するはずだったのなら勿論、そうではなくて、青年貴族たちを脅かして懲らしめるだけが目的であったにしても、公爵が現場に立ち会

うのが当然。しかし刑吏が剣を揮うのを直ちに制止できなかったのだから、公爵は処刑台の傍にいなかったのであろう。それにそもそもこの程度のことで公爵がせっかく捕虜にした青年貴族（一人にせよ十二人にせよ）に死刑を宣告するわけはない。筋の通らぬことだらけである。多分ベヒシュタインは伝説資料をきちんと纏めなかったのであろう。

(5) あのトゥート・オーゼル　die Tut-Osel.　ＤＳＢ三一七およびＤＳ三一二参照。

(6) 万霊節　der Tag Allerseelen.　カトリック教会における祝日で、死者を追悼する日。十一月二日。

(7) 皇帝リキニウス　Kaiser Licinius.　ローマの共同皇帝（在位三〇八―二四）。

(8) 公現祭（エピファーニア）　Epiphanias.　一月六日。

(9) ホレ夫人が火炙りになる　Frau Holle wird verbrannt!　原文は上記の通り。

(10) フルダ　Hulda.　ドイツ語圏の矮小化された大地母神的存在とも言えようホレ夫人は、地方によりフルダとかベルヒタ、ベルヒタなどと呼ばれる。

(11) クロック村　Dorf Crock.　現テューリンゲン州南部ヒルトブルクハウゼン郡の自治体アウエングルントの一部。村の北方、標高五三〇メートルのイルメルス山（ベルク）上に聖ファイツ教会（ザンクト・キルヒェ）がある。

(12) イルミンの泉（イルミン・ボルン）　Irminborn.　既出のイルメンの泉（イルメンブルンネン）Irmenbrunnen に同じ。

(13) ピサ・ベトゥレヘミティカ　Pisa bethlehemitica.　「ベトゥレヘムの豌豆」の意。

(14) ウンマーシュタット　Ummerstadt.　現テューリンゲン州ヒルトブルクハウゼン郡の自治体。ドイツ最小の都市の一つ（現人口五〇〇足らず）。ＤＳＢ一九〇に名のみ既出。

(15) シルダの市民的愚行（シルトビュルガーシュトライヒェ）　Schildbürgerstreiche.　民話のいわゆる「愚か村」的逸話のこと。都市シルダ Schilda については ＤＳＢ一九〇注参照。

(16) ヴァーズンゲン市　Stadt Wasungen.　ヴァーズンゲンはＤＳＢ一九〇に名のみ既出。詳しくはＤＳＢ七三九参照。

(17) レーン山地のディッティス村　Dorf Dittis an der Rhön.　ＤＳＢ九四八にも名が出る。

(18) ブレス　Bleß.　テューリンゲン片岩山地（テューリンガー・シーファーガービルゲ）のブレスベルク（標高八六六・九メートル）。アイスフェルト北東約七キロ。

(19) シュテルツエン　Stelzen.　現テューリンゲン州ザーレ＝オルラ郡の小都市タンナの一部。

(20) シュテルツエンの樹（シュテルツェンバウム）　Stelzenbaum.　シュテルツエンには「シュテルツェンバウムの奇蹟」das Wunder vom Stelzenbaum と呼ばれた巨木――伝説によれば十五世紀に牧人の杖から生えたという――があった。これは一八四九年の大嵐で吹き折られ、一九二六年木株がコンクリートで包まれた。現在その近くに新たなシュテルツェンバウム（これは樹齢百二十年余に過ぎない）が聳えている。

(21) このシュテルツェンバウムの樹はイスの泉である　Dieser Stelzenbaum ist die Quelle der Iß.「シュテルツェンバウムの樹」がこのように突然言及される。ベヒシュタインが何を言いたいのか訳者にはまるで分からない。「イスの泉」Brunnen Iß はシュトゥットガルトにあるが……。

(22) 伝説では両語まぜこぜ　die Sage vermengt hier beide.　エルザスの「巨人の玩具」伝説でもそうだが、巨人族はしばしば山城に居住して人間族を支配する領主＝騎士階級とされている。それゆえ、ベヒシュタインが依拠した伝説資料でも、「巨人たち」Riesen と「騎士たち」Ritter の両語が区別されずに使われているのであろう。

(23) ハンシュタインの殿たち　die Herren von Hanstein.　アイヒスフェルトから出た古い貴族の家柄。ヘッセン、テューリンゲン、ポンメルンにまで勢力を拡張した。

(24) 避難所（アジュール）　Asyl.　DSB四五三注参照。

(25) 徴募官　Werber.「兵士徴募士官」Werb(e)offizier のこと。

(26) マイニンゲン高地（マイニンガー・オーバーラント）　Meininger Oberland.　かつてのザクセン＝マイニンゲン公爵領内、現テューリンゲン州南部ゾンネベルク郡の歴史的名称。十九世紀前半から用いられたが、一九二〇年ザクセン＝マイニンゲン公爵領が無くなると、この名称も消滅した。

(27) メッシェンバッハ村　Dorf Meschenbach.　ゾンネベルク郡の自治体フランケンブルックの一部。

(28) ドゥリゲライン　Drigelein.「―ライン」-lein はもとより縮小語尾だが、「ドゥリゲ」の意は不明。

(29) ちいちゃな縁無し帽　Mützchen.　被っていると人間には姿が見えない帽子。「隠れ頭巾（ネーベルカッペ）」Nebelkappe。

(30) 占い棒（ヴュンシェルルーテ）　Wünschelrute.　DSB三九六注参照。

(31) 桴（とねりこ）　Esche.　西洋桴。樹高二〇―三五メートル、直径二メートルにも達する。

(32) ヘルトブルク行政区　Amt Heldburg.　ヘルトブルクは現テューリンゲン州最南部ヒルトブルクハウゼン郡の都市バート・コールベルク＝ヘルトブルクの一部。

(33) シュヴィッカース――俗にシュヴァイカース――ハウゼン　Schwickers, vulgo Schweickershausen.　現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の村。二〇〇七年暮れ以降自治体グループフェルトの一部。

(34) ヘリンゲン　Hellingen.　現テューリンゲン州ヒルトブルクハウゼン郡の自治体。

(35) 三位一体の日曜日（トリニタティス・アム・ゾンターク）　Trinitatissonntag.　聖霊降臨祭後の最初の日曜日。

(36) 我らは専ら祈（いの）りをなすことと御言（みことば）に事（つか）ふることとを務めん　wir aber wollen anhalten am Gebet und Amte des Wortes.　新約聖書使徒行伝六章四節。

(37) シュトラウフハイン　Straufhain.　現テューリンゲン州ヒルトブルクハウゼン郡シュトロイドルフ村近くのシュトラウフハイン山上にある中世の城の廃墟（かつての居館（パラス）の遺構があるのみ）。シュトロイドルフは自治体シュトラウフハインに属する。

(38) シュトロイドルフ　Streudorf.　前掲注参照。

(39) レームヒルト　Römhild.　現テューリンゲン州南西部ヒルトブルクハウゼン郡の古い小都市。かつてのザクセン＝レームヒルト公国（一七一〇年断絶）の首邑。

(40) 大小両グライヒ山（ベルク）　die beiden Gleichberge, der große und der kleine.　レームヒルトのぴったり東部にある。

(41) 火男（フォイアーマン）　Feuermann.　feuriger Mann'とも。（煉獄で）生前犯した罪を償っている彷徨える死者とされる。かっかと燃え盛っている姿で徘徊する。このような罰を受けるのはとりわけ、土地の境界標石を動かした罪、とされることが多い。DSBにたびたび登場。

(42) テマールの町　Themar.　現テューリンゲン州ヒルトブルクハウゼン郡の町。

(43) グライヒアムベルク　Gleichamberg.　現在はレームヒルトの一部。後掲注グライヒャーヴィーゼンと同様散村（散らばった孤立家屋から成る村落）。

(44) グライヒャーヴィーゼン　Gleicherwiesen.　現在はレームヒルトの一部。

(45) トラップシュタット　Trappstadt.　現バイエルン州下フランケン（ウンター）行政管区レーン＝グラープフェルト郡の町。

(46) オーバーレスフェルト　Oberreßfeld.　現バイエルン州下フランケン（ウンター）行政管区レーン＝グラープフェルト郡の自治体ズルツドルフ・アン・デア・レーダーヘッケの一部。

(47) ヘッケンミューレ亭　die Heckenmühle.　旅籠屋であろうか。直訳「囲いの粉挽き場」。

(48) 靴尺（シュー）　Schuh.　昔の長さの単位。約三十センチ。

(49) 脚尺（フース）　Fuß.　フィート。

(50) ルーテ　Ruthe.　昔の長さの単位。二・八七―四・六七メートル。

(51) シュタイガーヴァルト　Steigerwald.　バイエルン北部標高四九八・五メートルの中級山岳地帯。

(52) ダッハバッハ　Dachbach.　現バイエルン州中（ミッテル）フランケン行政管区ノイシュタット・アン・デア・アイシュバート・ヴィンツハイム郡の町。

(53) 軍医　Feldscheer.　直訳「従軍理髪師」。DSB四九八注参照。

(54) ヘンネベルク＝シュロイジンゲン伯爵家　die Grafen von Henneberg=Schleusingen.　ヘンネベルク伯爵家はテューリンゲン山地（ヴァルト）とマイン川の間に所領を有したフランケンの古い貴族の家柄。十一世紀末から一六六〇年まで続いた。シュロイジンゲンは現テュー

リンゲン州ヒルトブルクハウゼン郡の小都市で、テューリンゲン山地南斜面に位置する。ヘンネベルク＝シュロイジンゲン伯爵家は一二七四年ヘンネベルク伯爵家が三つに分かれたものの一つ。なおヘンネベルク（「雌鶏山」の意。DSB七二九参照。この話では「ヘンネンベルク」となっている）は現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の小さな自治体で、ヘンネベルク伯爵家発祥の地である同名の城山が近くにある。

(55) フェスラ修道院　Kloster Veßra.　現テューリンゲン州ヒルトブルクハウゼン郡の村クロスター・フェスラ。元来はここに村の名の由来であるフェスラ修道院（十二世紀に創建、十六世紀に廃絶される）があった。

(56) マースフェルト　Maßfeld.　ヘンネベルク伯爵領の前身ヘンネベルク代官領だった地域。

(57) セイレーン　Sirene.　ドイツ語「ジレーネ」。ギリシア神話に出る上半身女性、下半身鳥（後には魚）の姿をした妖怪。海の岩礁から美しい声で近くを通る船に歌いかけ、聞き惚れて航路を誤った水夫たちが岩礁で難破すると、彼らを喰らった、という。ホメロスの『オデュッセイア』に登場。

(58) シュロイゼ、エルレ、ナーエ　die Schleuse, die Erle und die Nahe.　いずれもテューリンゲンの小河川。

(59)(60) 三つの drei.　字母は四つだが、その内V（＝U）は「そして」の意の接続詞 und の頭文字なので、重要ではない、ということか。おお永遠よ、汝、雷の言葉よ　O Ewigkeit du Donnerwort.　原文は上記の通りでコンマが無いが、ルター派教会で全会衆によって歌われるコラール O Ewigkeit, du Donnerwort.°。日本で一般に行われている訳語は「おお永遠、そは雷の言葉」。J・S・バッハの有名な教会カンタータに使われてもいる。

(61) クロアチア兵によるシュロイジンゲン襲撃前　vor dem Croatischen Einfall in Schleusingen.　一六三四年皇帝軍将軍イゾラニ伯率いるクロアチア騎兵団（傭兵隊）がシュロイジンゲンを襲撃、掠奪、破壊した。

(62) 数珠　Nüsterband.　'Nüsterband'はヘンネベルク方言であり、伝説の一資料とも思われる夭折したシュロイジンゲンの詩人の韻文にある。'Nüster'を'Noster'、すなわち'Paternoster'（主の祈り）と考えたが、訳に自信はない。

(63) 真珠の花束　Perlenstrauß.　こうしたドイツ語名称を持つ真珠製宝飾品・真珠をあしらった花束などが存在することは確かだが、この物語の場合どういうものか具体的には分からない。識者のご教示を俟つ。

(64) フリーデル　Friedel.「フリーダー」Frieder の愛称。

(65) ダガマリ　Dagamari.　テマールの前身は既に七九六年タガマリ Tagamari として文書に登場。

(66) ホルのおばちゃんがお床を振るってら　die Fra Holl schüttelt ihr Bett aus.「フラ・ホル」とは「ホレ夫人」Frau Holle のこと。このいわば矮小化されたドイツ語圏の大地母神は勤勉な主婦同様家事に熱心で、ベッドの羽根布団を丹念に振るって膨らませる。そ

の際抜けて飛び散る羽根が人間界では雪になる。ＫＨＭ二四「ホレ夫人」参照。

(67) ガウ伯爵家　Gaugrafen.「ガウ」Gau はゲルマン民族の古い行政区で、自然境界で地域として纏まっていた。中世ドイツでは「ガウ伯爵」はガウにおける税の取り立て、ガウ内の男爵・伯爵の統制に当たり、場合によってはこれら貴族を裁くこともあった。すなわちガウにおける王・皇帝の代理人である。

(68) グラープフェルト　Grabfeld.　グラープフェルトないしグラープフェルトガウ Grabfeldgau はテューリンゲン南部とバイエルン北部の境界地域にあり、現バイエルン州下フランケン行政管区レーン＝グラープフェルト郡の大部分を占める。かつての東フランケン・ガウに当たる。

(69) ヘンネベルク城　der Burg Henneberg.　ベヒシュタインはこの物語で「ヘンネンベルク」、「ヘンネベルク」を特に説明を附することなく併記している。

(70) ヴェンド人　die Wenden.　ヴェンド人はこれまで何回かＤＳＢに登場した、ゲルマン人居住地周辺のスラヴ族の分派。しかし、後出「キリスト紀元四八五年」から類推すると、どうやらヴァンダル族のローマ侵入を指しているらしい。ヴァンダル族はゲルマンの一部族で北アフリカに王国を築き、四四二年王ガイセリックに率いられてローマに侵攻、恐ろしい掠奪・破壊を行った。

(71) この者はかの大門閥デ・コルムナ家、すなわち円柱殿と呼ばれた一族の出身　das war einer von der Säule geheißen, de columna, von dem großen Geschlecht.　この一族とは盛期・後期中世およびルネサンス時代のローマで大いに勢力のあったコロンナ家 La famiglia Colonna。コロンナなる姓は祖先が「〔皇帝〕トラヤヌス〔のダキア戦争勝利〕記念柱」（ラテン語「コルムナ・トライアナ」Columna Traiana・イタリア語「コロンナ・トライアナ」Colonna Traiana）の傍に住んでいたことに由来するとか。

(72) 三文白麺麭　Dreierssemmel.　ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在では普通 Dreier Semmel。三プフェニヒで買える小型の丸い白パン。中近世の庶民にはご馳走である。

(73) 「ヘンネ・フーツ・ラント」、すなわち「雌鶏が邦を護る」　Henne huts Land. Die Henne hütet das Land.　原文は上記の通り。

(74) 君侯の堂堂たる騎士様式の城塞　ein stattlicher Burgbau des Landesherrn in ritterlichem Styl.　ドイツ農民戦争で破壊されたランデスヴェーア城の廃墟に、ザクセン＝マイニンゲン公の別邸として、一八三六年から一八四〇年に掛けて築かれた。

(75) ミュンナーシュタットとキッシンゲンの間にあるリュートリンゲン　Rüdlingen, zwischen Münnerstadt und Kissingen.　ミュンナーシュタットもキッシンゲンも現バイエルン州下フランケン行政管区バート・キッシンゲン郡の都市。リュートリンゲンは未詳だが村落規模だったらしい。

(76) 鶏城　Huhnburg.　ベヒシュタインは些細な表記違いには無頓着だが、ここでも「フーンベルク」と「フーンブルク」を同様に

扱っている。

(77) ヴュルツブルク　Würzburg.　現バイエルン州下フランケン行政管区にある独立都市。マイン河畔に位置し、バイエルン州第四の大都市（現人口十三万ほど）。ヴュルツブルク司教座都市。フランケン・ワインの集散地。ロマンチック街道の起点。

(78) ノイブルン　Neubrunn.　現バイエルン州下フランケン行政管区ヴュルツブルク郡の小都市。

(79) かのランツヴェーアの古城塞――現存――と　mit der alten Burg Landswehr.　DSB七二九参照。

(80) なにしろこの湖は大洋と繋がっているのだから　denn er sei eine Ader des Meeres.　訳は類推に過ぎない。識者のご高教を俟つ。

(81) 細長耳小人　Schlitzöhrchen.　「細長耳小人」ないし「尖り耳小人」Spitzöhrchen は北フランケンの住民にはよく知られており、ザーレ河谷およびシュトロイ河谷に出現するという。人間を苛めて楽しむ水の精。ベヒシュタインは「ニクス」Nix（男の水の精）と考えているが、「ニクセ」Nixe（女の水の精）としている伝説もある。

(82) 鋏虫　Ohrwurm.　直訳「耳虫」。眠っている人の耳の中に潜り込む、という伝承から、この名が付いたとか。

(83) 同修道院に絵のように美しい若い下男が仕えていた　im selben Kloster diente ein junger, bildhübscher Knecht.　修道院には修道士ではない、平信徒が料理番や豚飼いなどの労役をこなすために雇われていることはあったが、当然ながら、男子修道院のそれは男性のみ、女子修道院のそれは女性のみだったはず。

(84) ある賢い男に　einem weisen Manne.　これまでにも注記したが、「賢い男」weiser Mann・「賢い女」weise Frau は、伝説・民話においては、単に聡明な男女を指すのではない。人生経験豊かで世故に長け、医術などの心得もあり、途方に暮れた庶民に頼られる存在。もっともまかり間違えば、魔法使い・魔女などの悪評を立てられ、迫害されることもあったであろう。

(85) 怒りノ谷　vallis furoris.　原文は上記の通り。ラテン語。

(86) 貧しい若者　ein armer Junge.　ヨーロッパ十五世紀から十八世紀に掛けてのいわゆる魔女狩りの対象は妖術師 Hexer と魔女 Hexe だったのであり、男性も犠牲者の多くを占めた。

(87) マースフェルト行政管区で　im Amt zu Maßfeld.　当時のヘンネベルク伯爵領の行政管区「アムト・マースフェルト」Amt Maßfeld。

(88) 魔女の階段　Hexentreppe.　古い軍事用語では「隘路」を指すので、これも山の入り口辺りの谷道の名称かも知れない。

(89) ヴィルヘルム会派　Wilhelmiter.　「ヴィルヘルム聖者の隠者修道会」Orden der Eremiten des Heiligen Wilhelm = Ordo Fratrum Eremitarum Sancti Wilhelmi。とりわけイタリア、フランス、ドイツ、スイス、オランダで唱導された修道会。

(90) シュヴァーベンのとんちき　Schwabenstreich.　シュヴァーベンは現在バイエルン州の一行政区画だが、中世初期には広大なシュ

ヴァーベン公国の版図を指した。一般的にはアレマン語の一つシュヴァーベン語Schwäbischを話す地域がシュヴァーベンでよかろう。中心はウルム（現バーデン＝ヴュルテンベルク州）。「シュヴァーベンシュトライヒ」は直訳すれば「シュヴァーベン人の行為」だが、歴史的用法ではもっぱら、愚かしい、あるいはへまな行為、との含意があるので、「シュヴァーベンのとんちき」とした。これを主題とする代表的民話としてはKHM119. Die sieben Schwaben――邦訳。金田鬼一訳「シュワーベン七人男」（『完訳グリム童話集』、岩波文庫）、野村泫訳「シュヴァーベン人の七人組」（『完訳グリム童話集』、ちくま文庫）――およびＤＭＢ二「シュヴァーベン七人衆の昔話」Das Märchen von den sieben Schwaben――ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著・鈴木滿訳「『ドイツ昔話集』（一八五七）試訳（その六）」（『武蔵大学人文学会雑誌』第四十二巻第二号、平成二十二年十二月）を参照されたい。因みに後者の方が前者より収録逸話がずっと多い。シュヴァーベン人はお人好しだが懐柔し難く、あるいは粗野、あるいは繊細、勤勉で倹約、時とするとくよくよ悩み、気持ちが傷つき易く、かと思えば旨い物好きで屈託がない。こうしたシュヴァーベン人に対する他地方のドイツ人の揶揄は既に十五世紀に夥しく知られていた。十六世紀の職匠詩人ハンス・ザックスの作品でも取り上げられている。

(91) ＤＳＢ一九〇　Sage Nr. 190.「北国版嘲り綽名とシルダの市民」Spottnamen und Schildbürger im Norden.　ＤＳＢ一九〇にはＤＳＢ七三九に挙げられている町町の逸話がかなり具体的に紹介されている。「シルダの市民」の「シルダ」についてもＤＳＢ一九〇で注記したことはＤＳＢ七一六で既に断った。「シュヴァーベン」もＤＳＢ一九〇で注記したが、前掲注におけるより詳しく記した。

(92) ヴァーズンゲン　Wasungen.　現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の小都市（現人口三千四百足らず）。

(93) ウンマーシュタット　Ummerstadt.　ＤＳＢ七一六参照。

(94) シュネット　Schnett.　現テューリンゲン州ヒルトブルクハウゼン郡の自治体マッサーベルクの一部。

(95) 近代、愛する祖国ドイツにおいて、貴賤取り混ぜ少なからぬ浮浪人に関し、これに倣った処置が行われたund ist in neuer Zeit im lieben deutschen Vaterlande mit manchem Strolch, vornehmen und gemeinen, ihnen nachgethan worden.　革命運動家を死刑ではなく追放刑に処したということであろう。

(96) 現在はしばしば驢馬〔＝莫迦〕自身が凝乳〔＝くだらぬ事〕の上に坐り込み……気の利いたもの一つ孵せない　häufig die Esel selbst über dem Quark brüten, und nichts Gescheidtes zu Tage fördern.　保守派のベヒシュタインはドイツ諸邦統一前のさまざまな革新的動きを苦苦しく眺めているわけ。

(97) ヴァーズンゲンの衆と猫に関する話　mit der Katze ging es ihnen .....　鼠の害に困ったヴァーズンゲンの町民が猫を買った。餌に

何を食べるか、と訊いたところ、売り主は「この猫は何でも喰うよ」Die Katze frißt alles.と答えた。そこで「わしらも喰われちまう」と大恐慌を来した町民連は……。

(98) 運べる凱旋門（がいせんもん）の話　von der tragbaren Ehrenpforte.　未詳。

(99) つい先だっての名高い一八四八年の愚行　von denen letztbekannten Streichen des Jahres 1848.　一八四八年のヨーロッパにおける一連の革命運動およびドイツのフランクフルト国民議会を指すのであろう。

(100) フラウエンブライトゥンゲン　Frauenbreitungen.　現テューリンゲン州シュマルカルデン＝マイニンゲン郡の自治体ブライトゥンゲン＝ヴェラの一部。

(101) それほど重かったのである　so schwer war er.　後の話で分かるように、前掛けに入るくらいの大きさなのだが、ひどく重いわけ。

(102) 強力（ごうりき）ハンスみたいな力持ち　ein starker Hans.　「強力ハンス」der starke Hans——訳語は金田鬼一訳（『完訳グリム童話集』、岩波文庫）による。野村泫（ひろし）訳（『完訳グリム童話集』、ちくま文庫）では「たくましいハンス」——はKHM166. Der starke Hans の主人公で、大層力が強く、囚われの姫を邪な小人から救い、次いで自分を裏切って姫を攫った二人の仲間から姫を奪い返して、結婚する。

(103) 滑り石（グリットシュタイン）　Glittstein.　滑らかでずんぐりしたこの黒石はブライトゥンゲンに現存。同地の伝説にいわく。遙かな昔、亜麻布織り工は犯した重罪を贖うため、これを前掛けにくるみ、二時間行程離れたプレスクッペ Preßkuppe からフラウエンブライトゥンゲンの教会の前まで運ぼうとした。ほとんど行き着こうとしたのに、教会から二百歩足らずのところで前掛けから滑り落ちた、と。「滑り石」（グリットシュタイン）とはそれが落ちている場所の名だ、との説明もある。

(104) 古い山城リーベンシュタイン　das alte Bergschloß Liebenstein.　テューリンガー山地（ヴァルト）南西斜面標高四六〇メートルにあるかつての山城で、現在は廃墟。

(105) 悪魔が跣（はだし）で歩くのを見た　den Teufel haben barfuß laufen sehen.　「悪魔が跣で歩くのを見る」den Teufel barfuß laufen sehen.は「悪魔が訪問する」der Teufel macht seinen Besuch.という意味のテューリンゲンの言い回し。十九世紀半ばの文献にある。

(106) 悪魔の隠れ処（トイフェルスクッテ）　Teufelskutte.　Kutte は盗賊などの隠語.Kitte（「家」「穴」）のこと。ザルツンゲン近郊の小さいが深い池の名。DS B七四九参照。

(107) ヒルトブルクハウゼンの諺（ことわざ）　ein Hildburghäuser Sprüchwort.　ヒルトブルクハウゼンは現テューリンゲン州ヒルトブルクハウゼン郡の郡庁所在地。

(108) 確かでないこと分かりゃせぬ　nix kwisses wäß mer nett.　原文は上記の通り。.Nichts Gewisses weiß man nicht.である。

(109) アルテンシュタインの城館（やかた） Schloß Altenstein. 現テューリンゲン州ヴァルトブルク郡の保養地バート・リーベンシュタインの一部アルテンシュタインにある。一七三六年マイニンゲン公爵家のカウントリー・ハウスとして建てられた。ただしそれ以前ここには中世の巨大な城郭アルテンシュタインがあり、これは十六世紀半ば破壊され、数年ならずして再建されたが、一七三三年火災に遭った。

(110) ……ザクセン選帝侯が秘かに命じたものである ..... welche der Kurfürst von Sachsen heimlich dazu beauftragt hatte. ＤＳＢ四七一参照。もとよりルターを皇帝から保護するためだった。

(111) ブホーニエン Buchonien. ブホーニアBuchonia。レーン盆地北部とフルダ盆地地域の古い名称。「山毛欅（ブーヘ）の生い繁る邦」Buchenlandの意ではなく、ケルトないしより古代の言語で「丘の邦」から出たらしい。

(112) 彼らは馬の蹄鉄（ていてつ）を後ろ前に取り付けて跡をくらまし sie schlugen den Pferden die Hufeisen verkehrt auf, damit ihre Spur verborgen bliebe. 説明不足である。普通の蹄鉄を馬の蹄に逆向きに装着できるわけはない。蹄鉄自体の裏が逆向きになっていたもの。それゆえ追跡者が馬の蹄跡だけから判断すると、盗賊団の逃げた方向からこちらへ向かっているように見えるのでとまどってしまい、盗賊団が行方をくらますのに役立ったのであろう。なお、蹄鉄裏面が偶蹄類の蹄の形になっていて、追跡者は足跡を牛群のそれと判断、混乱した、というものもあったそうだが、これは英国の話。

(113) 身の丈がとても高く、五靴尺（シュー）以上もある場所なのに、坑道の天井に頭が届いた so groß, das über fünf Schuh hoch war, anden First anstieß. 「五靴尺（シュー）」は一五〇センチほど。この描写では山の精が巨大だったとは受け取れない。

(114) 膝当て附き革洋袴（ズボン） Kniebügel. 「クニービューゲル」は「膝当て革」と訳せるが、この場合は昔の鉱夫特有の服装の一つで、膝当ての附いた皮革製ズボンである。

(115) 火男（ファイアマン） feuriger Mann. Feuermann'とも。ＤＳＢ七二三注参照。

(116) ゾーロ Solo. 一人で数人を相手とするカード遊び。

(117) メッツェ Metze. 約三·四四リットル。

(118) 真実（まこと）なるやをたれぞ知る Wer weiss ob's wahr ist? 原文は上記の通り。

(119) 悪魔の隠れ処（トイフェルスクッテ） Teufelskutte. ＤＳＢ七四二参照。

(120) 農業用建物（ファームビルディング） Ökonomiegebäude. ここでは、厩、干し草置き場、サイロ等を集合した農業用建築物を言っている。

(121) 鍵の花（さくらそう） Schlüsselblume. 桜草。

(122) 鐘の花（ふうりんそう） Glockenblume. 風鈴草。

(123) 羊歯の種（ファレンザーメン）――羊歯の種（ファールザーメン）とも言うが　Farrensaamen, auch Fahrsaamen.　原文は上記の通り。「羊歯の種」は現在‚Farnsamen'と綴る。「ファルンザーメン」である。

(124) 所持者の姿を見えなくもする　er macht auch unsichtbar.　DSB五〇〇注参照。ここで羊歯の種に関する民間信仰を記しておいた。

(125) ゲルシュトゥンゲン　Gerstungen.　現テューリンゲン州ヴァルトブルク郡の自治体。十八世紀半ば以降ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナッハ公国に属したが、中世の一時期その一部が城伯（ブルクグラーフ）ブランデンブルクの支配下にあったことがある。

(126) 屠畜場　Fleischscharrn.　原文は上記の通り。‚Fleischscharn'すなわちSchlachthaus'のこと。

(127) 魂哭山（ヘルゼレンベルク）　Hörseelenberg.　DSB四五七参照。

(128) ベルカの町　Berka.　現テューリンゲン州ヴァイマラー・ラント郡の小都市バート・ベルカ。

(129) シュピヒラ村　Spichra.　現テューリンゲン州西部ヴァルトブルク郡の自治体クラウトハウゼンの一部。

(130) 土の洞窟（エルドロッホ）　Erdloch.　原文は上記の通り。‚Erdloch'の誤植。

(131) 右岸に　am rechten Ufer.　原文は上記の通り。しかし、「左岸に」am linken Ufer の誤りかも知れない。小人族がヴェラ川右岸の棲処からどこか他郷へ退去して移住したというのがこの伝説の骨子なら、そうでないとおかしい。

(132) マイスナー　Meißner.　東ヘッセン山地（オスト・ヘルクラート）北部、フルダ＝ヴェラ山地（ベルクラート）にある最高部標高七五三・六メートル（カッセラー・クッペ）の高い山塊。

(133) シュネーコプフ　Schneekopf.　DSB四九二、四九三、四九四参照。

(134) ボックレート　Bocklet.　現バイエルン州下（ウンターフランケン）行政管区バート・キッシンゲン郡の保養地バート・ボックレート。

(135) しかし子どもを連れて来てしまうこともある　nimmt aber auch welche mit.　取替え子をすることがある、との意味。

(136) フルダ夫人　Frau Hulda.　DSB七一四でもペヒシュタインはホレ＝フルダとしてフルダに言及している。七一四注でも説明したが、フルダはホレ夫人と同様の属性を持つ民間信仰の女神であり、ホレ夫人の異名の一つと考えてよい。なお言うまでもないが、こうした神話・伝説・民話の登場形態が木版画等に描かれても、それはもとより一画家の想像の所産に過ぎない。現にF・W・ハイネFriedrich Wilhelm Heineの挿絵（一八八二年）ではKHM二四のホレ夫人が中年の高貴な美女に描かれていて、以下のペヒシュタインの描写とは著しく相違するが、どちらかが正しいという問題ではない。

(137) ペトラルカの『幸運の書』　Petrarchä Glücksbuch.　イタリアの詩人、学者、人文主義者フランチェスコ・ペトラルカFrancesco Petrarca（一三〇四―七四）が一三五四年から六七年に亘り、対話形式で著した*De remediis utriusque fortunae* の独訳書の一つ *Glückshuch*. Augsburg 1539. を指す。

(138) シュパンゲンベルク　Spangenberg.　現ヘッセン州北東部シュヴァルム＝エーダー郡の小都市。市を見下ろす城山にはシュパンゲンベルク城がある。これは二世紀以上に亘りヘッセン方伯家の居城、次いで狩りの館として利用され、後、要塞、監獄、山林学校となった。

(139) かの勇猛果敢なテューリンゲン女性ゾフィーア　die muthige Thüringerin Sophia.　ＤＳＢ四六七参照。

(140) 鉄方伯（デア・アイゼルネ）と添え名されたヘッセン方伯（ランドグラーフ）ハインリヒ　Heinrich, zubenamt der Eiserne, Landgraf von Hessen.　ハインリヒ一世の子息オットー一世の第三子の次男。すなわちハインリヒ二世の甥の一人。

(141) 死にたがるやつは死にはせぬ　Hofftod stirbt nicht.　原文は上記の通り。

(142) 学者だったヘルマン　Hermann, den Gelehrten.　聖職に就くため神学を学んでいたのである。

(143) その名も高い偉大なフィリップ寛大方伯（デア・ホッホヘルツィゲ）　der große hochberühmte Philipp der Hochherzige.　ヘッセン方伯（在位一五〇九―六七）フィリップ一世。政治や戦争の際個人的に示したその寛大さによって「寛大方伯（デア・グロースミューティゲ）」der Großmütigeと添え名された。宗教改革とルネッサンス時代の神聖ローマ帝国における最も重要な諸侯・政治的指導者の一人。ドイツ最初の新教大学マールブルク大学を創立した。

(144) 四分一（オルツ）グルデン　Ortsgulden.　「オルト」Ortは古語で「四分一（しぶいち）」。四分の一グルデン、すなわち四グロッシェン。グルデンはターラーに同じ。

(145) 神の授けたもうものは常に拒めず　Was Gott bescheert, bleibt ungewehrt.　原文は上記の通り。

(146) 伯爵は「ごく大事なもの」には入らない　als welcher zu den „Besten" nicht gehöre.　分からない。多分誤訳であろう。類話ＤＳ五七三では記述が明解である。それによれば、皇帝軍側の条件は、「彼女〔＝伯爵夫人〕は自分のごく大事なものだけを背負うこと、伯爵自身は騸馬には乗らないこと」sie nur ihre beste Sache trüge, auch der Graf selbst nicht auf dem Maulesel ritte.であり、「荷を積んだ騸馬一頭を連れ、彼女が背負えるだけのものを持っての安全退去を許す」sie mit ihrem beladenen Maulesel und dem, was sie auf ihrem Schultern ertragen könnte.であった。なお、ベヒシュタインは「夫人の騸馬と夫人自身が運べるだけのごく大事なものを携えての安全退去」freien Abzug mit soviel von ihren besten Sachen, als ihr Esel und sie selbst würden tragen können.と書いている。

(147) かの言葉を喋（しゃべ）ったバラムの牝（め）騸馬（ろば）　jene Eselin Bileams.　旧約聖書民数紀略二二章二二―三五節参照。

(148) 馬どもの蹄に逆に打ち付けさせた　den Pferden verkehrt aufschlagen ließ.　ＤＳＢ七四四にも同様の記述がある。同注参照。

(149) ツィーゲンハイン　Ziegenhain.　現ヘッセン北部シュヴァルム＝エーダー郡の都市シュヴァルムシュタットの一部。最後のツィーゲンハイン伯ヨーハン二世の死後、一四五〇年ヘッッセン方伯家に帰属。

(150) ヨーハン　Johann.　最後のツィーゲンハイン＝ニッダ伯ヨーハン二世（在位一四〇一―五〇）。強者伯（デア・シュタルケ）と添え名されたのはどうやら肥満していたためらしい。尤も青年時代は大層筋肉質だった由。子の無いまま死んだ。

(151) 強力（こうりき）ハンスみたいな力持ち　ein starker Hans.　ＤＳＢ七四〇注参照。

(152) ツィーゲンハイン伯ハンス　Graf Hans von Ziegenhain.「ハンス」Hans／Hannsは「ヨハネス」Johannesの短縮形。

(153) 方伯令夫人　die gestrenge Frau Landgräfin.　原文は上記の通り。「方伯夫人」ではなく「伯爵夫人」なのだが……。なお彼女はブラウンシュヴァイク＝ゲッティンゲン公オットー一世の姉妹アグネス・フォン・ブラウンシュヴァイク。その夫はツィーゲンハイン＝ニッダ伯ゴットフリート八世。

(154) ボイネブルク城　Boineburg.　ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在では普通Boyneburg。現ヘッセン州ヴェラ＝マイスナー郡の都市ゾントラ管内にある山城の廃墟。主塔（ベルクフリート）の壁が残っている。かつての城主一門はヘッセンの古い騎士階級で、ボイネブルクの殿→男爵→伯爵だった。

(155) 聖木曜日（グリューンドンナースタック）　Gründonnerstag.　復活祭前の木曜日。

(156) ヴェストファーレン王国なるもの　ein Königreich Westfalen.　フランス皇帝ナポレオン一世に支配されたドイツ北西部諸邦・諸領を統合、ナポレオンの弟の一人ジェロームが王となった王国（一八〇七―一三）。建前は独立国だったが、内実はフランスの衛星国に過ぎなかった。ヘッセン選帝侯領も吸収された諸邦の一つで、その首邑カッセルが王国の首都となった。同王国はフランス帝国大陸軍（ラ・グランド・アルメー）の兵站基地として苛酷な負担を強いられた。

(157) ライヒェンザクセン　Reichensachsen.　現ヘッセン州ヴェラ＝マイスナー郡の自治体ヴェーレタールの一部。村だった時にはヘッセン＝カッセル方伯家とボイネブルクの殿たちの所領だった。

(158) この奇妙な話　welche sonderbare Historie.　ベヒシュタインの唐突な話題変更には当惑する。しかし訳者としては責任上、初咲きの菫に纏わる「奇妙な話」を以下に紹介いたさねばなるまい。出典：47. Das böse Quiproquo im Schlosse zu Meißen. > Johann Georg／Theodor Grässe: *Der Sagenschatz des Königsreichs Sachsen.* Bd. 1. S.56. Verlag Schönfeld. Dresden 1874.

「マイセンの城館（やかた）の意地悪な取り違エ（キプロクオ）」

以前は、アルブレヒツ城（ブルク）の吹き抜け階段を登ると、奇妙な話が石壁に刻んであるのが見られたものだ。昔むかし、青い菫をなによりも鍾愛した辺境伯夫人がいて、春先、初咲きの菫をいち早く上覧に供した者には結構なご褒美を下し置かれたし、この慶事は

いつもトランペットの吹奏、ティンパニーの連打でお披露目されもした。ある時初咲きの菫を庭で見つけた宮廷執事がとりあえず自分の帽子をその上に被せ、辺境伯夫人の許に伺候、彼女をお付きの上﨟ともどもその場へ案内し、あえかな菫の花を捧げようとした。ところがその間に宮廷道化が全く別の花を帽子の下に置いてこの目論見を滅茶滅茶にしたばかりでなく、好いように罵り、からかった。既に十六世紀フィリップ・ハインホーファーなる御仁がここマイセンでこの話を耳にしている。（後略）。

注：「マイセン」および「辺境伯」についてはＤＳＢ六二一注参照。「アルブレヒツブルク」はエルベ河畔に建つマイセンの美しい古城。

(159) ヘッセン選帝侯ヴィルヘルム一世　Kurfürst Wilhelm I. zu Hessen.　初代ヘッセン選帝侯（在位一八〇三―一二）。ヘッセン＝カッセル方伯だったが、一八〇三年選帝侯の資格が与えられる。ただし、一八〇六―一三年は領土がフランス帝国の傀儡国家ヴェストファーレン王国に吸収されたため、亡命生活を送る。実は一八〇六年神聖ローマ帝国が解体したので、選帝侯も存在しなくなったが、彼は没するまでこの称号を用い続けた。

(160) ドライスィヒアカー　Dreißigacker.　マイニンゲン近郊ドライスィヒアカーの林学講習所（アカデミー）ではベヒシュタインの大恩ある伯父にして養父ヨーハン・マテーウス・ベヒシュタインが所長を務めた。ルートヴィヒ・フォン・エシュヴェーゲがここの学生だったのは彼の在任中である。

(161) 司教レミギウス　Bischof Remigius.　四三七頃―五三三年。ランス司教。四九六年フランク王クロヴィス一世に洗礼を授け、キリスト教徒とした。

(162) キリアン　Kilian.　六四〇―八九年。聖キリアン。アイルランド貴族の家に生まれ、聖職に志し、フランケン、テューリンゲンでの布教に当たり、ヴュルツブルクで殉教。

(163) アーゼンベルク　Asenberg.「アーゼン」Asen、すなわち「アサ神族」は北欧神話の神神の一族で、その主神はオーディン。

(164) 教父たちがヴュルツブルクで殉教死を遂げ　die Gottesmänner in Würzburg den Märtyrertod erlitten hatten.　キリアンはゴツバート公が兄の未亡人と結婚していることを教会法違反として責めたので、これを憎んだ公夫人が公の留守中キリアンとその仲間を殺した。

(165) 司教の里（ビショーフスハイム）　Bischofsheim.　現バイエルン州下（ウンター）フランケン行政管区レーン＝グラープフェルト郡の都市ビショーフスハイム・アン・デア・レーン（現人口四千七百ほど）。

(166) ミルゼブルク　Milseburg.　レーン山地の山（標高八三五・二メートル）。山上には鉄器時代の定住地であるミルゼブルク集落 Oppidium Milseburg の遺構やガンゴルフの礼拝堂がある。北西に繋がる小山にはミルゼブルク城の廃墟が残っている。

(167) メルジーネ　Melusine.　フランスの伝説・民話に登場する蛇尾女身の龍女メリュジーヌMelusine。
(168) ガンゴルフ聖者　der heilige Gangolf.　八世紀のブルグントの騎士で、ピピン王の時代（七六〇年頃？）に殺された。カトリック教会の聖人、殉教者。
(169) 桜草（シュリュッセルブルーメ）　Schlüsselblume.　直訳「鍵の花」。以前にもDSBにちらりと登場した花だが、ここでは宝に満ちた穴蔵を開ける鍵となる花だ、というのである。
(170) ヒルデンブルク　Hildenburg.　現バイエルン州下（ウンター）フランケン行政管区レーン＝グラープフェルト郡の自治体ハウゼンの一部。同名の中世の城の廃墟がある。
(171) 上（オーバー）エルスバッハ　Oberelsbach.　現バイエルン州下（ウンター）フランケン行政管区レーン＝グラープフェルト郡の保養地。
(172) ヴァイスバッハ　Weißbach.　フレンキッシェ・ザーレ川の右の支流。

訂正

分載試訳（その五）

一一四ページ　一行目　ホトストルプ　→　ホトシュトルップ
同　二行目　ホトストルプ　→　ホトシュトルップ

＊一応訂正しておくが、さほどの根拠はない。原文Hotstrupp。「シュトルップ」Struppなる姓があることを知ったので、あるいはこうか、と考え直したに過ぎない。

結びに一言

全くの私事で恐縮千万ですが、平成二十九年度の「人文学会雑誌」に続編を投稿できるかどうか危なくなりました。平成二十八年十月末、胃に病変が発見されたからです。「治療」――それを試みることができたとして――の

ため、体力・気力・知力が衰えればいくら楽な居職といえども不可能になりましょう。L・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）は全一千篇ですので、後二百三十篇残っております。やれやれ、「いざさらば雪見にころぶ所まで」と思って平成二十四年に始めた道楽仕事ですが、八割まで行かずに頓挫とあらば、「ああら、くやしやなあ」と大目玉を剝きたいところですな。――と思うのはぺいぺい役者＝訳者のそれがしだけで、大向こうは「だいこおん、引っ込み時だよう」てなとこでござんしょうけど。

では皆皆様、くれぐれもお達者で。

平成二十八（二〇一六）年十一月

鈴木　滿　謹識